64chPMTを用いたガンマ線イメージャの開発およびプリアンプLSIの設計・開発

青井 敏浩
M042652
広島大学大学院理学研究科物理科学専攻
高エネルギー宇宙・素粒子実験研究室

2006年2月10日

概 要

天体現象の解明において、X 線・ガンマ線領域での天文観測は非常に重要な手段の一つである。1960 年代以降、観測衛星が数多く打ち上げられ、X 線・ガンマ線をともなう天体現象が宇宙のいたるところで起こっていることが明らかになった。しかし、数 100 keV から 数 MeV のエネルギー領域ではコンプトン散乱が支配的であるため、光子の到来方向を特定することは難しい。この領域を精度よく観測する検出器としてコンプトンカメラが考えられる。我々は、近年メタルパッケージ化により小型化が進んできた多チャンネル光電子増倍管 (64chPMT) と GSO シンチレータを用いたガンマ線検出器の開発、およびその検出器とフォトダイオード (PD) を組み合わせたガンマ線コンプトンカメラの開発を行なっている。本論文において、64chPMT(+GSO) とアレイ型 PD を組み合わせたコンプトンカメラを試作したが、位置決定精度の指標である角分解能が実用レベルに達しておらず、コンプトンカメラとして用いることは困難であるという結果を得た。この角分解能低下の主要因は、64chPMT(+GSO) が期待されるエネルギー分解能を実現できていないことであり、その原因を調査するため、シンチレータサイズに対する依存性、ピークホールド回路の有無、温度依存性、ガンマ線の入射位置による分解能・ゲインのゆらぎについて検証した . その結果、入射位置によってゲインのバラツキがあることがわかり、これがエネルギー分解能低下の要因であることがわかった .

コンプトンカメラ等の X 線・ガンマ線検出器は、小型化・多チャンネル化が進んでおり、検出器からの信号を高速かつ低雑音で処理する小型の読み出しシステムとしてアナログ VLSI のニーズが高まっている。我々は ISAS・KEK の協力を得て、64chPMT からの信号を読み出すことを目標としたアナログ VLSI の開発を行なっている。昨年度開発したチップ (K02-32SA) の評価を行なった結果、要求どおりの性能を実現できていたが、このチップには設計が難しいプリアンプ回路は組み込まれていない。そこで本論文では、K02-32SA と組み合わせるプリアンプ回路の仕様を決定することを目的として、プリアンプ LSI の設計・開発を行なった。回路設計を行なうにあたり、ISAS の池田先生の指導をうけることができ、低ノイズ (等価雑音電荷 1000 electron (RMS) 以下)、広ダイナミックレンジ (50 倍 程度) を有するプリアンプ回路を設計することができた。今回、今までは外注していたレイアウト設計も、LSI に対する知識を深めることを目的として、広大工学部岩田研の協力を得ながら我々で行なった。できあがったチップの評価を行なった結果、ノイズレベル、出力波形、リニアリティはほぼシミュレーションどおりの結果を得ることができた。また、実際に 64chPMT(+GSO) に接続しダイノード信号を読み出しところ、100 keV 程度のガンマ線を識別するのに十分なエネルギー分解能を有しており、現在使用しているディスクリートな素子で構成した 64chPMT 用読み出し回路と同等の性能があることがわかった。今後さらなる改良を重ね、K02-32SA の回路と組み合わせることで、1 チップで 64chPMT の信号処理の全行程を行なうことのできる VLSI を開発することが可能となる。

目 次

第 1 章　序論 **9**

1.1 X 線・ガンマ線天文学 9
1.2 研究の背景 9
1.3 研究の概要 10

第 2 章　放射線検出器 **11**

2.1 シンチレーション検出器 11
2.1.1 シンチレータ 11
2.1.2 光電子増倍管 12
2.1.3 位置検出型光電子増倍管 12
2.1.4 64chPMT:H7546 12
2.2 半導体検出器 13
2.2.1 フォトダイオード 15
2.2.2 アレイ型 PD:SPL PD typeB 15
2.3 コンプトンカメラ 15

第 3 章　64chPMT を用いたガンマ線イメージャの開発 **17**

3.1 はじめに 17
3.2 64chPMT とアレイ型 PD を用いたコンプトンイメージング 17
3.2.1 目的 17
3.2.2 セットアップ 19
3.2.3 イメージング能力の評価方法 21
3.2.4 角分解能の見積もり 21
3.2.5 イメージング測定の結果 22
3.2.6 考察 23
3.3 64chPMT のエネルギー分解能の検証 25
3.3.1 目的 25
3.3.2 セットアップ 25
3.3.3 シンチレータの大きさに対する依存性 25
3.3.4 温度による依存性 26
3.3.5 ピークホールド回路を用いた測定 26
3.3.6 LED スポット照射 28
3.3.7 考察 30
3.4 まとめ 30

第 4 章　放射線計測用 VLSI(K02-32SA) の開発 **31**

4.1 VLSI 開発の目的 31
4.2 基本事項 31

4.2.1 ASIC . . . 31
4.2.2 CMOS プロセス . . . 31
4.2.3 LSI 設計の流れ . . . 32
4.3 1 次元アナログ VLSI(K01) . . . 35
4.3.1 開発目的 . . . 35
4.3.2 K01 の概要 . . . 35
4.3.3 評価結果 . . . 36
4.4 1 次元アナログ VLSI(K02) . . . 37
4.4.1 開発目的 . . . 37
4.4.2 K02-32SA の概要 . . . 38
4.4.3 アナログ処理回路の性能評価 . . . 40
4.4.4 リニアリティ . . . 44
4.4.5 まとめ . . . 44

第 5 章 プリアンプ LSI の設計・開発 47
5.1 開発目的 . . . 47
5.2 設計条件 . . . 47
5.2.1 要求及び設計仕様 . . . 47
5.2.2 検出器の性状 (64chPMT(アノード)+GSO) . . . 48
5.3 開発スケジュール . . . 48
5.4 システム設計 . . . 49
5.4.1 試作案 . . . 49
5.4.2 回路構成 . . . 50
5.4.3 チップの構成 . . . 50
5.5 回路設計 . . . 53
5.5.1 荷電増幅回路の構成 . . . 53
5.5.2 増幅要素の構成 (タイプ A1) . . . 54
5.5.3 増幅要素の構成 (タイプ A2) . . . 54
5.5.4 高抵抗回路の構成 . . . 55
5.5.5 バイアス回路の構成 . . . 55
5.6 回路シミュレーション . . . 57
5.6.1 シミュレーション用回路の構成 . . . 57
5.6.2 パルス波形 . . . 58
5.6.3 負電荷を入力したときのプリアンプ出力のリニアリティ . . . 59
5.6.4 正電荷を入力したときのプリアンプ出力のリニアリティ . . . 60
5.6.5 ノイズ評価 . . . 61
5.6.6 正極電源 (VDD) に対するノイズ感度 . . . 61
5.6.7 負極電源 (VSS) に対するノイズ感度 . . . 62
5.6.8 スキュー解析 . . . 63
5.6.9 消費電力 . . . 64
5.7 レイアウト設計 . . . 65
5.7.1 レイヤの定義 . . . 65
5.7.2 デザインルール . . . 65
5.7.3 レイアウト . . . 66
5.7.4 レイアウトの検証 (DRC,LVS) . . . 66

5.7.5 注意事項 68

第 6 章 プリアンプ LSI の評価 **70**
6.1 セットアップ 70
6.2 評価および結果 71
6.2.1 消費電力 71
6.2.2 出力波形 71
6.2.3 負電荷を入力したときのリニアリティ 72
6.2.4 正電荷を入力したときのリニアリティ 74
6.2.5 ノイズ評価 74
6.2.6 64chPMT の信号入力 (アノード) 76
6.2.7 64chPMT の信号入力 (ダイノード) 76
6.3 まとめ 79

第 7 章 まとめ **80**

付 録 A プリアンプ LSI のピン対応図および回路図 **81**
A.1 ピン配置一覧表 81
A.2 SPICE ネットリストと回路ブロック図 87

表 目 次

2.1 シンチレータと特性 11
2.2 64chPMT の仕様 14
2.3 64chPMT の特性 (25 ℃の時) 14

3.1 角分解能の見積もりにおける各パラメータの値 22
3.2 光電面の各領域毎の角分解能 23

4.1 K01 チップパラメータ 35
4.2 K02 シリーズ一覧表 38
4.3 K02-32SA チップパラメータ 39

5.1 試作案 49
5.2 MOS 精度の各パラメータへの影響 64
5.3 シミュレーションにおける消費電力 64
5.4 主なレイヤ 66
5.5 デザインルールの例 67

6.1 ピンの役割 71
6.2 実回路における消費電力 71

図 目 次

1.1 観測衛星の感度の比較 (横軸は X 線・ガンマ線のエネルギー、縦軸は感度) 10

2.1 典型的な PMT の構造 12
2.2 メッシュ型 PMT の構造 13
2.3 メタルチャンネル型 PMT の構造 13
2.4 64chPMT(H7546) の基本構造 13
2.5 典型的な半導体検出器の構造 14
2.6 pn 接合面の状態 14
2.7 PIN-PD の構造 15
2.8 A-PD の構造 15
2.9 アレイ型 PD (SPL PD typeB) の図面 16
2.10 コンプトンカメラの原理 16
2.11 多重コンプトンカメラの原理 16

3.1 データ集録の全体の流れ 17
3.2 フロントパネル 18
3.3 ブロックダイアグラム 18
3.4 ガンマ線イメージャのセットアップ 19
3.5 データ集録のタイミングチャート 20
3.6 コリメータ通過後のガンマ線の経路 22
3.7 662 keV のガンマ線を PDarray に入射させたときの、PD 各チャンネルにおけるエネルギースペクトル 24
3.8 アレイ型 PD で散乱されたガンマ線の 64chPMT のダイノードにおけるエネルギースペクトル 24
3.9 イメージング測定によって得られた θ の分布 24
3.10 Area1 の領域における θ の分布 24
3.11 Area2 の領域における θ の分布 24
3.12 Area3 の領域における θ の分布 24
3.13 エネルギー分解能検証のためのセットアップ 25
3.14 GSO(24 mm × 24 mm × 5 mm) を用いて測定したエネルギースペクトル 26
3.15 GSO(18 mm × 18 mm × 5 mm) を用いて測定したエネルギースペクトル 27
3.16 GSO(10 mm × 10 mm × 10 mm) を用いて測定したエネルギースペクトル 27
3.17 -20 ℃における GSO(10 mm × 10 mm × 10 mm) のエネルギースペクトル 27
3.18 製作したピークホールド回路 28
3.19 PH 回路を使用した時の GSO(10 mm × 10 mm × 10 mm) のエネルギースペクトル 28
3.20 64chPMT の光電面の分割位置の対応 29
3.21 LED 照射実験のセットアップ 29

3.22 分割数と ADC チャンネル (パルスハイト) の関係 29
3.23 分割数と分解能の関係 29

4.1 pMOS デバイス構造 32
4.2 アナログ ASIC 設計の流れ 33
4.3 K01 チップの 1 チャンネル当りの回路構成 35
4.4 チップの構成図 37
4.5 K02-32SA チップの回路ブロック図 40
4.6 K02-32SA セットアップ 41
4.7 正極性入力時の極性切替え回路後の波形 41
4.8 負極性入力時の極性切替え回路後の波形 41
4.9 波形整形回路の出力波形 42
4.10 高抵抗回路の電流にて時定数を調整した時の波形整形回路後の出力波形 . . 42
4.11 可変利得増幅回路の出力波形 42
4.12 ゲインを 2 倍にした時の可変利得増幅回路後の出力波形 42
4.13 K02-32SA チップからの出力 43
4.14 LabVIEW を用いて得られたスペクトル (TP=50mV,80mV,100mV) 43
4.15 可変利得増幅部までのリニアリティ 44
4.16 CH2 のリニアリティ (入力極性:正) 45
4.17 CH9 のリニアリティ (入力極性:正) 45
4.18 CH2 のリニアリティ (入力極性:負) 45
4.19 CH9 のリニアリティ (入力極性:負) 45
4.20 CH23 のリニアリティ (入力極性:正) 46
4.21 CH25 のリニアリティ (入力極性:正) 46
4.22 入力電圧 50 mV に対する各 CH の出力電圧のばらつき 46

5.1 プリアンプ LSI 開発のタイムテーブル 48
5.2 フォールデッドカスコード型増幅回路 49
5.3 テレスコピックカスコード型増幅回路 49
5.4 ブーステッドカスコード型増幅回路 50
5.5 ブーステッドカスコード型増幅回路の例 50
5.6 ブロック図 51
5.7 荷電増幅回路のブロック図 (左) と回路図 (右) 53
5.8 フォールデッドカスコード型増幅要素 (タイプ A1) の回路図 (左) とブロック図 (右) 54
5.9 ブーステッドカスコード型増幅要素 (タイプ A2) の回路図 (左) とブロック図 (右) 55
5.10 高抵抗回路の回路図 (左) とブロック図 (右上) 56
5.11 バイアス回路の回路図 (左) とブロック図 (右上) 56
5.12 シミュレーション用回路 57
5.13 入力電荷が -1.6 pC のときの出力波形 (タイプ A1) 58
5.14 入力電荷が -1.6 pC のときの出力波形 (タイプ A2) 58
5.15 入力電荷が 1.6 pC のときの出力波形 (タイプ A1) 59
5.16 入力電荷が 1.6 pC のときの出力波形 (タイプ A2) 59
5.17 負電荷が入力されたときのプリアンプ出力のリニアリティ (タイプ A1) . . . 60
5.18 負電荷が入力されたときのプリアンプ出力のリニアリティ (タイプ A2) . . . 60

5.19 正電荷が入力されたときのプリアンプ出力のリニアリティ(タイプ A1) . . . 60
5.20 正電荷が入力されたときのプリアンプ出力のリニアリティ(タイプ A2) . . . 60
5.21 タイプ A1 のノイズ評価 . . . 61
5.22 タイプ A2 のノイズ評価 . . . 61
5.23 タイプ A1 の容量勾配 . . . 62
5.24 タイプ A2 の容量勾配 . . . 62
5.25 タイプ A1 の正極電源 (VDD) に対するノイズ感度 . . . 62
5.26 タイプ A2 の正極電源 (VDD) に対するノイズ感度 . . . 62
5.27 タイプ A1 の負極電源 (VSS) に対するノイズ感度 . . . 63
5.28 タイプ A2 の負極電源 (VSS) に対するノイズ感度 . . . 63
5.29 MOS 精度の出力波形への影響 (タイプ A1) . . . 64
5.30 MOS 精度の出力波形への影響 (タイプ A2) . . . 64
5.31 レイアウト例とその断面 . . . 65
5.32 デザインルールの例 . . . 67
5.33 レイアウトエディタ画面 . . . 68
5.34 完成したレイアウト . . . 69

6.1 プリアンプ LSI の評価用セットアップ . . . 70
6.2 テストパルス (-1.6 V) を入力したときのチップ (No.1) の出力波形 (上：タイプ A1、下：タイプ A2) . . . 72
6.3 テストパルス (1.6 V) を入力したときのチップ (No.1) の出力波形 (上：タイプ A1、下：タイプ A2) . . . 72
6.4 テストパルス (-1.6 V) を入力したときのチップ (No.2) の出力波形 (上：タイプ A1、下：タイプ A2) . . . 73
6.5 テストパルス (1.6 V) を入力したときのチップ (No.2) の出力波形 (上：タイプ A1、下：タイプ A2) . . . 73
6.6 テストパルス (-1.6 V) を入力したときのチップ (No.3) の出力波形 (上：タイプ A1、下：タイプ A2) . . . 73
6.7 テストパルス (1.6 V) を入力したときのチップ (No.3) の出力波形 (上：タイプ A1、下：タイプ A2) . . . 73
6.8 タイプ A1 の負電荷が入力されたときのリニアリティ . . . 74
6.9 タイプ A2 の負電荷が入力されたときのリニアリティ . . . 74
6.10 タイプ A1 の正電荷が入力されたときのリニアリティ . . . 75
6.11 タイプ A2 の正電荷が入力されたときのリニアリティ . . . 75
6.12 タイプ A1 のプリアンプの容量勾配 . . . 75
6.13 タイプ A2 のプリアンプの容量勾配 . . . 75
6.14 タイプ A1 の入力とノイズレベルの関係 . . . 76
6.15 タイプ A2 の入力とノイズレベルの関係 . . . 76
6.16 662 keV (^{137}Cs) のガンマ線が入射したときのアノードのスペクトル (タイプ A1) . . . 77
6.17 662 keV (^{137}Cs) のガンマ線が入射したときのアノードのスペクトル (タイプ A2) . . . 77
6.18 662 keV (^{137}Cs) のガンマ線が入射したときのダイノードのスペクトル (タイプ A1) . . . 78

6.19 662 keV (^{137}Cs) のガンマ線が入射したときのダイノードのスペクトル (タイプ A2) 78
6.20 88 keV (^{109}Cd) のガンマ線が入射したときのダイノードのスペクトル (タイプ A1) 78
6.21 88 keV (^{109}Cd) のガンマ線が入射したときのダイノードのスペクトル (タイプ A2) 78

A.1 ピン配置対応図 84
A.2 パッケ- ジピン接続対応図 85
A.3 チップパッド配置図 86
A.4 PAD 87
A.5 ANAIO 87
A.6 IOR 88
A.7 BIASa 89
A.8 BIASb 89
A.9 BIASc 89
A.10 BIASd 90
A.11 CHAIN0 91
A.12 OP1B 91
A.13 HiR 92
A.14 INV1 93
A.15 INV2 93
A.16 PrC-A1 94
A.17 STAGE1-A1 95
A.18 CHAIN1-A1 95
A.19 PrC-A2 96
A.20 STAGE-A2 97
A.21 CHAIN1-A2 97
A.22 CORE 98
A.23 TOP 99

第1章　序論

1.1　X線・ガンマ線天文学

X線・ガンマ線は地球大気により吸収されてしまい地表には届かないため、観測は大気圏外で行わなければならない。X線・ガンマ線天文学が始まった頃は、ロケットや気球による観測が行われていた。70年代になるとそれらに代わり人工衛星による観測が主となり、長時間の観測が可能となった。UHURU(1970)、Einstein(1978)によるX線観測やOSO-3(1972)、SAS-2(1973)、COS-B(1975)などによるガンマ線観測により、本格的に宇宙X線・ガンマ線の研究が行われるようになった。

コンプトン衛星 (1991) の登場により、ガンマ線天文学の状況は大きく変わった。コンプトン衛星には総重量2トンに達する超大型ガンマ線検出器が搭載されており、多くの天体からガンマ線が放射されていることが確認された。この結果、宇宙にはいたるところに粒子が加速される場所があることが分かってきた。このような加速現場の多くが、超新星爆発や中性子星、ブラックホ− ルなどが関わった天体に見られることも重要な発見であった。このような高エネルギ− 天体では、想像を絶するほどの強重力場、強磁場が存在する。そこから発生したガンマ線を観測すれば、地上実験では実現不可能な物理状況での物理現象を研究することができる。

数多くの業績を残したコンプトン衛星も2000年にその役目を終え、次に期待されるのは、2006年打ち上げ予定のGLAST(Gamma-ray Large Area Space Telescope)である。GLASTは、入射ガンマ線の到来方向とエネルギ− を同時に決定することができる電子陽電子対生成型ガンマ線検出器を搭載し、数分角の空間分解能でのガンマ線撮像性能と全天の約20 %を一度にカバ− する広視野観測を実現することができる。すべての性能がいままでの観測衛星より優れているので、観測される高エネルギ− 天体の数が飛躍的に増えることが期待される。また、日本でもX線天文衛星であるAstro-E2が2005年に打ち上げられた。Astro-E2にはX線望遠鏡 (XRT) やCCDカメラ (XIS) などが搭載されるが、その中の一つである硬X線検出器 (HXD-Ⅱ) は、高エネルギー天体の観測を目的としている。

1.2　研究の背景

GLASTで20 MeV ~ 300 GeV、HXD-Ⅱで10 keV ~ 700 keVのエネルギ− 領域をカバ− して感度の良い観測が期待されるが、コンプトン散乱が支配的である100 keV ~ 1 MeVのエネルギ− 領域が、感度の悪いエネルギ− ギャップになりつつある (図1.1)。そこで、このエネルギー領域の観測を目的として、コンプトン散乱を積極的に利用したガンマ線コンプトンカメラの開発がさかんに行なわれており、シリコンストリップと位置検出型センサーを組み合わせたガンマ線多重コンプトンカメラなどの次世代高エネルギー観測器の研究が行なわれている。

また、コンプトンカメラ等の検出器では小型化、多チャンネル化が進んでいるため、多チャンネルの信号を高速かつ低雑音で処理する読み出しシステムとしてアナログVLSIの

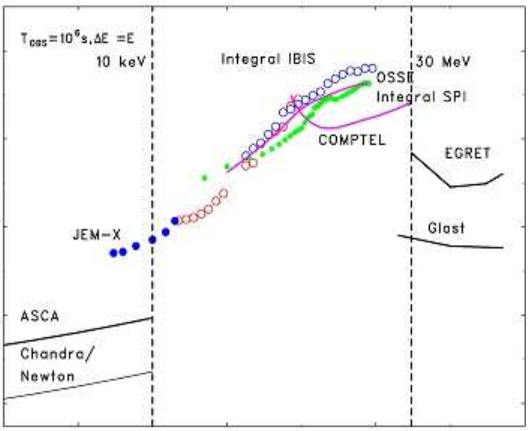


図 1.1: 観測衛星の感度の比較 (横軸は X 線・ガンマ線のエネルギー、縦軸は感度)

ニーズが高まってきている。現在、放射線計測用アナログ VLSI の技術は、ノルウェーの IDEAS 社や LBL のグループなど限られた所にしかない。

1.3 研究の概要

我々は、吸収体に多チャンネル光電子増倍管 (MA-PMT)、散乱体にフォトダイオード (PD) を用いた 100 keV ~ 1 MeV に感度をもつコンプトンカメラを独自に開発を行なっている。本論文で使用した MA-PMT は、64ch のアノードをもち入射位置検出が可能な浜松ホトニクス社製の H7546(64chPMT) であり、散乱体として用いた PD は、信号処理が容易な 3 × 3 のアレイ型構造をもつ浜松ホトニクス社製の SPL PD type B である。PD で散乱されたガンマ線を 64chPMT で検出するセットアップを組み、PD、64chPMT の信号を National Instruments 社製の DAQ デバイスと LabVIEW ソフトウェアで取得した。その取得データとコンプトン散乱の運動学から角分解能を計算し、コンプトンカメラとしての性能を評価したが、十分な角分解能を得ることができなかった。これは、64chPMT が期待されるエネルギー分解能を実現できていないことが主な要因であったため、シンチレータサイズに対する依存性、温度依存性、ピークホールド回路の導入、LED スポット照射等の評価を行ない、エネルギー分解能低下の要因を調査した。

我々は多チャンネル検出器の信号を高速かつ低雑音で処理できるアナログ VLSI の開発も行なっている。木原 (広大 理) らによって開発されたアナログ VLSI(K02-32SA) は、性能はほぼ要求どおりであるが、設計が難しいプリアンプ部が組み込まれていない。そこで本論文では、K02-32SA の回路と組み合わせるプリアンプ回路の仕様を決定することを目的として、プリアンプ LSI の設計・開発を行なった。宇宙研・KEK の協力を得て、Tanner 社の回路設計ツール「Tanner ToolsPro」を利用し回路設計・回路シミュレーションを行ない、低ノイズ・広ダイナミックレンジを確保したプリアンプ回路を設計することができた。次にレイアウト設計を行なうのであるが、これには独自のノウハウ・技術があり、我々で行なうことが困難であったため、今まではレイアウト設計会社に外注していた。しかし今回、広島大学先端研の協力を得ることができたため、LSI に対する知識を深めることを目的として、このレイアウト設計も我々で行なった。レイアウト設計では、Cadence 社のレイアウト設計ツール「virtuoso」、Mentor 社のレイアウト検証ソフトウェア「Calibre DRC」、「Calibre LVS」を使用した。試作したチップの評価回路を製作し、リニアリティー、ノイズ評価、エネルギー分解能などの検証を行なった。

第2章　放射線検出器

2.1　シンチレーション検出器

シンチレーション検出器とは、X 線やガンマ線などの放射線がシンチレータを通過するときに発生するシンチレーション光を光電子増倍管で電気信号に変換し、電流パルスとして計測する検出器であり、シンチレータと光電子増倍管は隣接した一体構造となっている。

2.1.1　シンチレータ

シンチレータは、放射線と相互作用をすることで、その放射線が失ったエネルギーに比例した数の光子を放出する。この発光現象をシンチレーション、放出された光をシンチレーション光と呼ぶ。このシンチレーション光を利用したのが、シチレーション検出器である。ガンマ線の場合、代表的なシンチレータとの相互作用としては、光電効果、コンプトン散乱、電子対生成などがある。シンチレータには、その化学的組成から無機シンチレータと有機シンチレータに分類することができる。代表的シンチレータの特性を表 2.1 に示す。

	NaI	CsI	BGO	GSO	YAP
蛍光時間 (ns)	230	1000	300	60	30
密度 ($g \cdot cm^{-3}$)	3.67	4.51	7.13	6.71	5.52
蛍光出力 (NaI を 100 とする)	100	47	12	20	40
発光ピーク波長 (nm)	410	565	430	480	347
組成式	NaI	CsI	$Bi_4Ge_3O_{12}$	Gd_2SiO_4	$YAlO_3$
ガンマ線 100 keV での平均自由行程 (cm)	0.226	0.147	0.045	0.084	0.687

表 2.1: シンチレータと特性

無機シンチレータは、無機結晶中に非常に微量の不純物を混入させ発光中心を作っている。有機シンチレータに比べ、密度が高く、原子番号の大きな元素からなるので、シンチレータ中でのエネルギー損失が大きい。発光量も大きくなるので、よい分解能を持つ。このような特性により、ガンマ線やアルファ線、電子・陽電子の測定に適している。最近では、従来主流の NaI や CsI に比べて、さらに原子番号が大きく検出効率が高い BGO、GSO が使われるようになってきている。

有機シンチレータにはプラスチックシンチレータ、液体シンチレータなどがある。無機シンチレータに比べ 100 倍 前後の速い減衰時間を持ち、かつ時間光量が多い。有機シンチレータは水素原子主体で原子番号が小さい。そのため阻止能が低く、主に荷電粒子の測定に使われている。

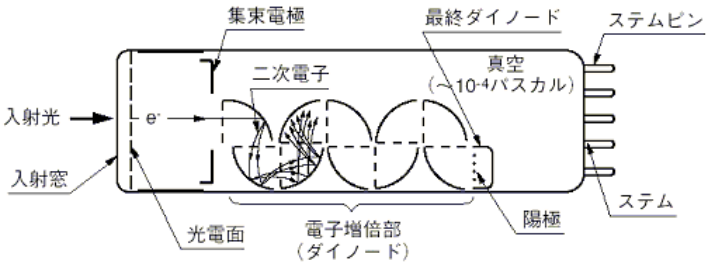


図 2.1: 典型的な PMT の構造

2.1.2 光電子増倍管

光電子増倍管 (photo multiplier tube: PMT) は、通常数 100 個 以下からなる微弱な光信号を、電子回路で十分活用できるレベルの電流パルスに変換する検出器である。

PMT は、図 2.1 に示されているように入口に光電陰極、内側に数個のダイノードを取り付け真空排気したガラス管である。シンチレータなどからの光は、まず光電陰極で光電効果により光電子に変換される。この時の量子効率は、通常 5 ~ 20%である。発生した光電子は強い電場により加速され、2 次ダイノードをたたく。この時、ダイノードにより多数の電子が放出される。さらに、ここで放出された電子は次のダイノードをたたき、さらに多くの電子を生成する。この繰り返しにより、1 個 の光子から 10^{4-7} 個 の電子が生成され、電流として観測される。

PMT の優れている点は、入射光量に対する出力信号の比例性が良い点、内部利得が十分に大きいため微弱な信号でも検出出来る点、時間分解能がよい点などである。

2.1.3 位置検出型光電子増倍管

前節であげたような一般的 PMT(ボックス型) で、入射する光子に対して一つの信号出力しかない。一方、位置検出型 PMT は格子状または直線状に複数のアノードを持ち、複数の信号を出力できる。また、コンパクト化にも有利である。

位置検出型 PMT は複数のアノードを持つことの他に、電子の増倍を行なうダイノードの構造に特徴がある。その主な構造にはサーキュラケージ型、ボックス型、メッシュ型 (図 2.2)、メタルチャンネル型 (図 2.3) などがある。メッシュ型ダイノードは、微細なメッシュ状の細線で形成されたダイノードを積み重ねた構造をしていおり、線形性に優れ、磁界の影響を受けにくい。メタルチャンネル型ダイノードは、従来のダイノードに比べてダイノード間が短く、高速応答を実現している。また、読み出しチャンネルを多チャンネル化しやすいため、位置検出型 PMT に適している。

2.1.4 64chPMT:H7546

本研究で使用した 64chPMT は、浜松ホトニクス社製の位置検出型 PMT、Multianode Photomultiplier Tube Assembly H7546 である。その構造を図 2.4 に、諸元及び特性を表 2.2、2.3 に示す。この PMT はピクセル状に信号出力電極であるアノードが、8 × 8 の計 64 個並んでいるのが特徴である。電子増幅部にメタルチャンネルダイノードを使用し、非

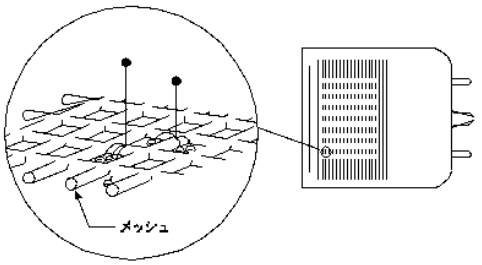


図 2.2: メッシュ型 PMT の構造

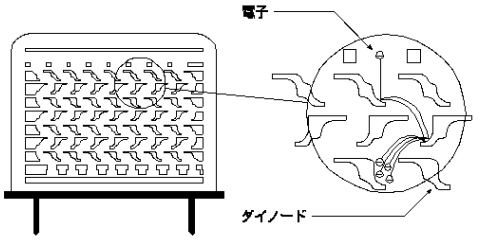


図 2.3: メタルチャンネル型 PMT の構造

常にコンパクトなものになっている。また、メタルチャンネルダイノードはダイノード間が短く高速応答が可能であり、位置検出型 PMT に適している構造である。

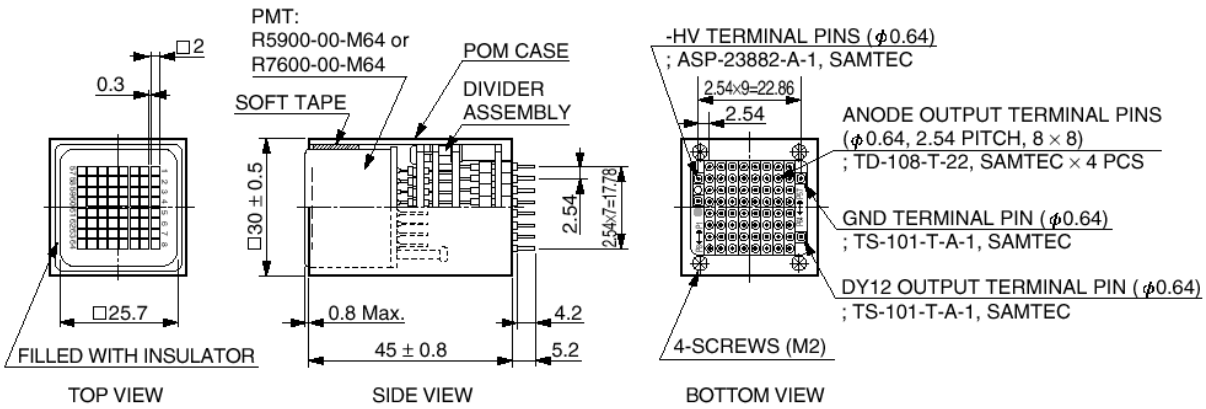


図 2.4: 64chPMT(H7546) の基本構造

2.2 半導体検出器

半導体検出器として代表的なものとして、フォトダイオード (photodiode: PD) がある。図 2.5、図 2.6 に示されているように、p 型半導体と n 型半導体を pn 接合したもので、低エネルギーの荷電粒子、X 線、ガンマ線の測定によく用いられる。

半導体検出器がシンチレーション検出器と大きく異なる点は、ガンマ線が直接電気信号に変換されるという点である。半導体検出器に入射したガンマ線は、半導体を構成する原子と光電効果やコンプトン散乱などの相互作用をする。その時、発生する光電子や反跳電子の運動エネルギーの付与によって、キャリアと呼ばれる電子と正孔が発生する。素子に逆バイアス電圧を印加すると、高抵抗の絶縁層である空乏層が生じ、その中をキャリアは正負の電極へ移動する。正の電圧が印加された電極には電子が、負の電圧が印加された電極には正孔が移動する。その結果全体として電流が生じることになる。このように半導体検出器では直接ガンマ線のエネルギーが電気信号に変換される。また、一対キャリアを発生するために必要なエネルギーが 3 ~ 5eV と小さいため、良いエネルギー分解能を得ることができる。

Parameter		Description/Value	Unit
Spectral Response		300 to 650	nm
Wavelength of Maximum Response		420	nm
Photocathode	Material	Bialkali	-
	Minimum Effective Area	18.1 × 18.1	mm^2
Window Material		Borosilicate	-
Dynode	Structure	Metal Channel Dynode	-
	Number of Stages	12	-
Anode Size		2 × 2	mm^2
Weight		~ 65	g

表 2.2: 64chPMT の諸元

Parameter		Value(Typ.)	Unit
Cathode Sensitivity	Luminous(2856K)	70	μA/lm
	Blue(CS 5-58 filter)	8	μA/lm-b
Quantum Efficiency at 390nm		20	%
Anode Sensitivity	Luminous(2856K)	21	A/lm
Gain		3.0×10^5	-
Anode Dark Current per Channel(after 30min. storage in darkness)		0.2	nA
Time Response (per Channel)	Anode Pulse Rise Time	1.5	ns
	Transit Time Spread(FWHM)	0.3	ns
Pulse Linearity per Channel(±5 % Deviation)		0.6	mA
Cross-talk(with 1mm Optical Fiber)		2	%
Uniformity Among All Anodes		1:3	-

表 2.3: 64chPMT の特性 (25 ℃の時)

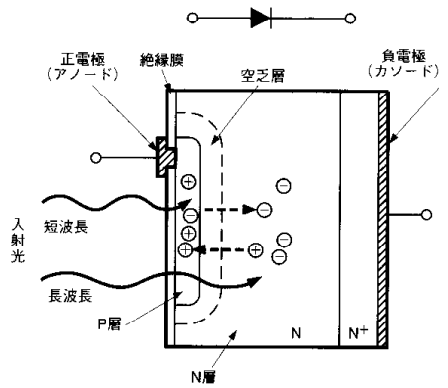


図 2.5: 典型的な半導体検出器の構造

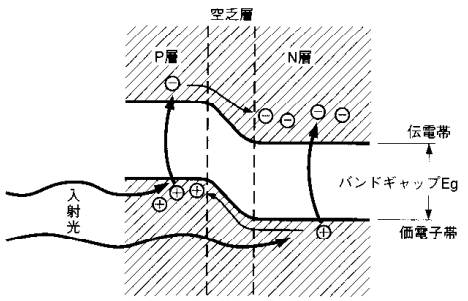


図 2.6: pn 接合面の状態

2.2.1 フォトダイオード

本研究で使われている半導体検出器は、高速応答性を重視した PIN 型シリコンフォトダイオード (PIN-PD) である (図 2.7)。この PD には、pn 結合の中間に空乏層のかわりをする真性半導体の i 型領域が挟みこんである。必ず逆バイアス電圧を加えて使用する。加えた逆バイアス電圧はほとんど i 型領域に加わるため、障壁容量を無視することができ、高速応答を妨げる端子間容量を非常に小さくすることができる。

高速応答性を重視した他の PD として、アバランシェ・フォトダイオード (A-PD) がある (図 2.8)。pn 接合に大きな逆バイアスを印加し、強い電界を生じさせる。キャリアはこの電界により加速され、衝突により二次キャリアを発生するという過程を次々と繰り返す (アバランシェ効果)。このような自己増幅作用により、出力電流を数十倍まで増幅し、端子間容量を等価的に下げることができる。

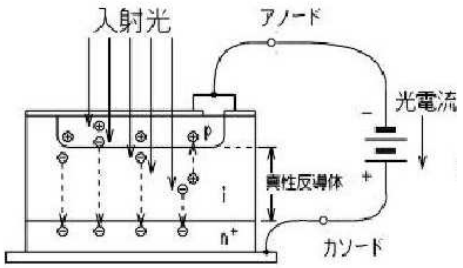


図 2.7: PIN-PD の構造

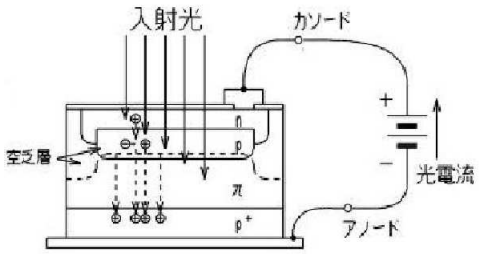


図 2.8: A-PD の構造

2.2.2 アレイ型 PD:SPL PD typeB

本研究で使用したアレイ型 PD は、浜松ホトニクス社製のシリコン PIN フォトダイオード SPL PD typeB であり、5 mm 四方の受光面を 3 × 3 のアレイ状に並べたものである (図 2.9)。厚さが 300 μm と通常の PD よりも厚くしているため、端子間容量が 10 pF 程度と小さいものになっている。

2.3 コンプトンカメラ

コンプトンカメラは、基本的に二段階の光子計測によって一個の単光子の計数が行なわれる。一段階目の検出器には半導体検出器が用いられ、この検出器内でコンプトン散乱した光子の位置および落したエネルギーが測定される。二段階目の検出器では散乱した光子を光電吸収などをさせて、すべてのエネルギーを付与させる。このカメラでは、それぞれの検出器で記録されたエネルギーの和がガンマ線の初期エネルギーとなる。また、光子の飛来方向は一段階目、二段階目の検出器における光子の計測位置を結んだ直線に対して、コンプトン散乱角を有する円錐領域となる (図 2.10)。このコンプトン散乱角は一段階目の検出器で記録されたエネルギーから求めることができる。

入射ガンマ線のエネルギーを E_{in} とする。散乱体でのコンプトン散乱によるエネルギー損失を E_1、吸収体での光電吸収されたエネルギーを E_2 とする。この時、$E_{in} = E_1 + E_2$

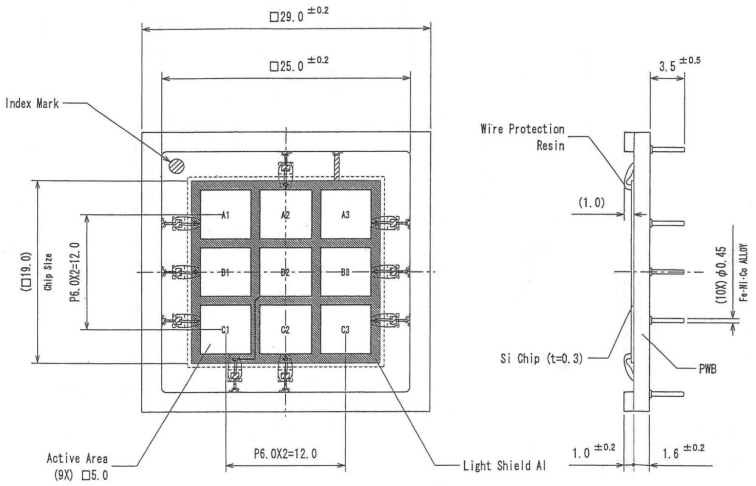


図 2.9: アレイ型 PD (SPL PD typeB) の図面

が成り立つ。コンプトン散乱の運動学より散乱角 θ は、

$$\cos\theta = 1 + \frac{m_e c^2}{E_1 + E_2} - \frac{m_e c^2}{E_2} \tag{2.1}$$

と表すことができる。これにより、入射ガンマ線光子の到来方向を頂点 θ を持つ円錐面上に制限することができる。

最近研究されているガンマ線コンプトンカメラは、多層半導体コンプトンカメラであり、シリコンストリップ検出器を複数積み重ねたものが多く提案されている。複数のイベントについて、それぞれの円錐領域の交点を求めることにより、より正確な到来方向を決定することができる (図 2.11)。しかし、数万から数十万という多量の独立した信号の読みだしとその処理が必要となるため、まだ実現には至っていない。しかし近年、実現に向けた基礎実験が盛んに行われており、数年内に実現することが期待される。

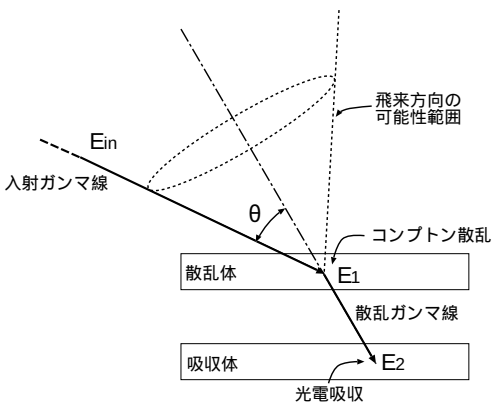


図 2.10: コンプトンカメラの原理

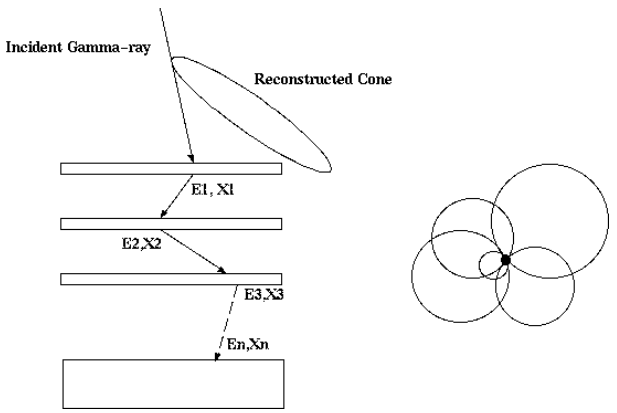


図 2.11: 多重コンプトンカメラの原理

第3章　64chPMTを用いたガンマ線イメージャの開発

3.1　はじめに

我々は散乱体にフォトダイオード (PD)、吸収体に多チャンネル光電増倍管 (MA-PMT) を用いたシステムを構成し、現在エネルギーギャップになりつつある 100 keV ~ 1 MeV のガンマ線に感度をもつコンプトンカメラを開発を行なっている。今回その可能性を探るため、64chPMT とアレイ型 PD を用いたシステム構成し、コンプトンイメージング実験を行なった。しかし、試作した検出器は位置決定精度の指標である角分解能が実用レベルに達していないことが明らかになった。その原因を調査した結果、64chPMT のエネルギー分解能が期待される値に達していないことに起因していることがわかった。そこで、エネルギー分解能低下の原因の調査も行なった。

3.2　64chPMTとアレイ型PDを用いたコンプトンイメージング

3.2.1　目的

本実験は、散乱体にアレイ型 PD(SPL PD typeB)、吸収体に 24 mm × 24 mm × 5 mm の GSO シンチレータと 64chPMT を組み合わせたシンチレーション検出器を用いてガンマ線イメージャを構成し、このシステムのコンプトンカメラへの可能性を検証することを目標とする。

行なったコンプトンイメージングのデータ収録の流れを図 3.1 に示す。本実験ではアレイ型 PD にガンマ線を当て、散乱ガンマ線を 64chPMT で観測する。したがって、PD 側と PMT 側で同時に発生した信号が意味を持ち、それぞれの discri 信号のコインシデンスをとったものをデータ収録のトリガ信号としている。

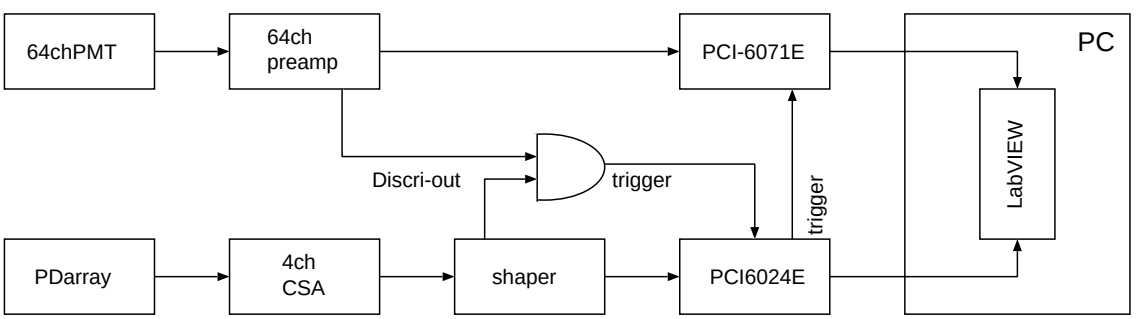


図 3.1: データ集録の全体の流れ

実際のデータ収録には、National Instruments 社製の LabVIEW ソフトウェアおよび DAQ デバイス (PCI-6071E、PCI-6024E) を使用した。

LabVIEW ソフトウェア

LabVIEW とは、Laboratory Virtual Instrument Engineering Workbench (ラボラトリ仮想計測器エンジニアリングワークベンチ) を略したもので、グラフィカルプログラミング言語「G」をベースにした計測制御用プログラム開発環境である。LabVIEW はブロックダイアグラム形式でプログラムを作成することができるので、他のテキストベースの開発環境に比べ、プログラムを短期間で作成することができる。また、LabVIEW は柔軟性に優れた強力なプログラミング言語であり、テストや計測、データ集録や制御、科学的調査、プロセス監視、工場の自動化などに使用されている。

LabVIEW で作成する仮想計測器 (Virtual Instruments: VI) には、「フロントパネル (図 3.2)」と「ブロックダイアグラム (図 3.3)」がある。フロントパネルには、スイッチやノブなどの制御器と、グラフなどの表示器を配置する。マウスやキーボードからデータを入力することにより、画面に結果を表示することができる。ブロックダイアグラムには、VI のグラフィカルソースコードが含まれている。ここで、フロントパネルで作成した入力や出力を制御したり、これらに対して関数を実行するための VI のプログラムを作成する。

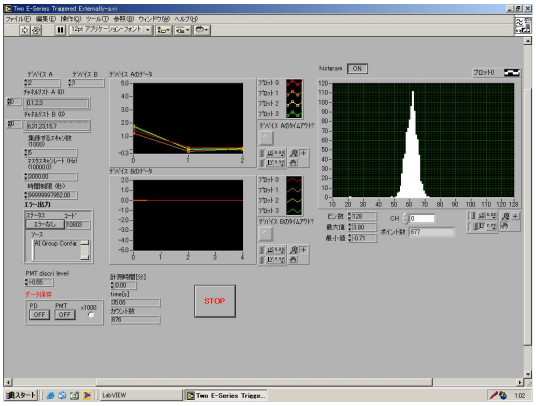


図 3.2: フロントパネル

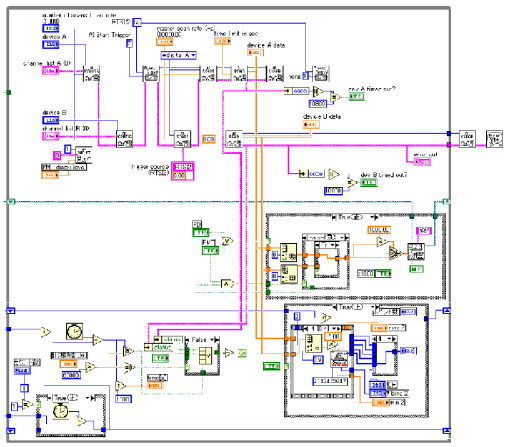


図 3.3: ブロックダイアグラム

DAQ デバイス

DAQ とは、Data Acquisition(データ取得) を略したもので、DAQ デバイスをコンピュータに装着することで、LabVIEW ソフトウェアから直接データ取得のための操作を行うことができる。DAQ デバイスを GPIB 等の高価な計測機器と比較すると、サンプリングレートが小さくなるが、価格に対する性能はかなり高いものと言える。集録対象が超高速現象といった特殊なものでなければ、十分な性能を発揮する。

今回使用した DAQ デバイスは、低コスト E シリーズマルチファンクション DAQ デバイスである PCI-6071E と PCI-6024E である。PCI-6024E で PD 側のデータを処理し、PCI-6071E で PMT 側のデータを処理する。

3.2.2　セットアップ

図 3.4 に構成したガンマ線イメージャのセットアップを、図 3.5 にタイミングチャートを示す。64chPMT の信号は、64ch プリアンプを介して、DAQ デバイス (PCI-6071E) によりデータ収集される。アレイ型 PD からの信号は、4ch プリアンプで増幅された後、ピークホールド回路を介し、DAQ デバイス (PCI-6024E) によりデータ収集される。実際に収集される信号は、コインシデンスを取ることにより、2 つ検出器が同時に信号を出した時に限定されている。

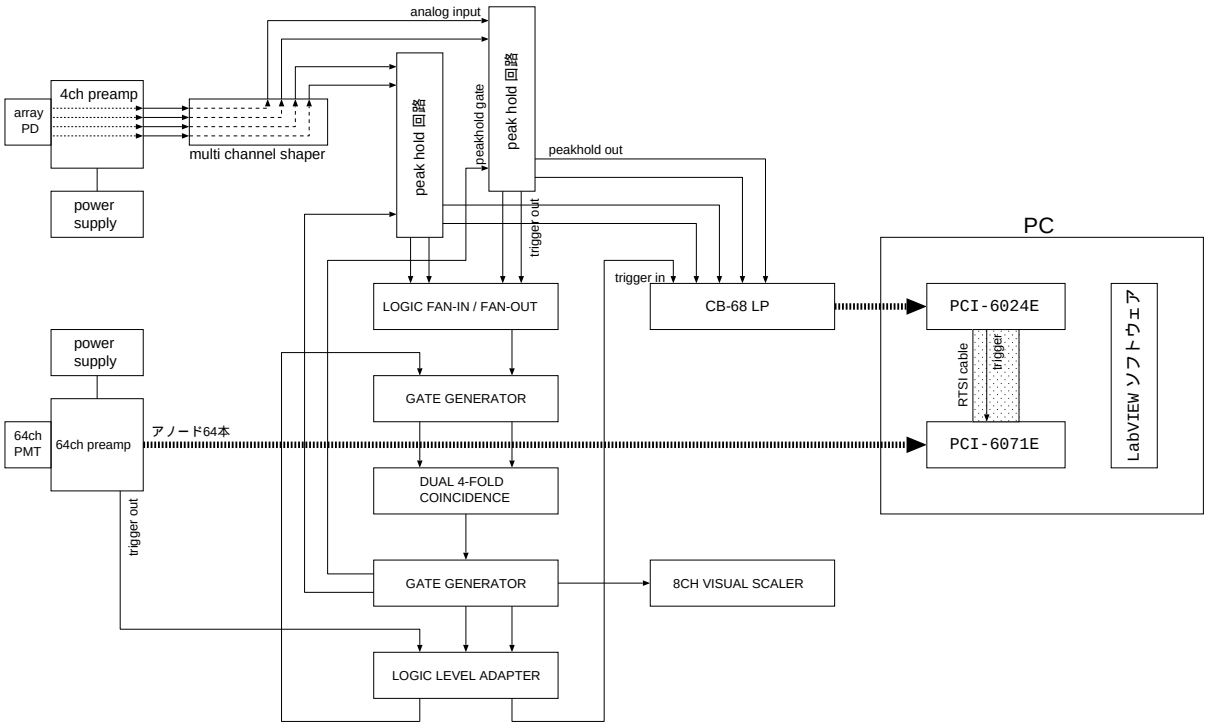


図 3.4: ガンマ線イメージャのセットアップ

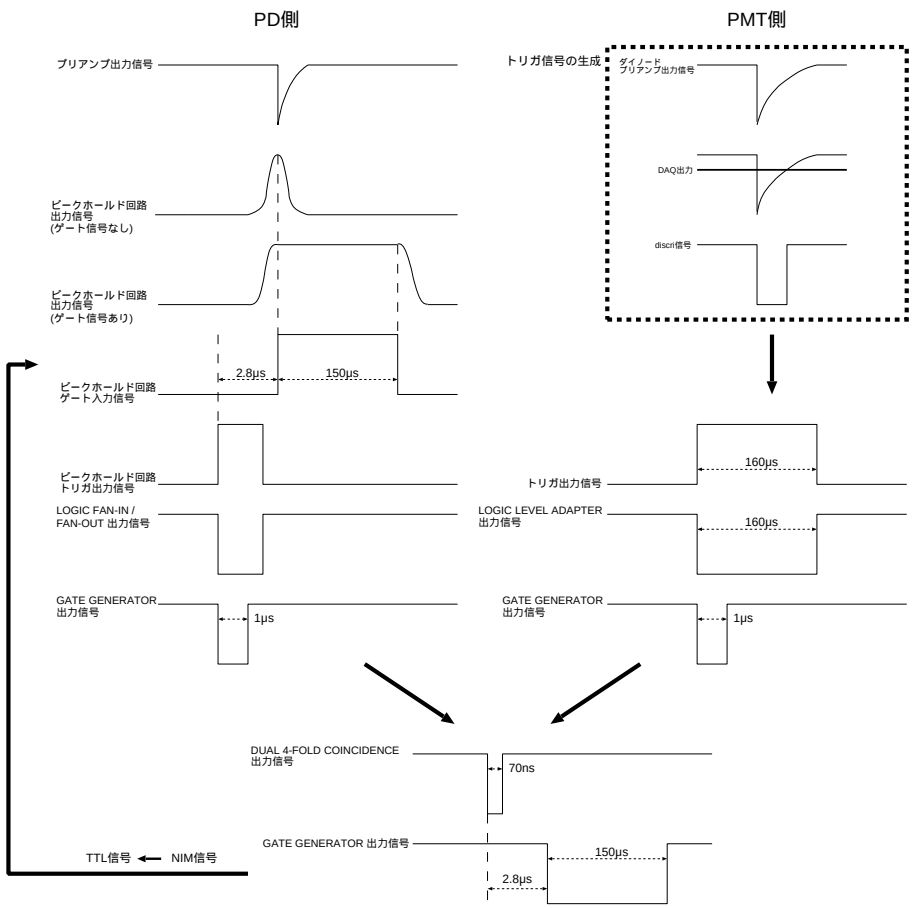


図 3.5: データ集録のタイミングチャート

3.2.3　イメージング能力の評価方法

2.3 節で示したコンプトン散乱の運動学から、散乱体及び吸収体におけるデポジットエネルギーと入射位置が分かると、入射ガンマ線のエネルギーと入射方向がわかる。その理論式から、アレイ型 PD と GSO シンチレータで落としたエネルギーから散乱光子の散乱角をもとめ、さらにアレイ型 PD と 64chPMT における検出位置からジオメトリ的に決まる散乱角をもとめた。この二つの散乱角の差から角分解能が見積もり、この角分解能と実際の測定から得られる角分解能を比較することにより、イメージング能力の評価を行なった。

3.2.4　角分解能の見積もり

角分解能の見積もりは、Geant4 などのシミュレータで行なう必要があるが、ここでは PMT、PD のエネルギー分解能、位置分解能から簡単に見積もった。線源に ^{137}Cs(662 keV) を用い、鉛コリメータ (厚さ 50 mm 、$\phi = 6$ mm) を通して、ガンマ線をアレイ型 PD に入射した。図 3.6 にガンマ線のコリメータ後の経路を示す。

式 2.1 より、アレイ型 PD および GSO シンチレータにおけるデポジットエネルギー E_1、E_2 から理論的に θ_{theo} が求まる。ここで入射ガンマ線のエネルギーを E とすると、E=E_1+E_2 である。また、それぞれのエネルギー分解能を ΔE_1、ΔE_2 とすると θ_{theo} のゆらぎ $\delta\theta_{theo}$ は、

$$\delta\theta_{theo} \sim \sqrt{\left(\frac{\Delta E_1}{E_1}\right)^2 + \left(\frac{\Delta E_2}{E_2}\right)^2} \tag{3.1}$$

と表される。また、アレイ型 PD および 64chPMT(+GSO) の位置検出能力より、アレイ型 PD においてコンプトン散乱した位置 (点 O_{det})、GSO で光電吸収した位置 (点 P_{det}) がわかるので、その位置よりジオメトリ的なガンマ線の散乱角 θ_{det} を求めることができる。ただし、アレイ型 PD は 1ch の受光面の大きさが 5 mm × 5 mm 、チャンネル間のギャップが 1 mm あり、ガンマ線の入射位置は各 PD 受光面の中心となるため、その位置分解能 ΔX_{PD} を ~ 5 mm とした。64chPMT の位置分解能 ΔX_{PMT} は、富永 (広島大 理) によって行なわれた 64chPMT の位置分解能の測定結果から ~ 4 mm とした。このとき θ_{det} のゆらぎ $\delta\theta_{det}$ は、

$$\delta\theta_{det} \sim \sqrt{\left(\frac{\Delta X_{PD}}{L_2}\right)^2 + \left(\frac{\Delta X_{PMT}}{L_2}\right)^2} \tag{3.2}$$

と表される。ここで、θ=θ_{det}−θ_{theo} とする。θ_{theo} は、式 2.1 より理論的に求められ、散乱体及び吸収体で落としたエネルギーのみから計算できる。つまり、この理論的に求められる角度と、実際の検出器の観測位置から得られる角度 θ_{det} を比較することにより、検出器の検出精度を見積もることができる。しかし、散乱体及び吸収体で検出されるエネルギーも、その検出器のエネルギー分解能に依存してゆらぐため、θ の角分解能 $\Delta\theta$ は、

$$\Delta\theta \sim \sqrt{(\delta\theta_{det})^2 + (\delta\theta_{theo})^2} \tag{3.3}$$

となる。つまり、この角分解能 $\Delta\theta$ がガンマ線イメージャの位置決定精度を表しており、この値がゼロに近いほど精度が良い。

入射ガンマ線のエネルギーを E_{in} とすると、コンプトン散乱後のガンマ線のエネルギー E' は、

$$E' = \frac{E_{in}}{1 + \frac{E_{in}}{m_e c^2}(1 - \cos\theta)} \tag{3.4}$$

となる。ここで $m_e c^2$ は電子の静止エネルギー（ 511 keV ）である。^{137}Cs の 662 keV のガンマ線がアレイ型 PD に入射したとき、90 ° 方向にコンプトン散乱したとすると、 散乱ガンマ線のエネルギーは 288.4 keV となる。つまり、アレイ型 PD に落としたエネルギーは 373.6 keV となり、GSO で光電吸収されるガンマ線のエネルギーは 288.4 keV ということなる。しかし、実際は 90 ° 方向にのみ散乱されるわけではないため、PD と GSO で落としたエネルギーは広がりをもつ。さらに、式 3.1、式 3.2、式 3.3 より、アレイ型 PD において 90 ° 散乱する場合の $\Delta\theta$ を計算する。前述の通り、入射ガンマ線がアレイ型 PD で落とすエネルギーは約 374 keV で、このときのエネルギー分解能 ΔE_1 を $\sim$ 10 keV 、GSO で光電吸収されるエネルギーは約 288 keV で、このときのエネルギー分解能 ΔE_2 は $\sim$ 88 keV である。また、アレイ型 PD の位置分解能は $\sim$ 5 mm で、散乱ガンマ線の GSO への入射範囲を全面にしたときの位置分解能を $\sim$ 10 mm としたとき、$\Delta\theta\sim$ 27 ° となった。さらに、それぞれの値をまとめたものを表 3.1 に示す。

	$\frac{\Delta E_1}{E_1}$	$\frac{\Delta E_2}{E_2}$	$\delta\theta_{theo}$
θ_{theo}	0.03	0.31	18 °
	$\frac{\Delta X_{PD}}{L_2}$	$\frac{\Delta X_{PMT}}{L_2}$	$\delta\theta_{det}$
θ_{det}	0.17	0.33	21 °
$\Delta\theta$	-	-	27 °

表 3.1: 角分解能の見積もりにおける各パラメータの値

3.2.5 イメージング測定の結果

実際のイメージング測定におけるアレイ型 PD、64chPMT のエネルギースペクトルを図 3.7、図 3.8 に示す。横軸の単位はエネルギー [keV] であり、縦軸はカウント数である。

測定結果から得られる、アレイ型 PD および GSO シンチレータのデポジットエネルギーと検出位置より θ が求まる。この θ の分布を図 3.9 に示す。このスペクトルから角分解能 (FWHM) を求めると 67 ° であった。

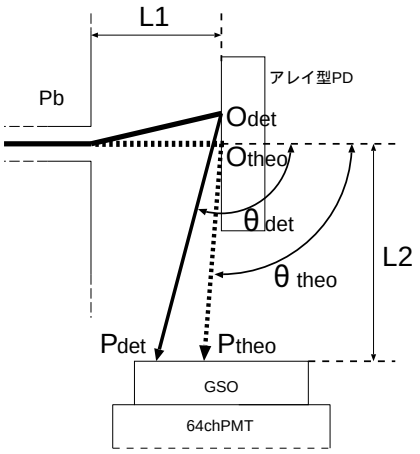


図 3.6: コリメータ通過後のガンマ線の経路

使用したGSOシンチレータは、64chPMTの光電面サイズ(18.1 mm × 18.1 mm)より大きく、光電面の端のほうでエネルギー分解能、位置分解能が低下していることが考えられたため、64chPMTの光電面のより狭い領域で検出されたイベントを抜き出し、そのときの角分解能も計算した。抜き出した領域は、Area1「-5mm$\leq$x$\leq$5mmかつ-5mm$\leq$y$\leq$5mm」、Area2「$-3\leq$x$\leq$3mmかつ-3mm$\leq$y$\leq$3mm」、Area3「-2.5mm$\leq$x$\leq$2.5mmかつ-2.5mm$\leq$y$\leq$2.5mm」の領域である。それぞれの場合の分布を図3.10、図3.11、図3.12に示す。また、光電面全面、Area1、Area2、Area3の領域において求めた角分解能及び上と同じく計算より求めた$\Delta\theta$をまとめて表3.2に示す。

	全面	Area1	Area2	Area3
測定結果	67±3°	43±3°	34±3°	29±2°
計算結果	27±0.3°	23±0.3°	18±0.3°	17±0.3°

表 3.2: 光電面の各領域毎の角分解能

3.2.6 考察

実際に測定された角分解能は67°と計算値を大きく異なる結果となった。これは、実際は広がりをもつPDにおける散乱ガンマ線の散乱角を90°に限定し、計算を大まかに行なったことが原因である。したがって、前述のとおり角分解能の見積もりには、Geant4を用いたシミュレーションを行なう必要がある。

測定された角分解能を考えると、この検出器をガンマ線イメージャとして用いることは非常に困難であるといえる。角分解能を低下させる要因として、受光面が大きく、チャンネル数が少ないPDを用いたため、散乱体の位置分解能が非常に悪いことがあげられる。これは、シリコンストリップ検出器を散乱体として用いることで改善できる。また、64chPMTの光電面に対してGSOが大きすぎたため、GSOの端のほうでは、位置分解能およびエネルギー分解能が低下していることも角分解能低下の原因として考えられた。そこで、GSOに入射したイベントのうち、より内側のイベントに限って角分解能を求めたところ、領域を狭めるにつれて角分解能良くなっていくことを確認した。この場合有効面積が小さくなってしまうが、 2.5 mm × 2.5mm の有効面積で角分解能29°という結果を得た。したがって、GSOシンチレータのサイズを最適化することにより、64chPMTのエネルギー分解能が改善され、角分解能が向上することが期待できる。

今回作成したガンマ線イメージャは目指す性能に及ばないが、今回用いたガンマ線のエネルギーは662 keVで、我々が目指すMeV領域ではシンチレーション光量が多くなるため、位置分解能、エネルギー分解能の向上が期待され、角分解能はさらに良くなると考えられる。しかし、それでも角分解能数度という性能には及ばないと考えられるので、散乱体にシリコンストリップ検出器を使用を検討し、吸収体においては64chPMTに最適なGSOの形状を決定し、エネルギー分解能を改善する必要がある。

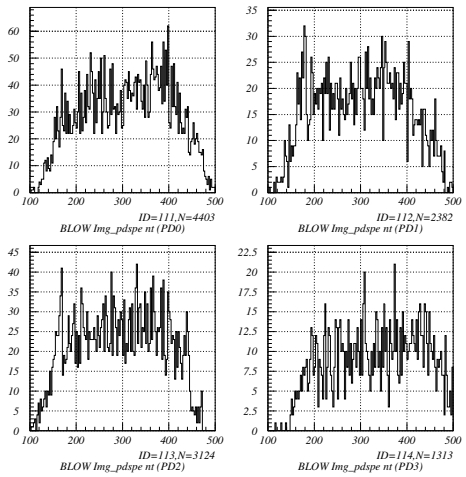


図 3.7: 662 keV のガンマ線を PDarray に入射させたときの、PD 各チャンネルにおけるエネルギースペクトル

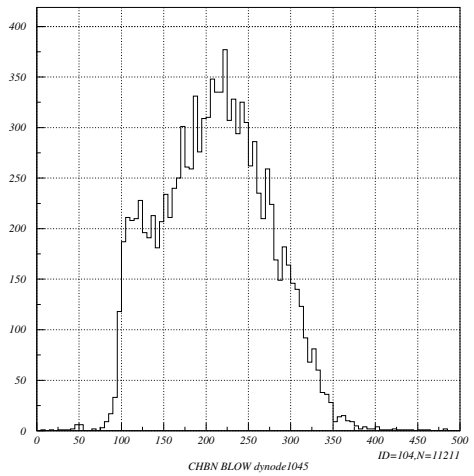


図 3.8: アレイ型 PD で散乱されたガンマ線の 64chPMT のダイノードにおけるエネルギースペクトル

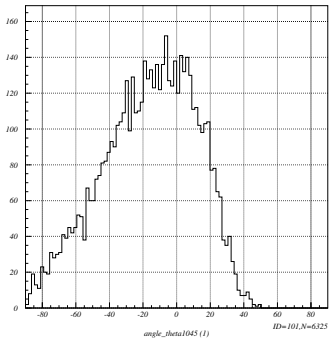


図 3.9: イメージング測定によって得られた θ の分布

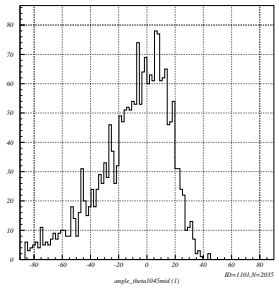


図 3.10: Area1 の領域における θ の分布

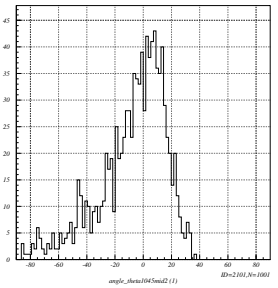


図 3.11: Area2 の領域における θ の分布

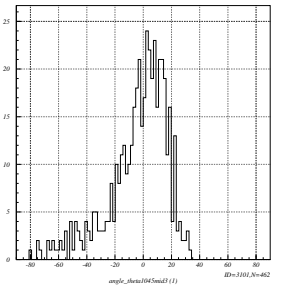


図 3.12: Area3 の領域における θ の分布

3.3 64chPMTのエネルギー分解能の検証

3.3.1 目的

コンプトンイメージング実験の結果より、角分解能を向上させるためには64chPMT のエネルギー分解能の改善が必要であり、その方法としてシンチレータサイズの最適化が考えられた。そこで、64chPMT のエネルギー分解能のGSO シンチレータサイズに対する依存性を調査した。しかし、もっとも小さいGSO を用いても、一般的なPMT とGSO で実現できるエネルギー分解能を実現できていないことが明らかになった。そこで、64chPMT のエネルギー分解能を低下させている原因を明らかにするためにいくつかの検証を行なった。

3.3.2 セットアップ

この検証におけるセットアップは、基本的に前節で行った実験のものを引き継いだものを使用した。すなわち、DAQ デバイス (PCI-6071E) で取得したデータをLabVIEW ソフトウェアで処理するというものである。その概略を図 3.13 に示す。

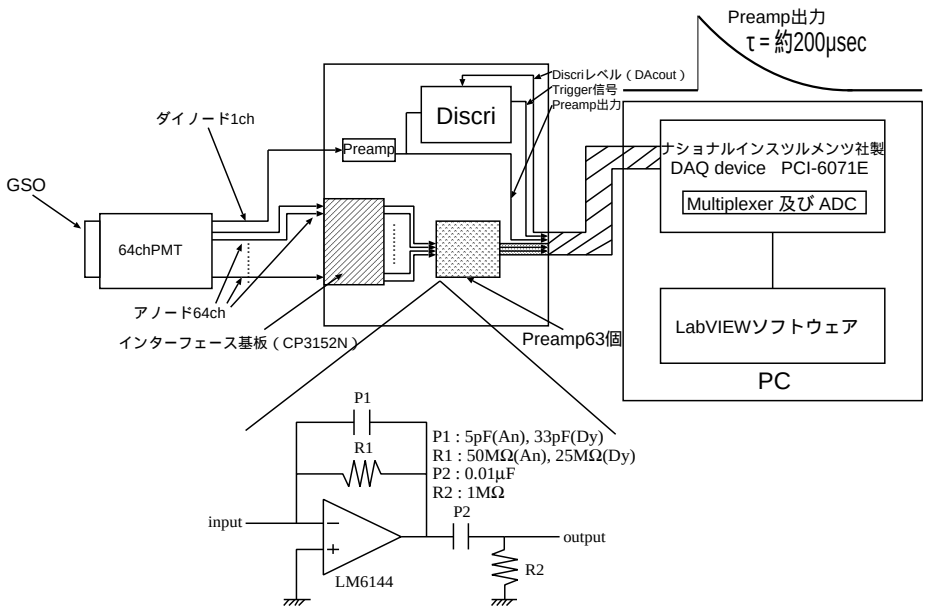


図 3.13: エネルギー分解能検証のためのセットアップ

3.3.3 シンチレータの大きさに対する依存性

64chPMT に用いられるGSO シンチレータは、 24 mm × 24 mm × 5 mm のものしか手元になく、これが使われていた。これは光電面サイズ (18.1 mm × 18.1 mm) よりも大きいため、このシンチレータを用いた場合、光電面に入射しないシンチレーション光が多く存在し、これがエネルギー分解能低下につながっていることが考えられた (図 3.14)。そこで、光電面とほぼ同じ面積を持つ 18 mm × 18 mm × 5 mm のGSO を取得し、これを用いて測定を行った。そのスペクトルは、図 3.15 のようになり、エネルギー分解能は 24 mm × 24 mm × 5 mm のものに比べ確かに向上した (約 14 %) が、期待していた程のエネルギー分解能を得ることはできなかった。加えて、10 mm × 10 mm × 10 mm

GSO シンチレータを用いて測定を行った。そのスペクトルは図 3.16 でエネルギー分解能は、 9.6 % 程度と一般的な PMT と GSO で実現できるエネルギー分解能 (7 %) には及んでいないことがわかった。

これらの結果より、エネルギー分解能を悪化させる要因となるゆらぎがシンチレータ以外にあると考えられる。なお、示したエネルギースペクトルにおいて、ADC チャンネルが GSO のサイズによってオフセットしている。これは、GSO のサイズによって光量が変化することを考慮して HV にてゲイン調整を行ったため、若干のずれが生じているためである。

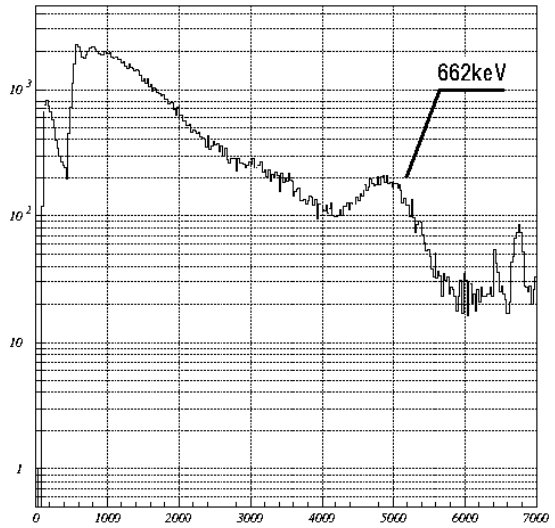


図 3.14: GSO(24 mm × 24 mm × 5 mm) を用いて測定したエネルギースペクトル

3.3.4 温度による依存性

前節において、エネルギー分解能悪化にはシンチレータ以外の要因があることが考えられたため、-20 ℃において測定し、温度依存性について調査した。これは、熱ノイズを減少させることで、分解能が向上することが期待できたためである。

シンチレータは、GSO(10 mm × 10 mm × 10 mm) を使用し、ガンマ線源は ^{137}Cs(662 keV) を用いた。得られたスペクトルは図 3.17 のようになり、エネルギー分解能は 9.5 % となった。この結果から、先の常温で測定した場合とあまり変化が見られないことから、熱ノイズは 662 keV のエネルギー分解能には影響しないことがわかった。

3.3.5 ピークホールド回路を用いた測定

64chPMT のデータ取得に使用している DAQ デバイス (PCI-6071E) は、1ch 当りの AD 変換に必要な時間は 0.8 μs である。すなわち、64ch 分の信号を AD 変換するには、52 μs 程度かかることになる。そのため、サンプル間で時間のずれが生じてしまい、分解能が低下してしまう可能性が考えられた。そこで、ピークホールド回路 (図 3.18) を製作し、こ

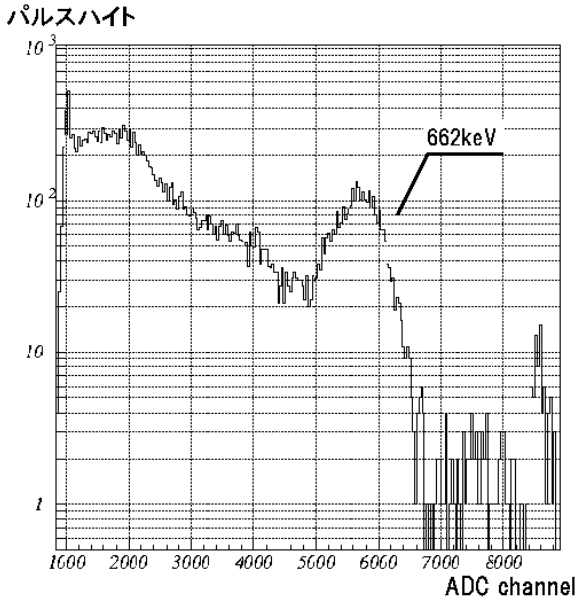


図 3.15: GSO(18 mm × 18 mm × 5 mm) を用いて測定したエネルギースペクトル

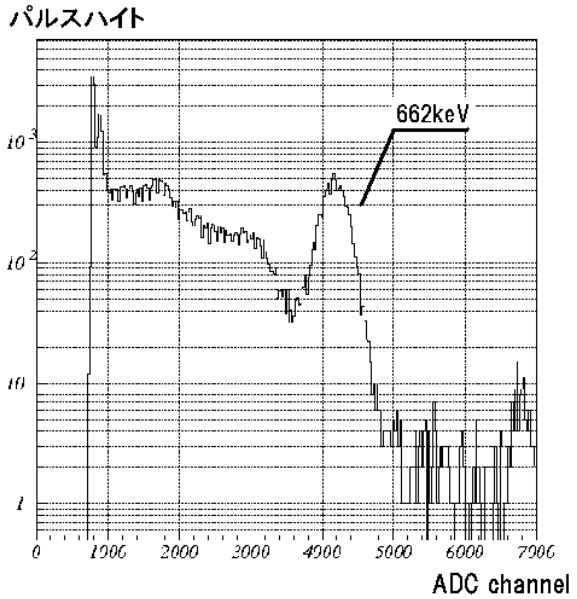


図 3.16: GSO(10 mm × 10 mm × 10 mm) を用いて測定したエネルギースペクトル

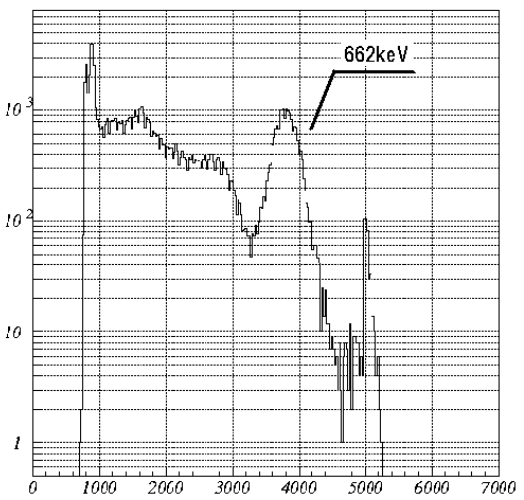


図 3.17: -20 ℃における GSO(10 mm × 10 mm × 10 mm) のエネルギースペクトル

のずれを無くすようにした。

シンチレータは、GSO(10 mm × 10 mm × 10 mm) を使用し、ガンマ線源は ^{137}Cs(662 keV) を用いた。得られたスペクトルは、図 3.19 のようになり、エネルギー分解能に変化はあまり見られなかった。これは、64chPMT 用プリアンプの時定数が十分長く設定されていたため、AD 変換による時間のずれは解消されていたと考えられる。

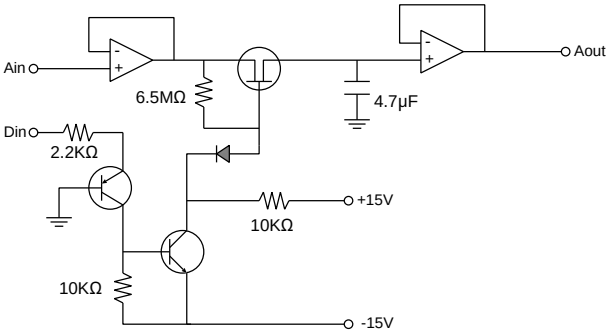


図 3.18: 製作したピークホールド回路

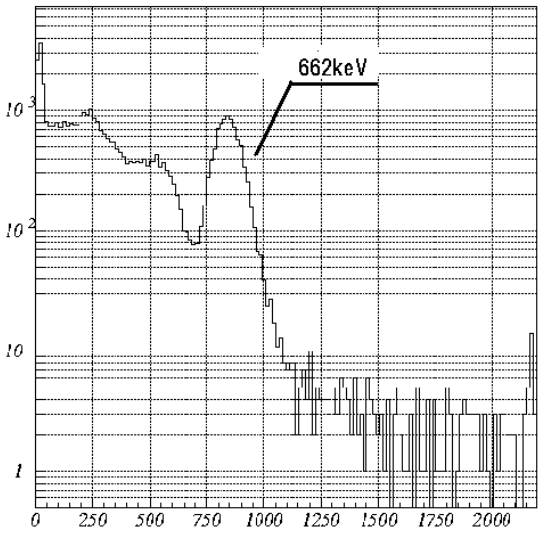


図 3.19: PH 回路を使用した時の GSO(10 mm × 10 mm × 10 mm) のエネルギースペクトル

3.3.6 LED スポット照射

シンチレータをかえても、エネルギー分解能が改善しないという結果を受け、64chPMT に局所的に分解能・ゲインが揺らいでいる可能性も考えられた。そこで、光電面を図 3.20 のように 25 分割し、その各々に LED 光を照射、測定することで、局所的な分解能・ゲイン揺らぎの存在を調査した。

本実験のセットアップは、図 3.21 のように行い、LED は PMT が最も感度が高い緑色を選択した。LED 光はコリメータで 2 mm × 2 mm に絞り、分割した光電面に照射した。

得られた結果は、図 3.22、図 3.23 である。これから、分解能とゲインには、位置によるゆらぎが存在することが確かめられた。分解能のゆらぎは、PMT 内部で一段目のダイノードの電子収集率に変動があることが起因になっていることが考えられる。また、ゲインのゆらぎについては、PMT 内部でのダイノードの増幅率に変動があることが起因になっていることが考えられる。

5	10	15	20	25
4	9	14	19	24
3	8	13	18	23
2	7	12	17	22
1	6	11	16	21

図 3.20: 64chPMT の光電面の分割位置の対応

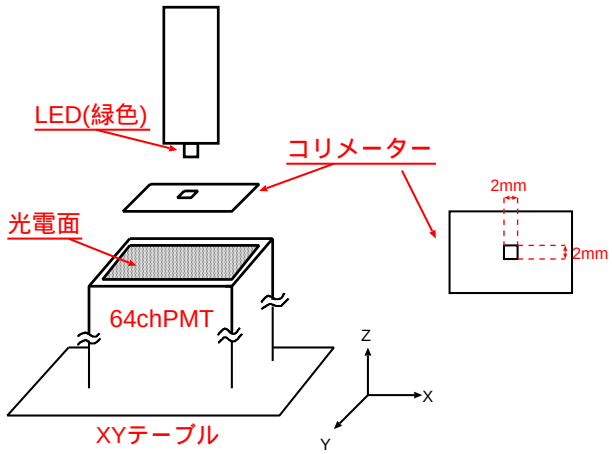


図 3.21: LED 照射実験のセットアップ

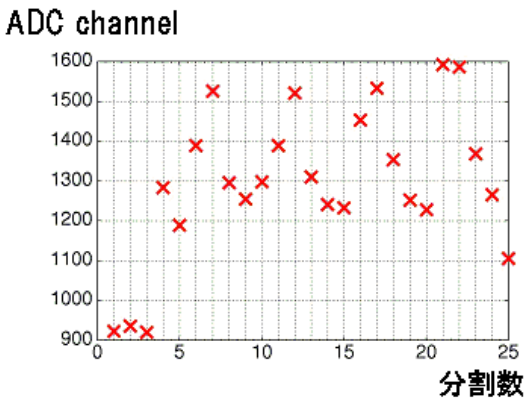


図 3.22: 分割数と ADC チャンネル (パルスハイト) の関係

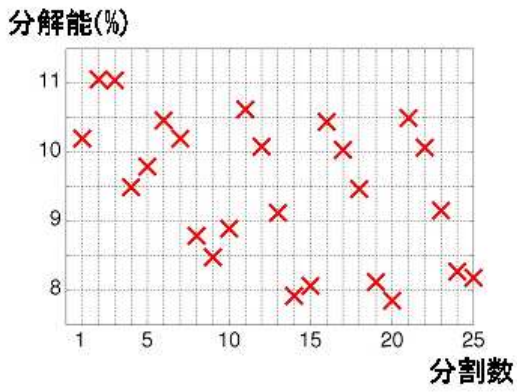


図 3.23: 分割数と分解能の関係

3.3.7　考察

64chPMT と GSO シンチレータを用いた検出器のエネルギー分解能を検証するため、いくつかの実験を行った。1 つ目の実験では、GSO のサイズを小さくすることで、エネルギー分解能は向上した。しかし、一般的な PMT に GSO を使用したときのエネルギー分解能である 7 % を達成することはできなかった。このため、分解能低下の要因は他にあると考え、温度依存、DAQ デバイスの AD 変換速度を考慮した検証を行ったが、あまり改善は見られなかった。そこで、64chPMT の入射位置によるゲイン・分解能を調査した結果、局所的なゆらぎがあることが確かめられた。

以上の結果から、64chPMT のエネルギー分解能の向上には、64chPMT 内部の電極構造などを製造元である浜松ホトニクス社と相談し、改良していく必要があると考えられる。

3.4　まとめ

今回試作した 64chPMT(+GSO) とアレイ型 PD を用いたガンマ線検出器は、十分な角分解能を有していないため、コンプトンカメラとして用いることは困難である。しかし、散乱体としてシリコンストリップ等の多チャンネルの PD 検出器を用いたり、Geant4 などのシミュレーションを用いてジオメトリを最適化することで十分な性能向上が期待できる。また、64chPMT のエネルギー分解能が低いことも大きな要因であったが、これは 64chPMT の各 ch に分解能・ゲインにバラツキに起因していることがわかったため、開発元の浜松ホトニクス社と相談し、改良していく必要がある。

第4章　放射線計測用VLSI(K02-32SA)の開発

4.1　VLSI開発の目的

天文衛星に搭載される検出器は多チャンネル化が進んでおり、現在計画されているNeXT衛星に搭載予定の硬X線撮像検出器では、そのチャンネル数は一万を越える。このような多チャンネルを有する検出器の信号処理回路は、いわゆるディスクリートなものでは、大きさ、消費電力の点から対応は困難である。よって、アナログ処理系を高密度に集積し、小型化及び低消費電力を実現することが可能であるVLSIの利用は必須である。

現在、放射線計測用VLSIの技術は、ノルウェーのIDEAS社やLBLのグループなど限られた所にしかない。そこで我々は、ISASの高橋研の協力、および池田先生からの指導を受け、放射線計測用VLSIの設計・製作に取り組むことにした。これにより、VLSIの基本的な知識や技術を身につけ、独自に高性能なVLSIの設計を行なうことを目標である。

4.2　基本事項

4.2.1　ASIC

本研究で開発している放射線計測用VLSIのように、特定の用途に設計された集積回路を一般にASIC(Application Specific Integrated Circuit)と呼ぶ。ASICには、ゼロから回路を設計するフルカスタムと、あらかじめ特定の機能を持った回路ブロックを組み合わせたものを用意しておき、配線を変えることで要求に合わせるセミカスタムがある。フルカスタムによる設計は自由度が高く、より高精度、より低消費電力な回路を実現することが可能であり、アナログ回路の性能向上に有利である。したがって、本研究においてもフルカスタムによる設計を行なっている。

4.2.2　CMOSプロセス

CMOS(Complementary Metal Oxide Semiconductor)は、相補的な動作をするpMOSとnMOSの2種類のMOSFETを同一基板上に形成した回路である。例としてpMOSの構造を図4.1に示す。MOSは、金属と酸化物、半導体を重ね合わせた構造の素子であり、電圧で電流を制御するデバイスである。CMOSプロセスで製造されたトランジスタは、定常状態では、ほとんど電流が流れないために、消費電力が抑えられる利点がある。また、高速動作、製造コストが低いといった利点もある。本研究でもCMOSプロセスが使われている。

アナログCMOS設計の基礎となるドレイン電流I_Dは、次式のように与えられる。

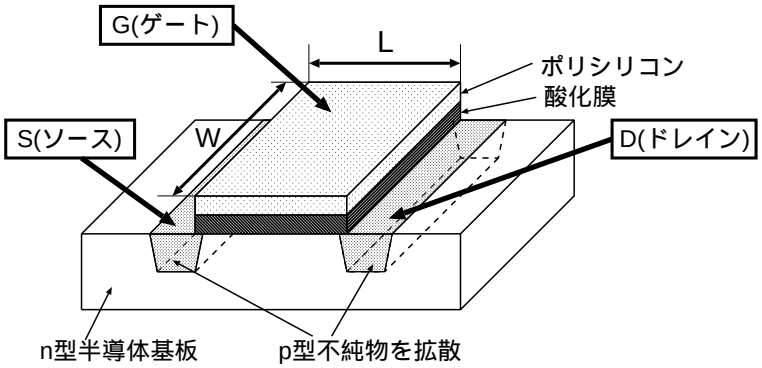


図 4.1: pMOS デバイス構造

$$I_D = \mu_n C_{ox} \frac{W}{L}[(V_{GS} - V_{TH})V_{DS} - \frac{1}{2}V_{DS}^2] \tag{4.1}$$

ここで、μ_n は電子の移動度、C_{ox} は単位面積あたりのゲート容量、V_{GS} はゲート・ソース間の電圧、V_{DS} はドレイン・ソース間の電圧ある。V_{TH} はドレイン・ソース間に反転層が形成され、ドレイン電流 I_D が流れはじめるしきい値電圧である。L,W は図 4.1 に示した部分の長さで、それぞれチャネル長、チャネル幅といい、その比 W/L(アスペクト比) は、MOS の特性を決める重要なパラメータの一つである。

また、ゲート電圧 V_{GS} に対するドレイン電流 I_D の変化を表すトランスコンダクタンス g_m は次式のように与えられる。

$$g_m = \frac{\partial I_D}{\partial V_{GS}} = \mu_n C_{ox} \frac{W}{L}(V_{GS} - V_{TH}) \tag{4.2}$$

これは、ゲート電圧 V_{GS} がドレイン電流 I_D を制御する能力を表す重要なパラメータとなる。

4.2.3 LSI 設計の流れ

図 4.2 に LSI 設計の大まかな流れを示す。

システム設計

最初に、製作する LSI の機能や仕様、回路方式などのシステムを決定する。具体的には、用途に合わせて、信号処理回路の仕様、ノイズレベル、電力、電源電圧、チャンネル数、チップサイズ等を考察していく。そして仕様が決定後、仕様するプロセスを決定する。開発対象と半導体プロセスの間には適合性があり、これが合わない場合、問題が生じる可能性もあるため、適切なプロセスを選択する必要がある。

回路設計・回路図入力

システム設計の要件を満たす回路を、トランジスタ、抵抗、コンデンサなどの実際の回路素子で記述する。これには、回路シミュレータの入力言語である SPICE(Simulation Program for Integrated Circuit) 記述が標準的に使われている。

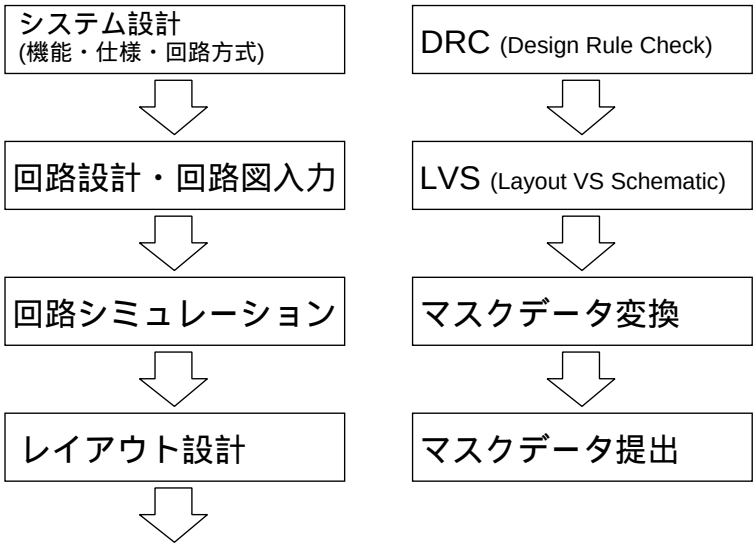


図 4.2: アナログ ASIC 設計の流れ

回路シミュレーション

SPICE ネットリストを用いて、回路シミュレーションを行う。シミュレーションを行うことにより、回路の不具合を発見し、それをフィードバックすることで、仕様通りに動作する回路を実現していく。確認事項は出力波形だけではなく、温度特性、ノイズ評価、電源電圧感度等も検証していく必要がある。また、MOS の動作特性や寄生効果をできるだけ厳密に再現するために、LSI 製造メーカーから提供されている MOS パラメータを使用する必要がある。

レイアウト設計

SPICE 記述の物理的な素子や配線の配置を行なう。これはレイアウトエディタを用いて行なう。このソフトウェアには、レイアウトの要素となる図形 (矩形、多角形など) を入力し、編集するコマンドが用意されている。

DRC

設計したパターンレイアウトがデザインルールを満たしているか検証する。デザインルールとは、プロセス技術者がプロセスの製造精度から決めたパターンの制約条件であり、各層のパターン幅、間隔や各層の重なりなどの許容最小寸法を表したものである。このルールを満たすパターンレイアウトは、必ず動作することが保証されている。

LVS

レイアウトデータから回路の接続情報を抽出し、回路設計で作成した SPICE ネットリストと比較照合する。完全に一致するまで、レイアウトを修正していく必要がある。

マスクデータ変換

DRC、LVS を通すことができれば、レイアウト作業は終了となる。このレイアウトを LSI 製造メーカーに提出するため、GDS-II と呼ばれるマスクデータ (Stream Format) に変換する。

マスクデータ提出

マスクデータを製造メーカーに渡し、ユーザーレベルの作業は終了となる。

4.3 1次元アナログVLSI(K01)

4.3.1 開発目的

NeXT衛星搭載HXI検出器用に高度なVLSIを開発する必要がある。その前段階として小林 (ISAS/JAXA) らによって、低ノイズ16chアナログVLSIであるK01の開発が行なわれた。

4.3.2 K01の概要

K01チップは、CdTe(テルル化カドニウム)ストリップ検出器やピクセル検出器の信号読み出しを目的としたVLSIである。ピクセル検出器に対応するため、16chの入出力端子をもつ。回路の仕様を以下に、チップパラメータを表4.1に、1ch 分の回路構成を図4.3に示す。

- 16chチャンネルアナログVLSI
- 正信号入力
- 各ch毎に、プリアンプ、PZC付き微分回路、3段積分回路、ピークホールド回路、コンパレータ回路を内蔵
- プリアンプは、内蔵、外付けの選択が可能
- モニター端子付き (1chのみ)

プロセス	ローム社 CMOS 0.35 μm (東京大学 VDEC 経由)
チップサイズ	4.93 mm角
PolySi	2層
メタル配線	3層
電源電圧	3.3 V (VDD = 2.0 V,VSS = -1.3 V,GND = 0 V)
トランジスタ数	6904個
ロジックレベル	LVDS(Low : 0 mV, High : 350 mV)

表 4.1: K01チップパラメータ

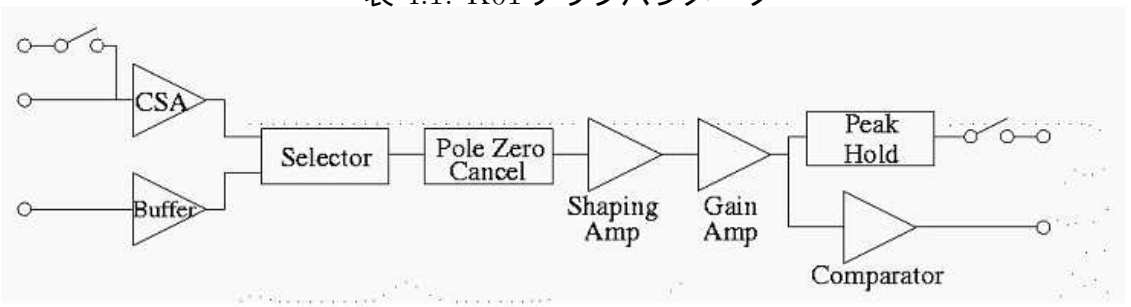


図 4.3: K01チップの1チャンネル当りの回路構成

4.3.3 評価結果

K01 チップはすでに性能評価が行なわれており、アナログ部、デジタル部ともに正しく動作することが確認されている。また、CdTe 半導体検出器を用いて X 線のスペクトルを取得することにも成功している。一方で、明らかな問題点が 2 点見つかった。詳細は井上修論 (2004 東京大学) 参照。一つめは、高抵抗回路を用いたことで、出力信号のオフセットにバラツキがみられたことであり、二つめは、CdTe 半導体の等価雑音電荷が、目標の 100 electron の十倍程度になったことである。一つめの問題は、製造プロセス段階において CMOS の精度のずれ込みにより生じるものである。具体的には、高抵抗回路における CMOS の差動対のずれが原因と考えられる。二つめの問題は、シミュレーションによる詳細な解析の結果、ポールゼロ補償回路が主な原因であることが明らかになった。

4.4　1次元アナログVLSI(K02)

4.4.1　開発目的

K02は、K01の問題点を改善し、チャンネル数を増加させたVLSIである。主な改良点は以下の2点である。

- オフセット対策 … カップリングコンデンサを積分回路の後段に挿入した。これにより、DC成分を除去してオフセットのバラツキを抑えられる。
- ノイズ対策 … ポールゼロ補償回路が、主なノイズ源であることが明らかになったので、微分回路の前段に積分回路を挿入することでゲインをかせぎ、S/N比を向上させた。順序を入れ換えただけであるため応答には影響しない。

本チップは、Taiwan Semiconductor Manufacturing Company(TSMC)社のデザインルール0.35μmプロセスを用いて試作した。図4.4のように15mm角の親チップの中に6種類のサブチップを設計した。そのうちの5種類がK02チップ、残りの1種類がカウンティング用チップ(T02)となっている。

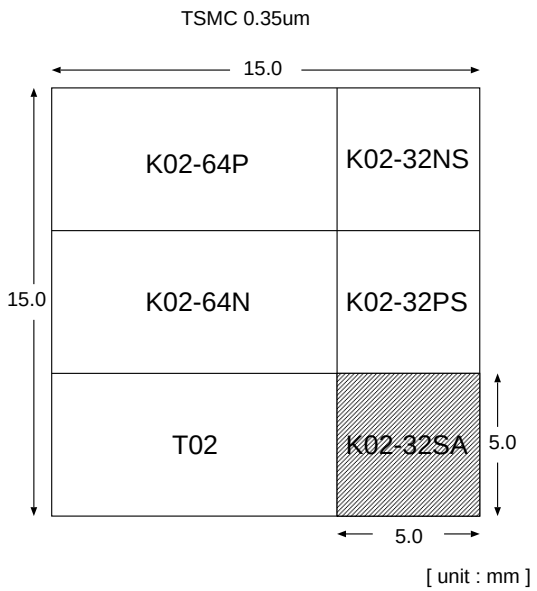


図 4.4: チップの構成図

表4.2にK02シリーズのチップの概略を示す。我々のグループの木原が開発を行ったものは、この中のK02-32SAである(木原修論 2005 広島大学)。他のK02シリーズについては田村修論(2005 東京大学)を参照。K02-32SAと他のK02シリーズの大きな違いはプリアンプを内蔵しているか、していないかである。パラメータの違いはあるが回路の構成自体は他のK02シリーズと変わらない。K02-32SAチップは、マルチアノードPMT(MA-PMT)やAPDアレイの読み出しを考えているが、プリアンプの設計が最も難しいことが分かっており、今回はプリアンプ後段の回路をきちんと動作させることを目標として、プリアンプは内蔵しなかった。よって、K02-32SAの前段にはプリアンプを別途準備する必要がある。

チップ名	入力信号極性	CSA 帰還容量 [pF]	主な用途
K02-64P	正	0.1 or 0.05	CdTe や Si の半導体検出器用。 Cathode 読み出し。
K02-64N	負	0.1 or 0.05	K02-64P と同様。 Anode 読み出し。
K02-32PS	正	5 or 15	大信号 (粒子線など) の読み出し用。
K02-32NS	負	5 or 15	K02-32PS と同じ。入力信号の極性が異なる。
K02-32SA	正	CSA 内蔵せず	MA-PMT、APD などの読みだし用。 CSA は外づけにして使用する。

表 4.2: K02 シリーズ一覧表

4.4.2 K02-32SA の概要

K02-32SA は、MA-PMT や APD アレイの読み出しを目的とした、32 チャンネル入出力 VLSI であり、検出器の出力信号の極性がどちらであっても対応できるように、チップの入力極性を正・負と切替える事ができるという特徴をもっている。1 チャンネル当りには、初段積分回路、PZC 回路、2 段目積分回路、利得増幅回路、ピークホールド回路、コンパレータ回路が組み込まれており、これが 32 チャンネル分チップの中に搭載されている。なお、PZC 時定数は 50μs、整形時定数は 1 μs ~ 10 μs の範囲で調整可能であり、ディスクリレベルは -1 V ~ + 1 V までの範囲で調節可能である。この回路はパラレル入力パラレル出力にて動作を行う。入力は極性を選択することができるが、出力は負極性にて出力される。また、K01 チップと同様にチップ中のアナログ回路の途中にモニター機能を随所に設け、詳細なチップの動作を調べることができるという特徴を持っている。なお、モニター機能は [ENB] スイッチで ON、OFF の選択をすることができる。
目標とする消費電力は、100 μW/pixel である。これは、衛星搭載を考える上で低消費電力は必須であるためである。ダイナミックレンジは、入力で 1 mV ~ 100 mV である。これは、PMT 検出器と BGO+APD 検出器で使用することを考え決めた。また、ゲインは 1 ~ 16 倍 で調整することができる。よって、この範囲・ゲインであれば PMT 検出器で 100 keV ~ 1 MeV 相当、BGO+APD 検出器の場合、30 keV ~ 300 keV 相当のエネルギー範囲をカバーすることができる。このエネルギー範囲は検出器のバイアス電圧で調整することが可能である。また、ノイズレベルは、入力信号換算で 0.5 mV を考えており、このレベルであれば入力信号であるプリアンプ出力信号に対して十分低ノイズであると言える。また、後で詳しく述べるが出力オフセットもおよそ ± 50 mV の範囲で調節可能である。

回路の仕様

- 32 チャンネル 1 次元アナログ VLSI
- 各チャンネル毎に、初段積分回路、PZC 回路、2 段目積分回路、利得増幅回路、ピークホールド回路、コンパレータ回路を内蔵
- 入力信号の極性選択が可能

- 32 チャンネルをパラレル出力 (極性:負、 ~ -0.6 V)
- １チャンネルにはモニター端子付き
- 消費電力：100 μW/pixel
- 入力ダイナミックレンジ：1 mV ~ 100 mV
- ゲイン調整：1 倍 ~ 16 倍
- ノイズレベル：0.5 mV (入力信号換算)
- 出力オフセット調整：$\pm$ 50 mV
- PZC 時定数：50 μs
- 整形時定数：1 μs ~ 10 μs
- ディスクリレベル：-1 V ~ +1 V

チップパラメータ

会社名	Taiwan Semiconductor Manufacturing Company (TSMC)
デザインルール	0.35 μm
ピン数	144
チップサイズ	5 mm $\times$ 5 mm (15 mm 角チップを分割して使用)
電源電圧	3.3 V (VDD = 2.0 V,VSS = -1.3 V,GND = 0 V)
ロジックレベル	LVDS(Low: 0 mV,High: 350 mV)
搭載チャンネル数	32 チャンネル

表 4.3: K02-32SA チップパラメータ

回路ブロック構成

図 4.5 に 1 チャンネル当たりの回路構成を示す。荷電増幅器 (CSA) が入っておらず外付けでプリアンプを付ける様になっている。整形増幅器、ピークホールド回路、コンパレーター回路から成り立っている。

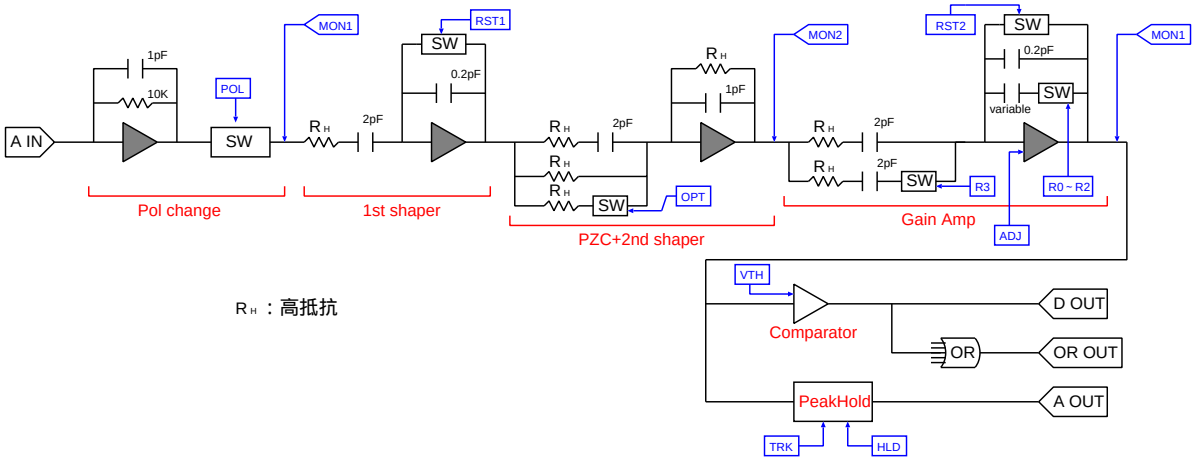


図 4.5: K02-32SA チップの回路ブロック図

4.4.3 アナログ処理回路の性能評価

木原 (広島大 理) らによって行なわれた性能評価の結果を示す。性能評価には私も参加して行なった。詳細は木原修論を参照。

評価回路を製作し、K02-32SA のアナログ処理系の動作確認を行なった。具体的にはモニター出力端子を有効にして、回路中のアナログ信号を確認した。モニター出力端子は、極性切替え回路、波形整形回路、利得増幅回路の出力信号を確認できるようになっている。入力信号は GSO と PMT を組み合わせたシンチレーション検出器に、 600 keV のガンマ線が入射したときに相当する信号 (80 mV) をパルサーで入力している。

セットアップ

K02-32SA チップにアナログ信号を入力し、スペクトルを取得するためのセットアップを図 4.6 に示す。信号処理は NI 社の LabVIEW および DAQ デバイスを用いて行なう。なおチップのデジタル信号は、LVDS(Low Voltage Differencial Signaling) を用いている。

極性切替え回路のモニター出力

パルサーにより入力された信号 (80 mV) が、極性切替え回路により極性を切替えることができているかをオシロスコープにより確認した (図 4.7、4.8)。これにより正しく動作していることが示された。

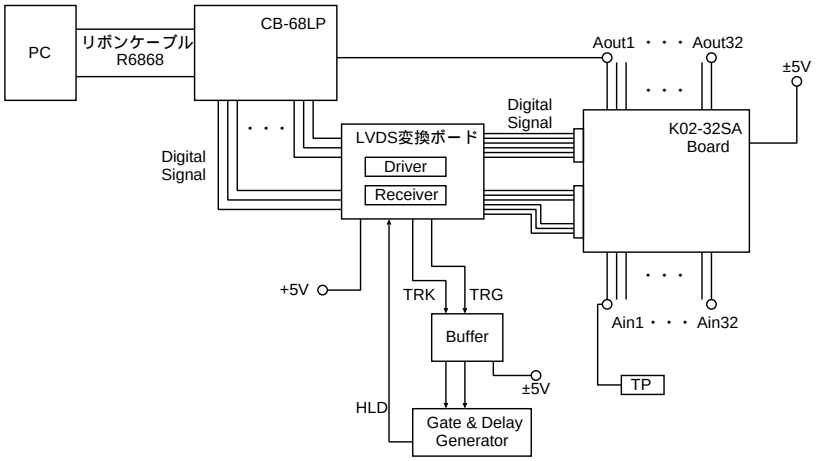


図 4.6: K02-32SA セットアップ

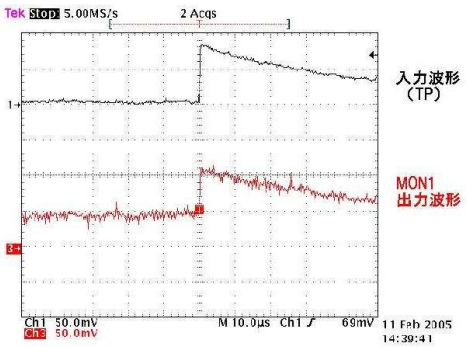


図 4.7: 正極性入力時の極性切替え回路後の波形

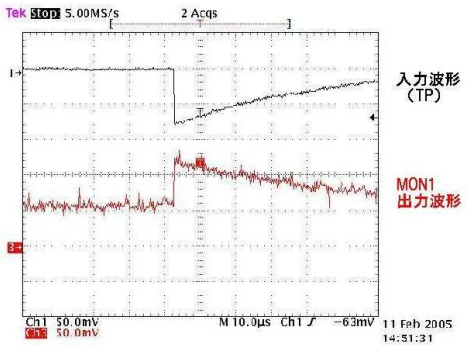


図 4.8: 負極性入力時の極性切替え回路後の波形

波形整形回路のモニター出力

図 4.9、図 4.10 に得られた波形を示す。2 つの積分回路が通すため、極性は極性切替え回路の出力と同様である。ゲインは約 3 倍、時定数は約 8 μ となっており、これは設計どおりの結果である。また、PZC 回路によってアンダーシュートが解消されていることも確認できた。時定数は、高抵抗回路の電流を調整することで変更できることも示された。

可変利得増幅回路のモニター出力

図 4.11 に得られた波形を示す。可変利得増幅回路は反転増幅回路であり、その出力極性は整形回路と逆となる。ゲイン調整をおこなった出力波形 (図 4.12) も確認したところ、ゲイン調整機能も正常に動作していることが示された。時定数も整形回路と同じになっていることも確認できた。

K02-32SA チップからの出力

最終的なチップからの出力は、可変利得増幅回路の出力がピークホールドされた信号である (図 4.13)。この波形をみると、K01 チップで問題であった出力オフセットはなく、改良が成功していることが確認できる。

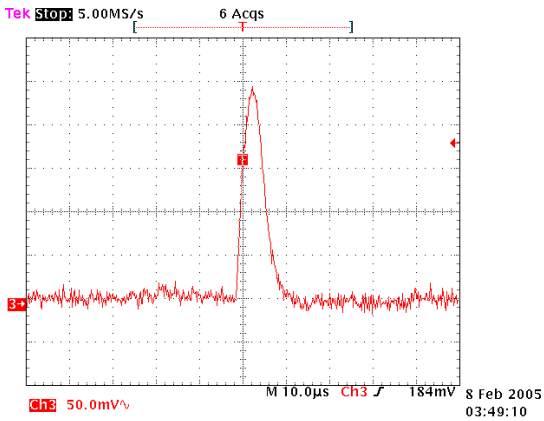


図 4.9: 波形整形回路の出力波形

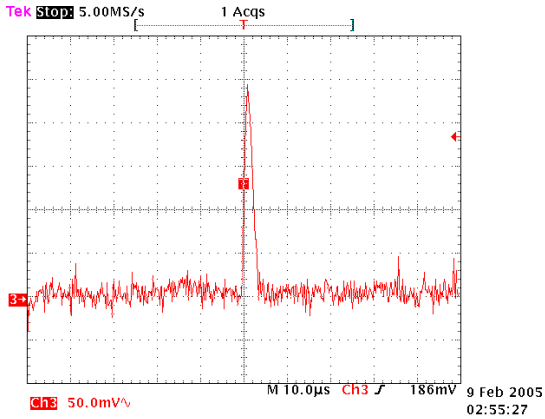


図 4.10: 高抵抗回路の電流にて時定数を調整した時の波形整形回路後の出力波形

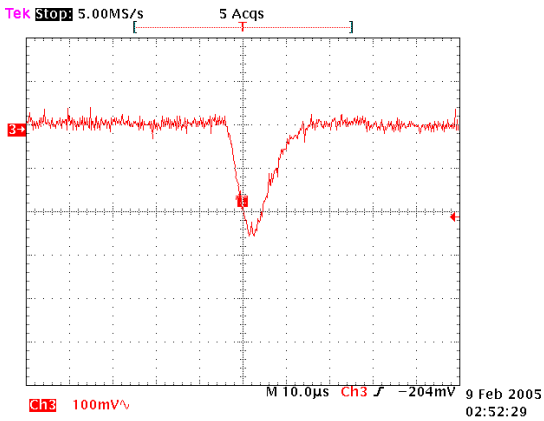


図 4.11: 可変利得増幅回路の出力波形

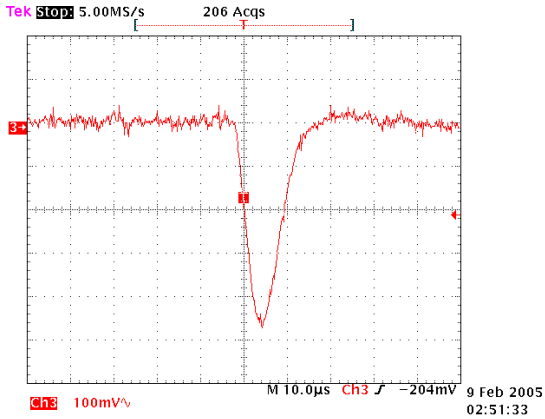


図 4.12: ゲインを 2 倍にした時の可変利得増幅回路後の出力波形

LabVIEW で得られたスペクトル

K02-32SA チップにアナログ信号を入力すると上記のような信号処理が行なわれ、ピークホールドされた信号が出力される。この信号は LabVIEW を用いた DAQ デバイスで AD 変換されデータ集録される。図 4.14 は 50 mV、80 mV、100 mV のパルサー入力を行なったときのスペクトルである。TP = 80mV のピークは 700 channel 付近にあり、60 channel 付近のピークはノイズにより得られたものである。ノイズは出力電圧で 10 mV 程度であり、ノイズレベルは設計より悪くなってしまった。これは、外来ノイズや評価基板上のノイズを除去しきれていないことが原因であると考えられる。しかしこの状態においても、K01 チップに比べノイズレベルが 1/5 程度になっており、性能向上が確かめられた。

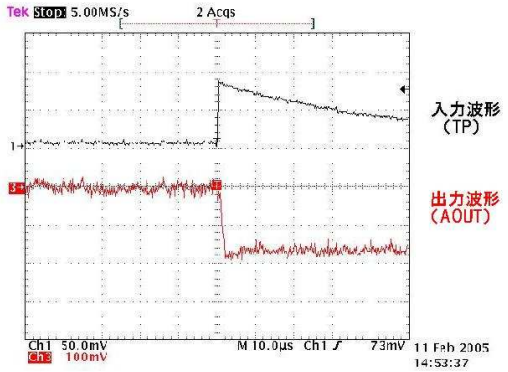


図 4.13: K02-32SA チップからの出力

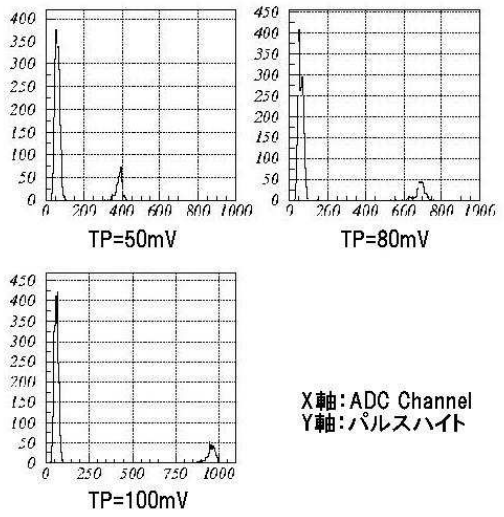


図 4.14: LabVIEW を用いて得られたスペクトル (TP=50mV,80mV,100mV)

4.4.4　リニアリティ

可変利得増幅回路までのリニアリティ

可変利得増幅回路までのアナログ回路系が正常に動作していることを確認するため、リニアリティ測定を行なった。PMT(+ GSO) 検出器を用いた場合のエネルギー範囲 (100 keV ~ 1 MeV) を想定し、10 mV から 200 mV の信号をパルサーにより入力した。

得られた結果 (図 4.15) から、10 mV から 120 mV までのリニアリティは十分確保されていることがわかった。高エネルギー側にやや難があるが、実用的に問題のない程度の線形性が確保されている。

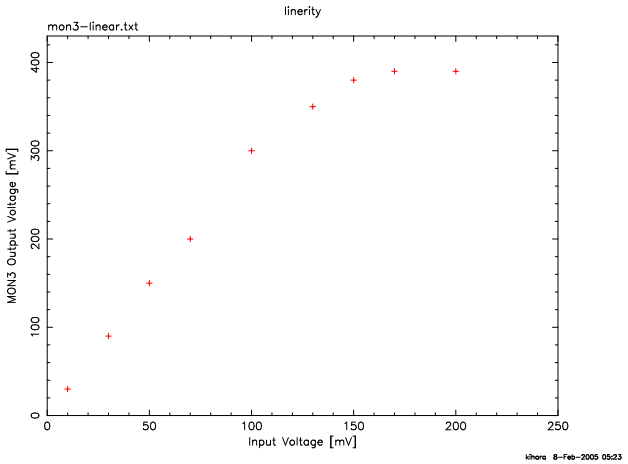


図 4.15: 可変利得増幅部までのリニアリティ

32 チャンネル分の各リニアリティ

ここまでは、モニター出力がある CH1 についての評価を行ない、正常に動作していることが確かめられた。次に残り 31 ch 分の動作確認を行なうため、1 ch ずつリニアリティ測定を行なった。ch2 から ch32 まではモニター出力は回路に組み込まれていないため、LabVIEW により最終的な出力信号を取得し、それによりリニアリティ測定を行なった。入力するテストパルスは 1ch の同様に 10 mV から 200 mV の信号を入力した。

その結果の一部を示す (図 4.16 ~ 図 4.21)。これらの結果から、入力極性の違いに対する出力信号に大差はみられない。しかし、チャンネル間において多少のゲインのバラツキがみられる (図 4.22)。これは、高抵抗回路において素子の値にバラツキがあることが原因であると考えられる。また、出力が 120 mV までしかない、設計どおりの性能を実現できていないチャンネルもみつかった。これは、製造プロセスにおける CMOS の精度のずれがあるためであると考えられる。

4.4.5　まとめ

動作評価では、まずモニター機能が使用できる CH1 について評価を行なった結果、アナログ処理回路が正常に動作していることを確認することができた。K01 チップで問題となった出力信号のオフセットも解消され、また、外来ノイズ落としが不完全であるにも関わらず、K01 よりもノイズレベルが低いことも確認できた。これらの結果より、製造プロセスによる誤差はあるものの、設計時に行なったシミュレーションと同等の性能を有する

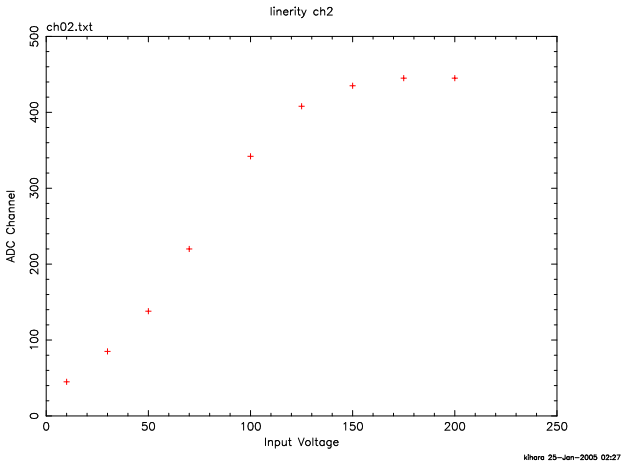


図 4.16: CH2 のリニアリティ(入力極性:正)

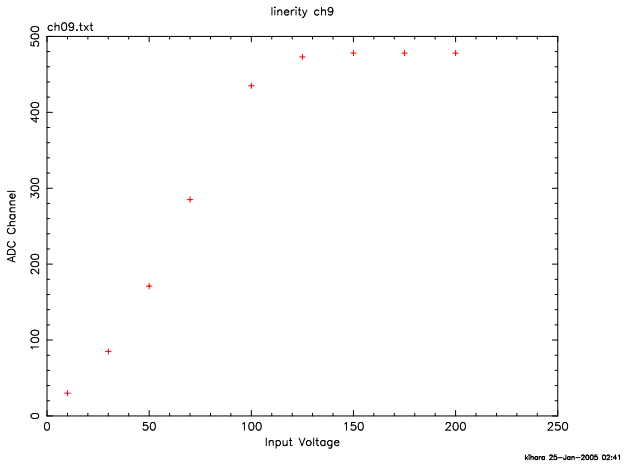


図 4.17: CH9 のリニアリティ(入力極性:正)

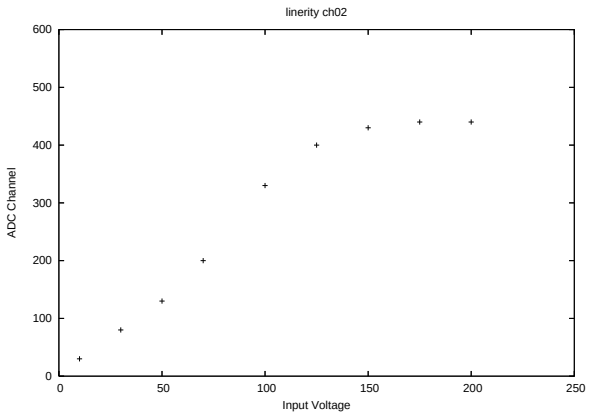


図 4.18: CH2 のリニアリティ(入力極性:負)

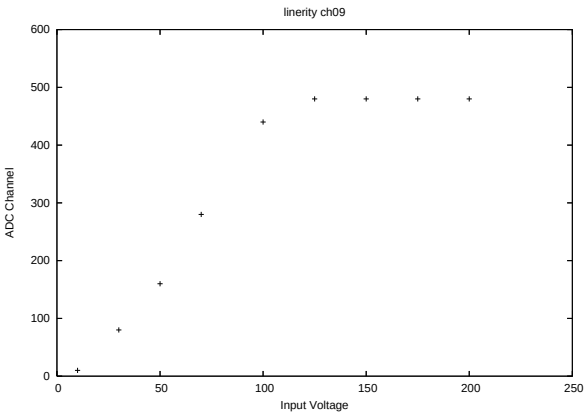


図 4.19: CH9 のリニアリティ(入力極性:負)

ことがあることが示され、K01 チップからの改善点を含め、ほぼ設計どおりに製作されていることが確認できた。

CH1 の評価後、残りの全チャンネルについての評価を行なった。その結果、高抵抗回路における素子パラメータのバラツキが原因で、各チャンネル毎の出力の波高値に最大 20 % のバラツキがみられたが、ほぼ正常どおり動作していることが確認できた。しかし、その中には出力の波高値が 120 mV 程度しかなく、設計どおりに動作していないチャンネルもみつかった。これは、製造プロセスにおいて CMOS の精度のずれによって生じたものと考えられる。

以上のことから、K02-32SA はほぼ設計どおりの性能を有しているといえる。今後は、外来ノイズ落としなどを行ない、より正確な評価を行なう必要がある。

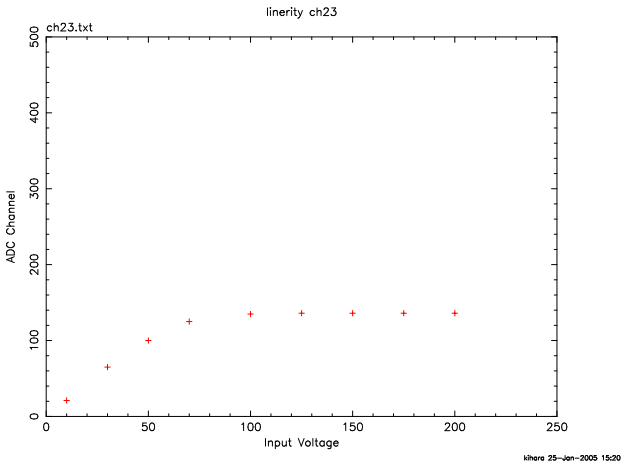


図 4.20: CH23 のリニアリティ (入力極性:正)

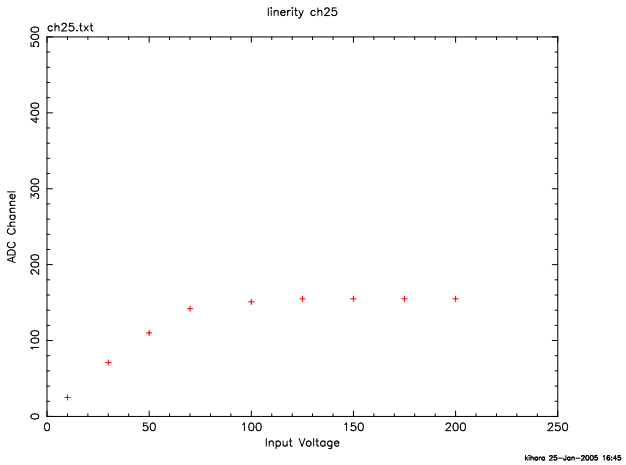


図 4.21: CH25 のリニアリティ (入力極性:正)

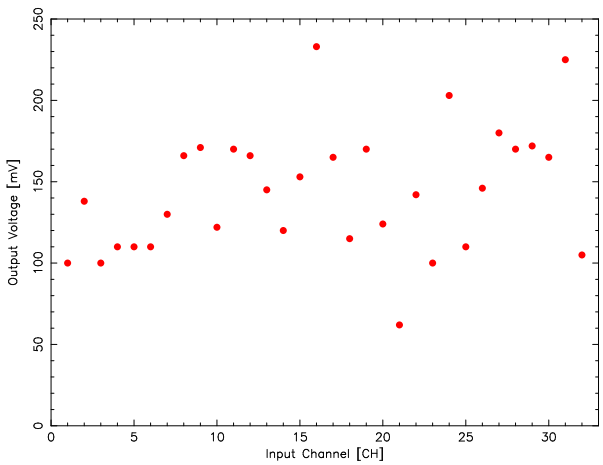


図 4.22: 入力電圧 50 mV に対する各 CH の出力電圧のばらつき

第5章　プリアンプLSIの設計・開発

5.1　開発目的

木原 (広島大 理) らによって開発された K02-32SA は前章で述べたとおり、さらなる性能評価、改良は必要であるが、設計どおりに動作することが確認できている。しかし、設計の難しいプリアンプ部は組み込まれていないため、外付けでプリアンプを準備する必要である。

今回試作するプリアンプ LSI は、K02-32SA と組み合わせるプリアンプの仕様を検討することを目的とする。最終的には K02-32SA の回路と試作したプリアンプ LSI の回路を組み合わせることで、1 チップで 64chPMT のアノード 64 本分の信号処理の全行程を行なえる VLSI を開発することが目標である。

5.2　設計条件

5.2.1　要求及び設計仕様

3.2.6 節で行なった 64chPMT(+GSO) のエネルギー分解能低下の検証から、現在使用している 64chPMT 用読み出し回路 (ディスクリート素子により構成したプリアンプ回路) は、分解能低下の要因にならないレベルの性能を有していることがわかった。したがって、今回試作するプリアンプ LSI も、この読み出し回路程度の性能を有していればよい。つまり、同程度のエネルギー分解能があれば、64chPMT のプリアンプとして十分実用レベルであるといえる。

信号帯域は、64chPMT(+GSO) をコンプトンカメラの吸収体に用いた場合を想定し、100 keV ~ 1 MeV (GSO に入射するガンマ線のエネルギー) とした。また、ゲインを調整できるように帰還容量を外付けで変更できるようにした。

- 検出器：64chPMT(アノード)
- 標準入力電子数：10^6 ~ 10^7 electron/channel @ 100 keV ~ 1 MeV
- 入力信号の極性：負 (正も可)
- チップ当りの実装チャンネル数：2 channels
- エネルギー分解能：11 % 662 keV
- 帰還容量 (外付け)：任意
- 帰還容量 (内蔵)：1 pF
- 帰還抵抗：任意 ※ 基準電流により調整

- gm = 5.41 mS @ Id = 300 uA
- テストパルス入力回路付き

5.2.2 検出器の性状 (64chPMT(アノード)+GSO)

- 漏れ電流：0.2 nA/channel (カタログ値)
- 出力容量：2.0 ~ 2.7 pF/channel (測定値)
- 利得：3.0×10^5 (カタログ値)
- チャンネル数：64(8×8) channels
- 標準出力信号：10^6 ~ 10^7 electron/channel (測定値) @ 100 keV ~ 1 MeV

5.3 開発スケジュール

当初、要件を満たす回路を複数パターン考え、試作も複数回行う予定であったが、十分要件を満たす回路を設計することができたことから試作は一度のみとし、VDEC 第 5 回試作 (ローム 0.35 μm プロセス) に申し込んだ。マスクデータ提出の 2 か月前から回路設計・回路シミュレーションを開始し、残り 1 か月でレイアウト設計を行なった。ローム 0.35 μm プロセスのデザインルールを満たすことを確認し、マスクデータを VDEC に提出した。それから 3 か月後、QFP パッケージされたチップが 4 個、ベアの状態のチップが 16 個、計 20 個のチップが納入された。納入までに製作しておいた評価ボードを用い、チップの評価を行なった。図 5.1 にタイムテーブルをまとめた。

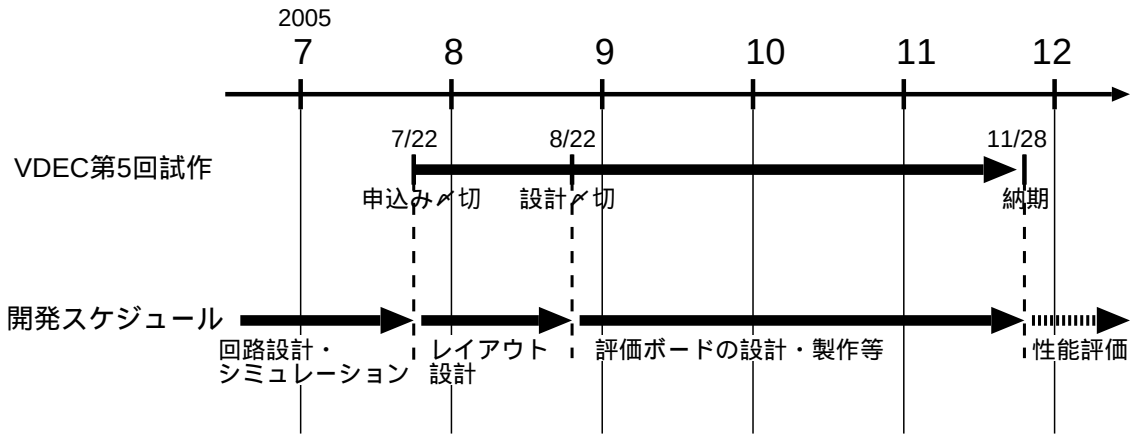


図 5.1: プリアンプ LSI 開発のタイムテーブル

5.4 システム設計

5.4.1 試作案

今回、1 チップに 2 タイプのプリアンプ回路を組み込む (表 5.1)。各パラメータの定義については、4.2.1 節を参照。幅の比較的広いトランジスタでは、ゲートの分布抵抗が無視できないため、折り返し構造にすることが一般的である。パラメータ M は、その折り返し回数を示している。

2 つのプリアンプの違いは、採用している増幅要素の違いであり、タイプ A1 には、フォールデッドカスコード (folded cascode) 型の増幅要素を、タイプ A2 には、ブーステッドカスコード (boosted cascode) 型の増幅要素を採用している。2 つの増幅要素は基本性能は同じであるが、ブーステッドカスコード型を採用した場合、インピーダンスがカスコードトランジスタのドレイン側で高く、ソース側で低くなるため、オープンループゲインを向上させることができる。また、入力トランジスタのゲート・ドレイン間の容量 (ミラー容量) も軽減されるため、周波数帯域も改善することが期待できる。以下、これら増幅回路の特徴を簡単に述べる。

タイプ	ドレイン電流 Id[μA]	アスペクト比 W/L	gm[mS]	増幅要素のタイプ
A1	300	8/0.5 M=100	5.4	folded cascode
A2	300	8/0.5 M=100	5.4	boosted cascode

表 5.1: 試作案

フォールデッドカスコード型増幅回路

フォールデッドカスコード型増幅回路 (図 5.2) は、カスコード接続のトランジスタが直列に接続されているテレスコピックカスコード (telescopic cascode) 型増幅回路 (図 5.3) の制限された出力振幅や入力-出力間の短絡の難しさを低減した回路である。フォールデッドカスコード型増幅回路の第一の利点は、入力デバイスの上にカスコード接続のトランジスタが積まれていないため、使用できる電圧レベルの幅を広げることができることである。

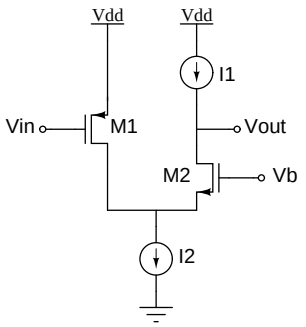


図 5.2: フォールデッドカスコード型増幅回路

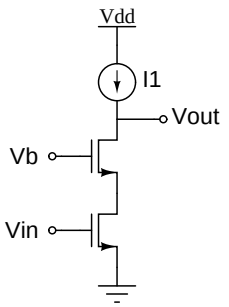


図 5.3: テレスコピックカスコード型増幅回路

ブーステッドカスコード型増幅回路

ブーステッドカスコード型増幅回路の原理は、図 5.4 に示すように Vx (図中の X 点の電位) を Vb に保とうとするアンプを用いて M2 のゲート電圧を駆動することである。これによって Vx は Vb に制限され、M2 のドレイン端の電圧変動が Vx に依存しなくなる。結果、あらたにカスコードデバイスを積み上げることなく、大きな利得を得ることができる。図 5.5 に示す例は、3 重カスコードに匹敵する利得を得ることができる。

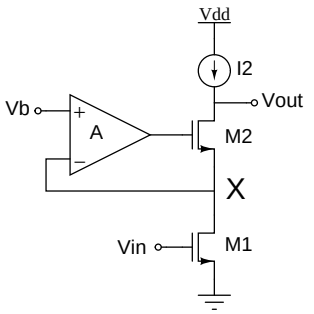


図 5.4: ブーステッドカスコード型増幅回路

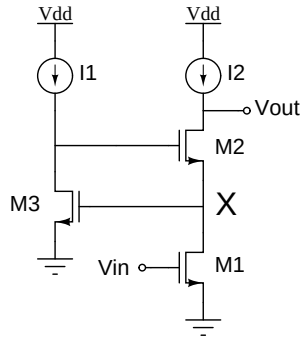


図 5.5: ブーステッドカスコード型増幅回路の例

5.4.2 回路構成

図 5.6 に 1 チップの回路構成を示す。荷電増幅回路 (CSA) とバッファ回路から構成される回路ブロックを 2 系統内蔵している。また、帰還容量は調整できるようにするため外付けとした。

信号は「A1in」,「A2in」端子を介して CSA に入力され、バッファを介して「A1out」,「A2out」端子から出力される。また、「TP」端子を通じてテストパルスが入力できるようになっており、「ENB」端子から”H” 信号を入力することにより、テストパルス入力が可能となる。なお、「TP」、「ENB」、バッファ用基準電流入力「IOP」、抵抗回路用リファレンス電流入力「IFB」、プリアンプ用基準電流入力「IPR」は便宜上、2 つの回路で共通とした。

5.4.3 チップの構成

LSI の種類として、セミカスタム LSI とフルカスタム LSI があるが、今回は 64chPMT を用いた検出器により適合したもの作成することが目的であるため、より自由度の高いフルカスタムによる試作を行う。

チップパラメータ

- 会社名：ローム株式会社
- プロセス：CMOS 0.35 μm

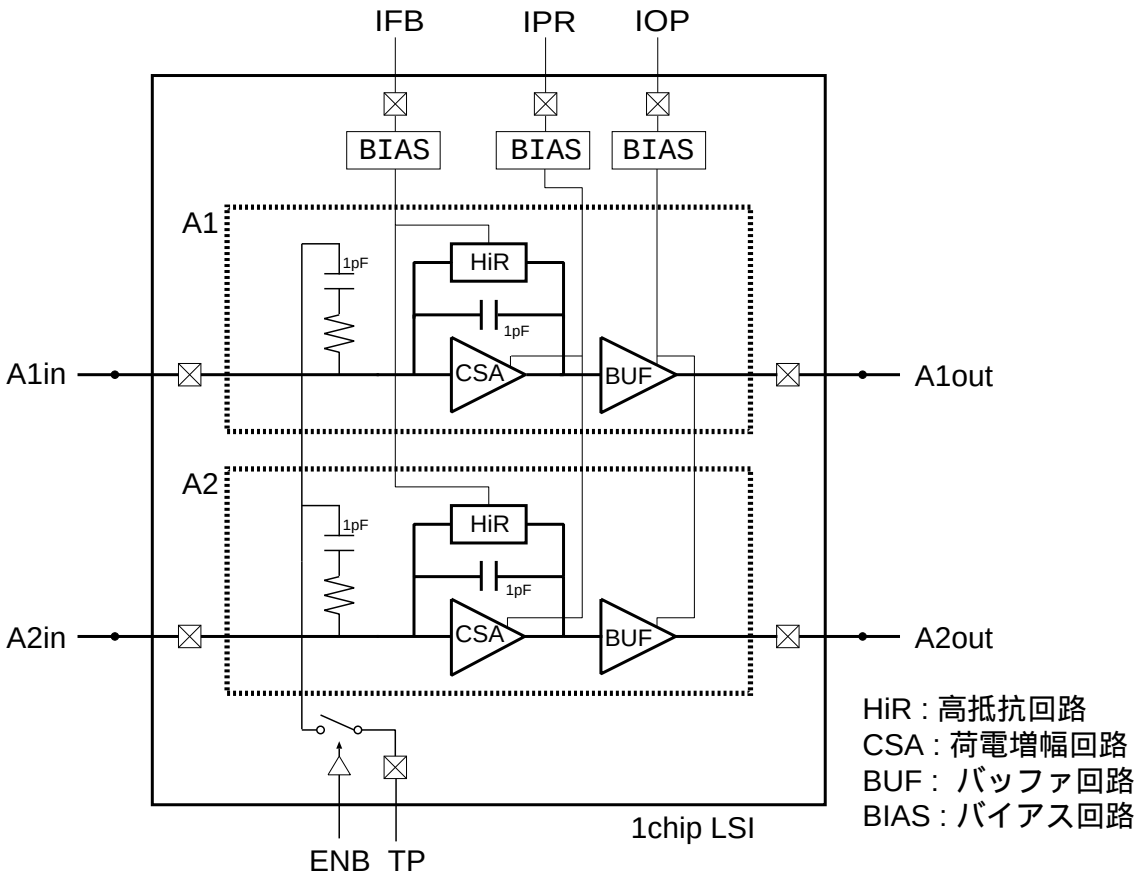

IFB
IPR
IOP
BIAS
BIAS
BIAS
A1
1pF
HiR
1pF
A1in
CSA
BUF
A1out
A2
1pF
HiR
1pF
A2in
CSA
BUF
A2out
HiR : 高抵抗回路
CSA : 荷電増幅回路
BUF : バッファ回路
BIAS : バイアス回路
1chip LSI
ENB
TP

図 5.6: ブロック図

- **パッド数**：60 個
- **チップサイズ**：2.4 × 2.4 mm^2
- PolySi：2 **層**
- **メタル配線**：3 **層**
- **電源電圧**：3.3 V
- **パッケージ**：**セラミック** QFP80

回路規模

- **トランジスタ数**：108 **個**
- **容量数**：14 **個**
- **抵抗数**：21 **個**

電源供給

- **正極電源** (VDD) = 1.65 V
- **負極電源** (VSS) = -1.65 V
- **基準電流源用電源** (IPR,IFB,IOP) = 1.65 V
- **グラウンド** (GND) = 0 V

5.5 回路設計

回路設計はシステム設計の要求を満たす回路を、SPICE 記述で表現することが目的である。回路入力には Tanner 社の回路図エディタ「S-Edit」を用いた。

CMOS プロセスでは、基本的に PMOS、NMOS で回路を構成していくため、独自の設計方法がある。今回、ISAS の池田先生の指導を受けることができ、目標の回路を設計することができた。今回試作するプリアンプ LSI の特徴は、ローパスフィルタとして、バイアス回路に 2 層ポリシリコン容量、バイアス回路が生成した基準電圧をうける回路のすべてに MOS ゲート容量を配置したことである。これにより、電源の高周波ノイズを除去することができ、回路をより安定させることができると考えられる。

ここでは、設計した荷電増幅回路とその構成回路、およびバイアス回路について述べる。なお、全体の回路図および SPICE ネットリストは付録 A 参照。荷電増幅回路は、増幅要素と帰還容量、および容量に蓄えれた電荷を放電するための帰還抵抗からなる。今回試作する LSI には、フォールデッドカスコード型増幅要素をもつプリアンプ (タイプ A1) とブースステッドカスコード型増幅要素をもつプリアンプ (タイプ A2) の 2 パターン組み込んでいる。

5.5.1 荷電増幅回路の構成

図 5.7 参照。荷電増幅回路の構成は、タイプ A1、A2 で増幅要素以外は共通である。ここでは、タイプ A1 の荷電増幅回路を示す。回路ブロック「PrC_A1」は、5.5.1 節で説明する増幅要素 (タイプ A1) に対応する。回路ブロック「HiR」は 5.5.3 節で説明する帰還抵抗としての高抵抗回路である。帰還抵抗としては、通常、数 100M Ω ~ 数 G Ω 程度の高抵抗素子を使うことが多い。しかし、LSI 上では、このような高抵抗素子を作ることは構造上困難である。したがって、本回路では高抵抗素子の代わりに、MOS トランジスタの差動対を利用した高抵抗回路を利用している。回路ブロック「inv2」は、スイッチの役割をもっており、ENB 端子に"H" 信号を入力することで、TP 端子からテストパルスを入力することが可能となる。今回試作するプリアンプの帰還容量は外付けで調整するが、外付け容量が無くても動作するように 1pF の帰還容量は内蔵した。

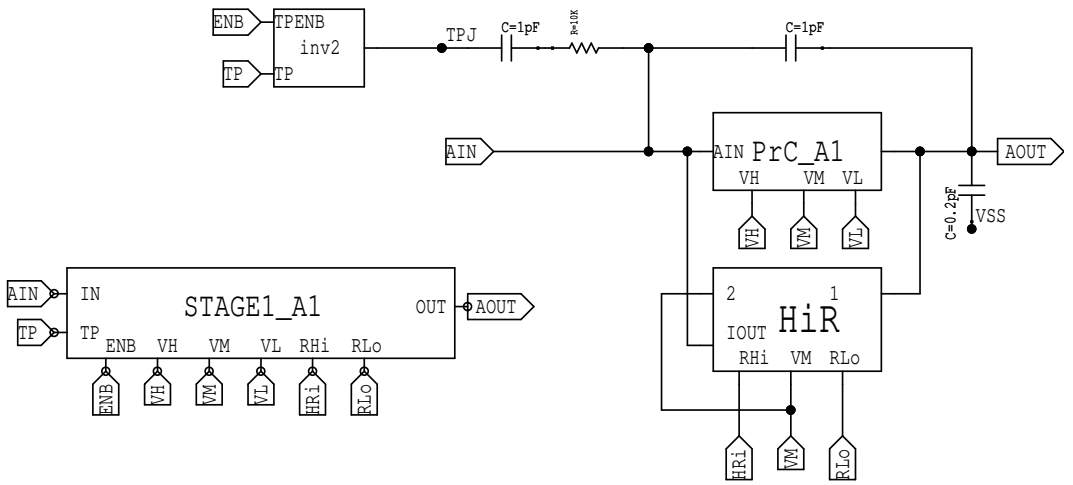


図 5.7: 荷電増幅回路のブロック図 (左) と回路図 (右)

5.5.2　増幅要素の構成 (タイプ A1)

図 5.8 参照。タイプ A1 のプリアンプの増幅要素はフォールデッドカスコード型である。AIN、AOUT 端子はそれぞれ入力端子、出力端子である。VH、VM、VL はそれぞれ M5、M4、M2 のゲート電圧を入力する端子であり、これらの電圧はバイアス回路より供給される。M1 は、入力トランジスタと呼ばれるもので、プリアンプ全体の g_m を決定しており重要な役割をもつ。一般的に pMOS トランジスタの方が雑音 (1/f ノイズ) が小さいことから、入力トランジスタには、pMOS トランジスタを用いている。M2、M5 は、基準バイアス回路から VL、VH の電圧を受け取り、定電流を生成する。M3、M4 は、それぞれ M2、M5 とカスコード構造となっており、出力インピーダンスを高めている。M6 ~ M9 は MOS のゲート容量を利用した容量の代替であり、電源ノイズを除去するローパスフィルタとして利用している。容量の種類として、MOS ゲート容量、2 層ポリシリコン容量、2 層メタル容量があるが、後者 2 つの容量レイアウトは大面積を必要とし、集積効率を低下されてしまうため、ここでは MOS ゲート容量を採用している。

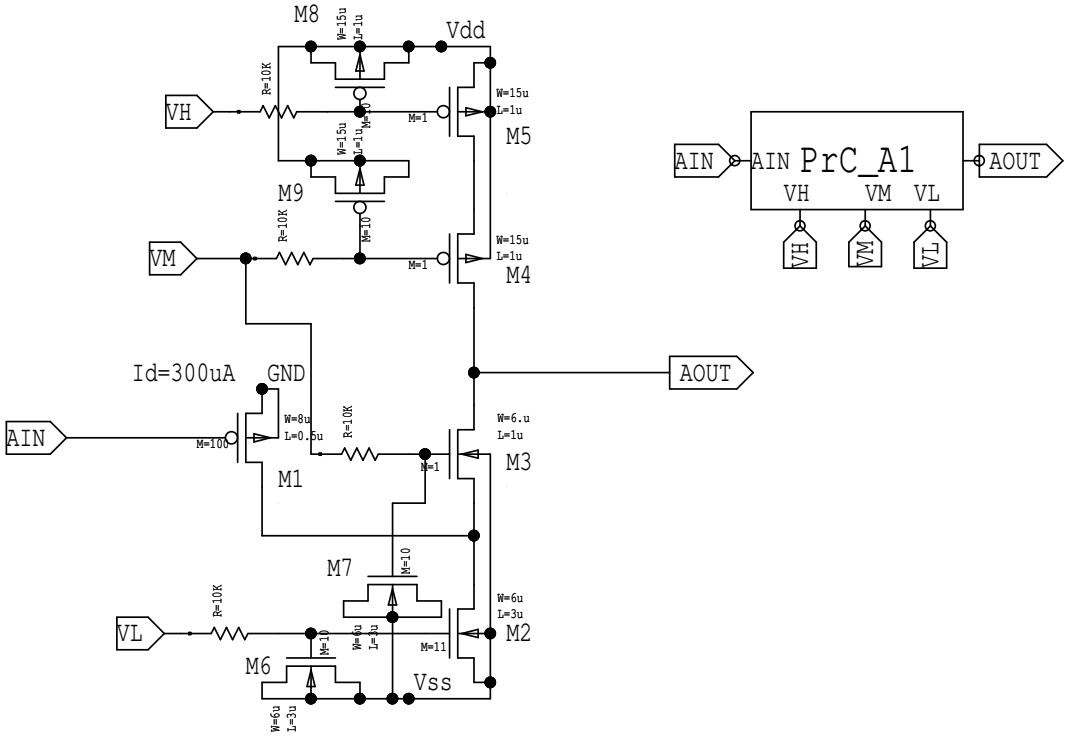


図 5.8: フォールデッドカスコード型増幅要素 (タイプ A1) の回路図 (左) とブロック図 (右)

5.5.3　増幅要素の構成 (タイプ A2)

図 5.9 参照。タイプ A2 のプリアンプの増幅要素はブーステッドカスコード型である。基本構造はフォールデッドカスコード型増幅要素と同等であるが、M7、M10 から構成される補助アンプにより、M3 のドレイン端での電圧変動がソース端の電圧に影響しなくなる。結果、出力電流が変動しにくくなり、より高い出力インピーダンスを得る。

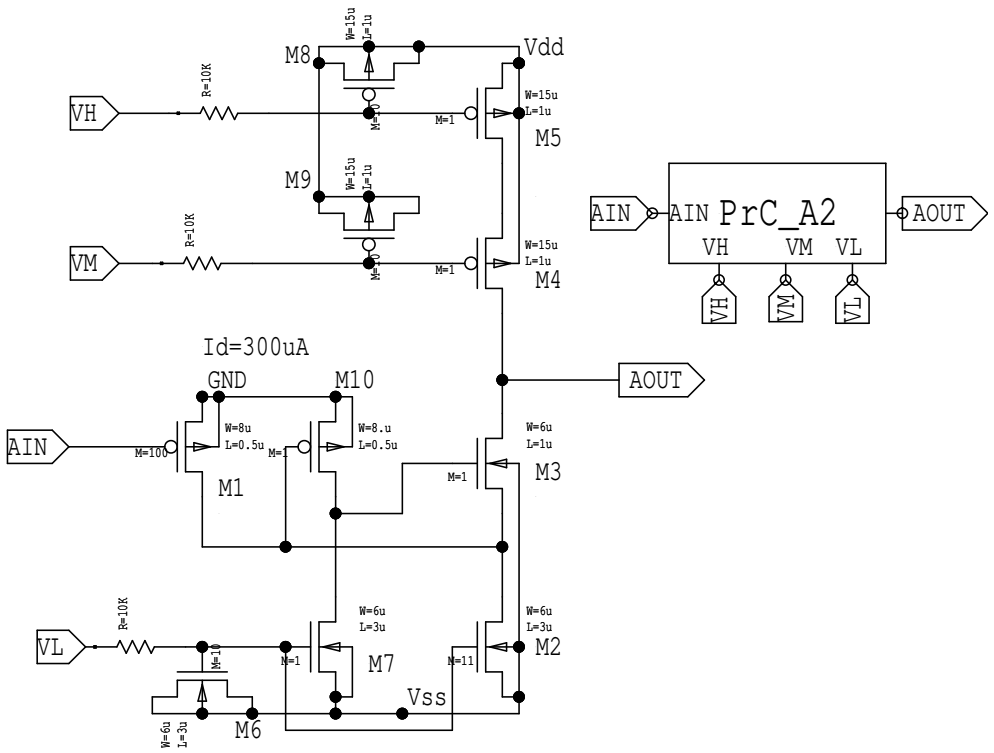


図 5.9: ブーステッドカスコード型増幅要素 (タイプ A2) の回路図 (左) とブロック図 (右)

5.5.4 高抵抗回路の構成

図 5.10 参照。MOS トランジスタの差動対を利用して高抵抗を実現した回路である。M1、M6 は RLo 端子から受け取った電圧によって駆動され、定電流を生成する。同様に M2、M11 は RHi 端子から受け取った電圧によって駆動され、定電流を生成する。VM 端子は M11 のカスコードトランジスタである M5 を駆動するための基準電圧を印加する。VIN1 端子と VIN2 端子に外部から電圧信号が与えられると、その比に応じて M4、M6 にドレイン電流が流れる。M7、M8、M12 はゲート容量を利用したローパスフィルタである。IOUT 端子には、VIN1 端子、VIN2 端子電位差に比例した電流が流れ、抵抗としての機能をもつことになる。RHi、RLo 端子に印加する基準電圧を調整することにより、抵抗値の値を調整することが可能である。基準電圧はバイアス回路により生成される。

5.5.5 バイアス回路の構成

図 5.11 参照。増幅要素、抵抗回路、バッファ回路を動作させるための基準電圧を生成する回路である。M4 は、ゲートとドレインが短絡されており、MOS ダイオード構造になっている。このドレイン・ゲートのノードには、IIN 端子となっており、外部から基準電流を流し込むようになっている。M3 は M4 とともにカレントミラーを構成しており、そのドレイン電流には、M4 とほぼ同じ電流が流れる。同様に M1 と M2 もカレントミラーを構成している。M3 は M2 のカスコードトランジスタでもあって、M2 の電流誤差を低減する働きをする。M5 は、pMOS トランジスタによる MOS ダイオードであり、そのドレイン・ゲートの電圧を VH 端子を介して出力するようになっている。1 pF の容量を挟み込むことによって高周波ノイズに対する感度を下げている。

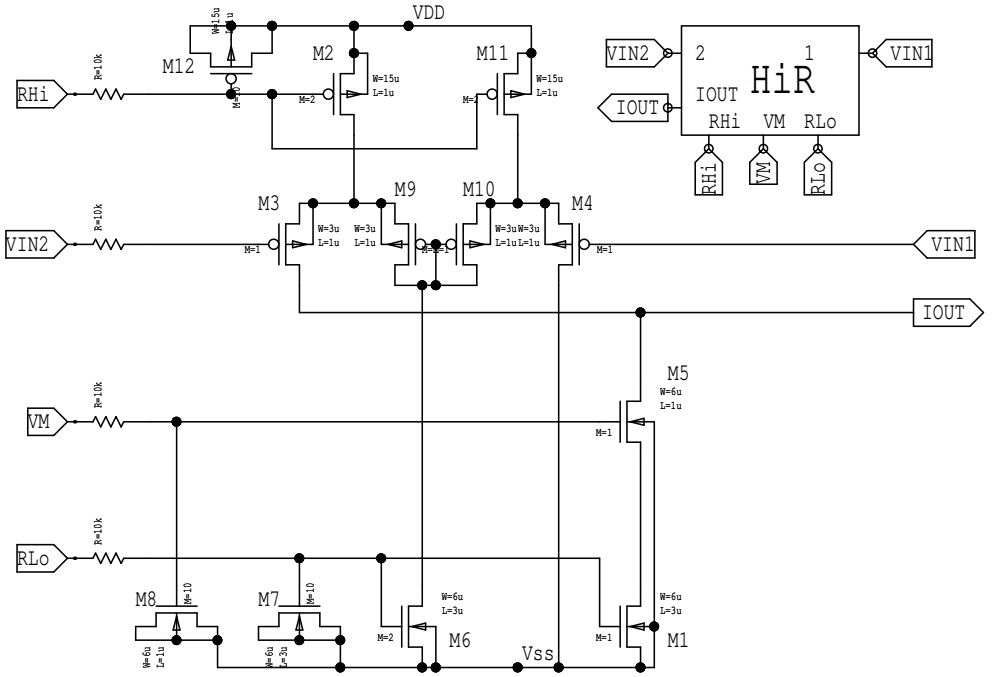


図 5.10: 高抵抗回路の回路図 (左) とブロック図 (右上)

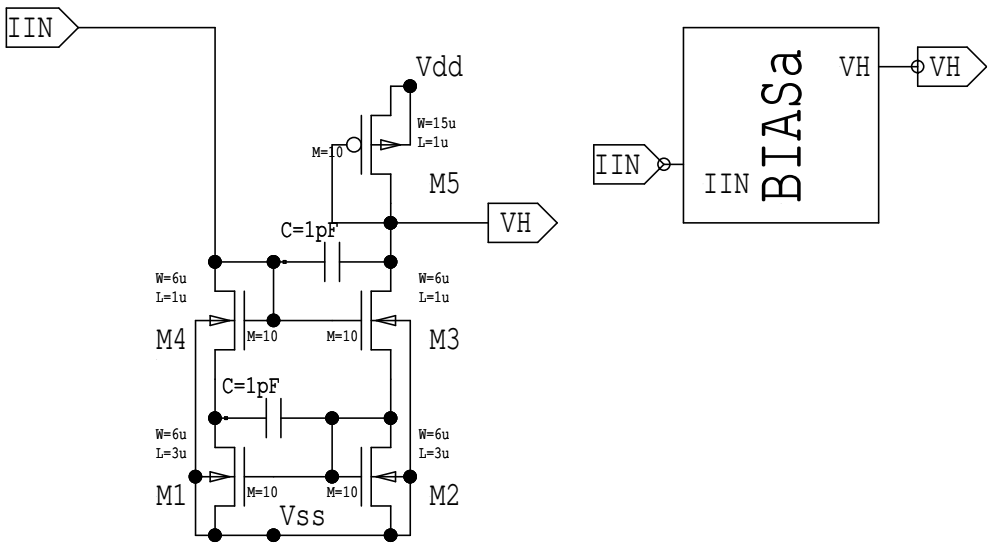


図 5.11: バイアス回路の回路図 (左) とブロック図 (右上)

5.6　回路シミュレーション

LSI は、一度作成されてしまうと回路構成を変更することはほぼ不可能であるため、シミュレーションで要求どおりに動作することを保証することは必須である。シミュレーション項目としては出力波形だけでなく、ノイズ、電源感度等の評価も行なうことも重要である。もし不具合があれば、回路設計にフィードバックし修正を行なう。

今回、SPICE シミュレーションには、Tanner 社の回路シミュレータ「T-SPICE」を用い、SPICE パラメータは、ローム社提供の 0.35 μm チップ用パラメータを用いた。

5.6.1　シミュレーション用回路の構成

シミュレーション用回路の構成を図 5.12 に示す。テストパルスは ENB 端子に 1.65 V の電圧を入力し"H" の状態にして、TP 端子より入力する。テストパルスは 1 pF の容量を介して、電荷信号として荷電増幅回路に注入される。ただし、チップのテストパルス入力は、スイッチとして使用している MOS によって入力波高が制限されるため、リニアリティ測定の際は、チップ外部に作成したテストパルス入力 (TP2 端子) からテストパルスを入力する。

プリアンプ出力には、整形回路 (整形時定数 Tm = 1 μs) を接続している。なお、プリアンプの性能を評価するため、プリアンプ以外の回路は理想素子により構成した。

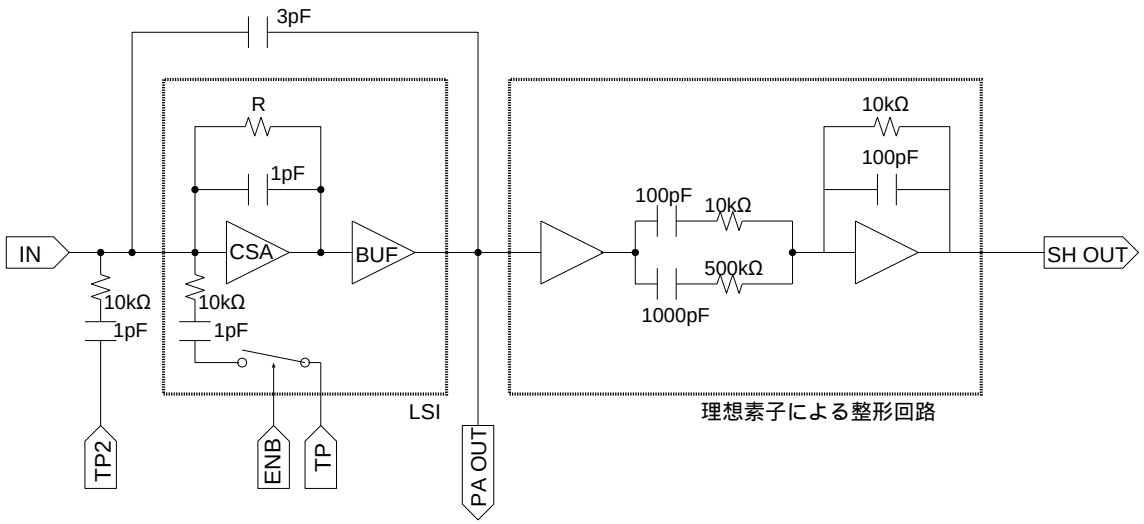


図 5.12: シミュレーション用回路

荷電増幅回路は、入力された電荷信号を電圧信号に変換する役割をもつ。入力電荷を Q_{in}、出力電圧を V_{out} とすると、

$$Q_{in} = -C_f V_{out}$$

が成り立つ。ここで C_f は、帰還容量を表す。本シミュレーションでは、64chPMT(+GSO) に 1 MeV のガンマ線が入射したときのアノードから出力される電荷 (-1.6 pC) が入力されたとき、プリアンプ出力が 0.5 V 程度になるように設定する。この場合、

$$C_f = \frac{Q_{in}}{V_{out}} = \frac{1.6 \times 10^{-12}}{0.5} = 3.2pF$$

となる。1 pF の帰還容量は内蔵しているため、外付けの容量は 2 pF 程度必要であるが、余裕をみて 3 pF の容量を接続した。したがって帰還容量 4 pF となり、そのときのプリアンプ出力は 0.4 V 程度になる。

5.6.2 パルス波形

テストパルスにより電荷を入力したときの、プリアンプ出力波形について評価した。ここでは、検出器容量 (0 pF ~ 100 pF) に対する影響についても評価したが、出力波形に違いはなかった。なお、高抵抗回路の基準電流は、5 μA に設定している。

負入力に対するパルス波形

64chPMT(+GSO) に 1 MeV のガンマ線が入射したときにアノードから出力される電荷-1.6 pC (テストパルス TP = -1.6 V) を入力されたときの、プリアンプの出力波形 (PA OUT) を 図 5.13(タイプ A1)、図 5.14(タイプ A2) に示す。また図中には、参考として整形回路の出力波形 (SH OUT) も示した。図をみると、最大波高値は 400 mV 、減衰時定数は 31 μs となっていることがわかる。時定数は、帰還容量と帰還抵抗の積であるから、高抵抗回路は、7.8 M Ω の抵抗として動作していることがわかる。

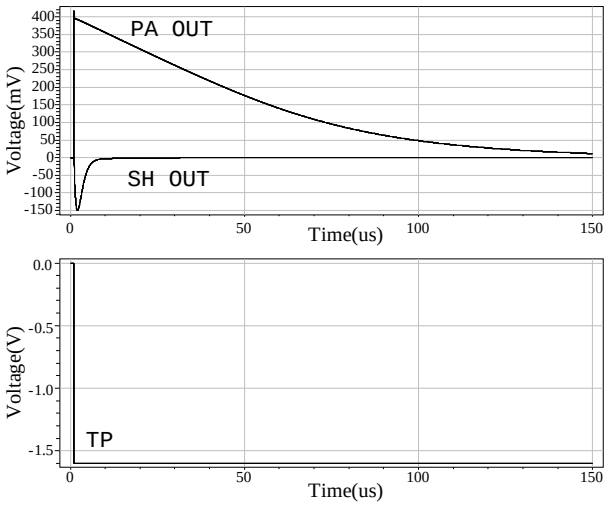


図 5.13: 入力電荷が -1.6 pC のときの出力波形 (タイプ A1)

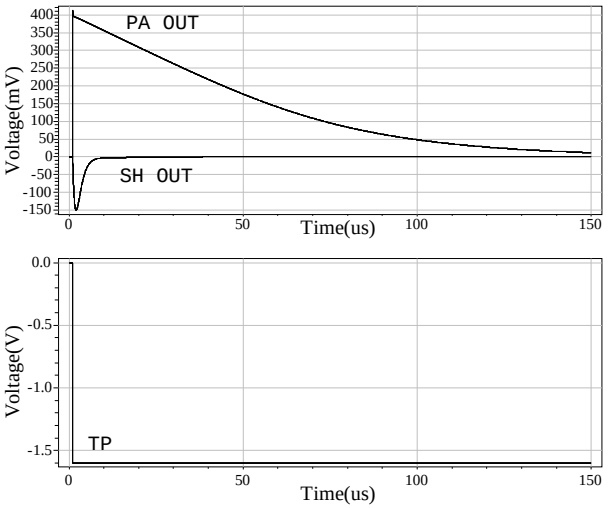


図 5.14: 入力電荷が -1.6 pC のときの出力波形 (タイプ A2)

正入力に対するパルス波形

正電荷 (1.6 pC) を入力したときの場合の出力波形を図 5.15(タイプ A1)、図 5.16(タイプ A2) に示す。図から最大波高値は -400 mV 、減衰時定数は 46 μs となっていることから、高抵抗回路の抵抗値は、12 M Ω 程度になっていることがわかる。

なお、負入力の場合と時定数が異なっているのは、帰還抵抗として使用している高抵抗回路は、正入力、負入力に対して、同じ抵抗値を示すことが保証されていないためである。時定数は高抵抗回路の基準電流を調整し、目的値に合わせ込む必要がある。

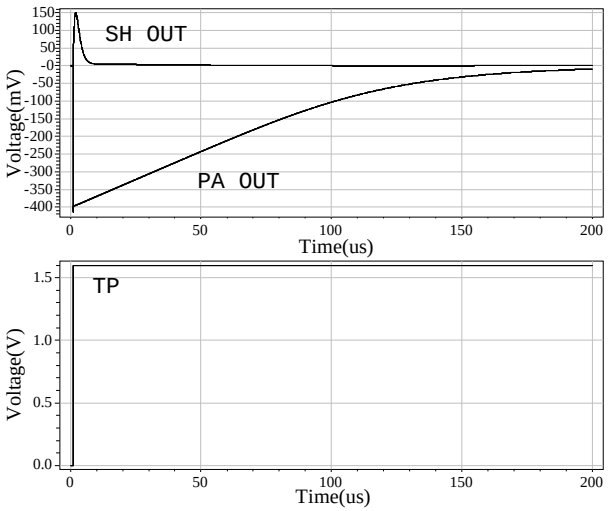


図 5.15: 入力電荷が 1.6 pC のときの出力波形 (タイプ A1)

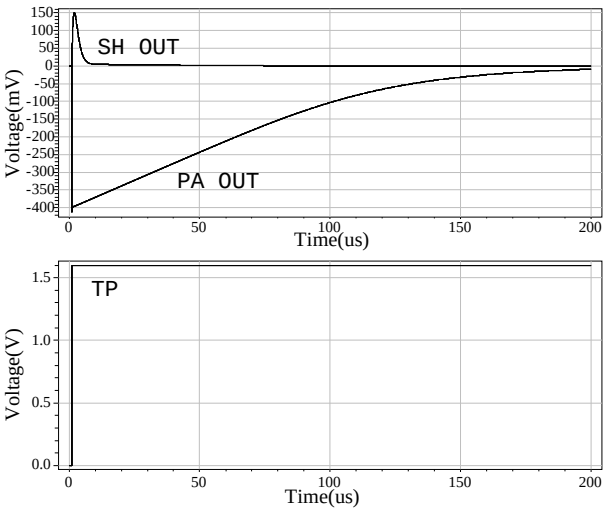


図 5.16: 入力電荷が 1.6 pC のときの出力波形 (タイプ A2)

5.6.3 負電荷を入力したときのプリアンプ出力のリニアリティ

プリアンプ出力のリニアリティを評価するため、テストパルスにより電荷を段階的に注入したときの、出力値の入力値との線形関係からのずれについて調べた。フィッティング直線は 64chPMT(+GSO) に 100 keV ~ 1 MeV のガンマ線が入射したときに、アノードから出力される電荷 (-1.6 pC ~ -0.16 pC) の範囲でフィッティングを行なった近似直線である。結果のグラフは入力電荷 (Charge) とプリアンプ出力 (Output) の関係、および残差 (residual) を示している。なお、テストパルスを 0.01 V (0.01 pC) 刻みで入力しているため、データ点とフィッティング直線は重なってみえる。

タイプ A1 のプリアンプのリニアリティを図 5.17 に示す。 -1.6 pF ~-0.16 pF の電荷入力に対して、0.1 % 以下の精度でリニアリティが確保されていることがわかる。これは、一次関数によるエネルギー較正を行なった場合、100 keV (電子数換算で約 10^6 electron) のピーク値のずれが、0.1 keV (電子数換算で約 1000 electron) 程度になることを意味し、十分な精度でリニアリティが確保できているといえる。0.1 % 以下の精度でリニアリティを確保する場合、入力のダイナミックレンジは 40 倍程度確保でき、0.2 % まで許容すれば、50 倍程度まで確保できることがわかる。

タイプ A2 のプリアンプのリニアリティを図 5.18 に示す。タイプ A1 とほぼ同等であり、十分なリニアリティが確保されていることがわかる。

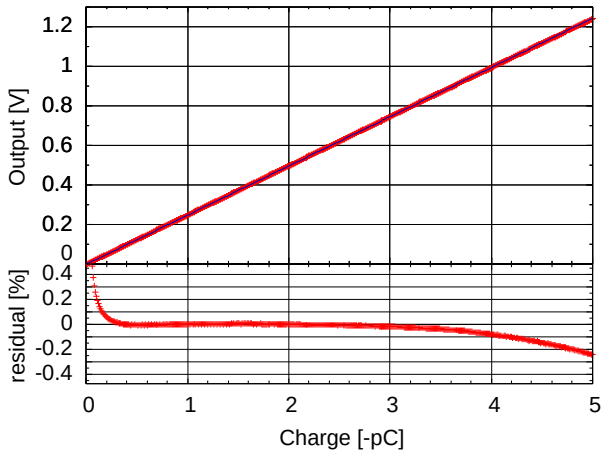


図 5.17: 負電荷が入力されたときのプリアンプ出力のリニアリティ(タイプ A1)

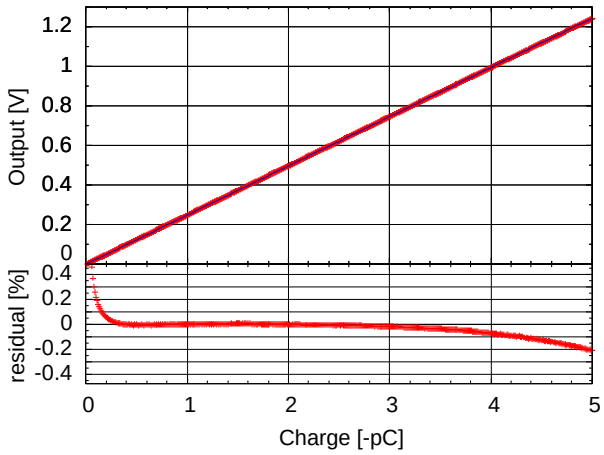


図 5.18: 負電荷が入力されたときのプリアンプ出力のリニアリティ(タイプ A2)

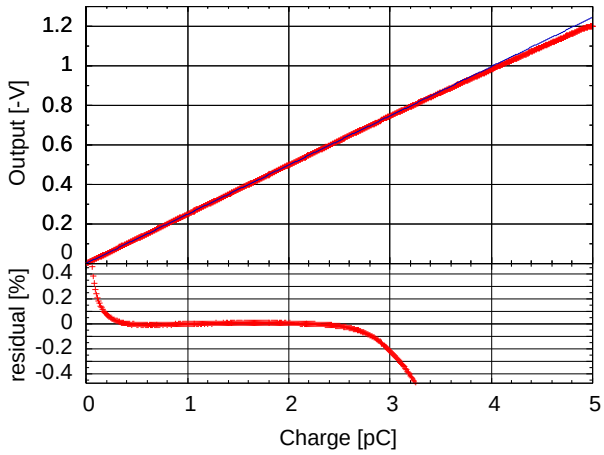


図 5.19: 正電荷が入力されたときのプリアンプ出力のリニアリティ(タイプ A1)

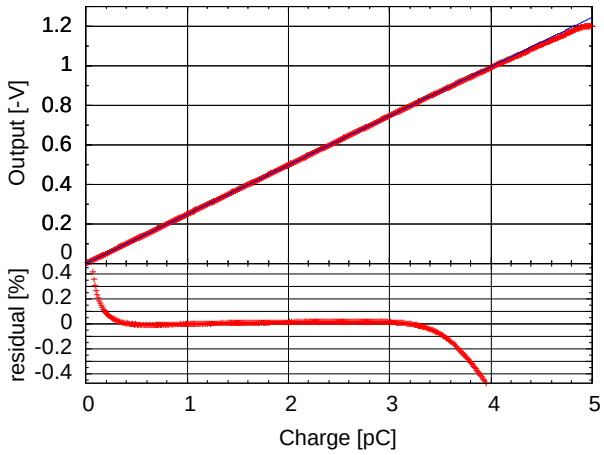


図 5.20: 正電荷が入力されたときのプリアンプ出力のリニアリティ(タイプ A2)

5.6.4 正電荷を入力したときのプリアンプ出力のリニアリティ

正電荷入力のリニアリティについても同様に評価した (図 5.19、図 5.20)。フィッティング範囲は、0.16 pC ~ 1.6 pC とした。この範囲の電荷入力に対しては、タイプ A1、A2 ともに 0.2 % 程度の精度でリニアリティが確保されており、問題ないレベルである。0.2 % の精度を求める場合、入力のダイナミックレンジがタイプ A1 で約 20 倍、タイプ A2 で約 25 倍程度になっており、ブーステッドカスコード型プリアンプの方が広くとれることがわかった。しかし、いずれにおいても、負入力のダイナミックレンジと比べると大幅に狭まっていることもわかった。

5.6.5　ノイズ評価

プリアンプ出力に整形回路 (整形時定数 Tm = 1.0 μs) を接続し、検出器容量を変化させながらノイズレベルを評価した。ただし、1/f ノイズは無視している。ここで整形回路を通すのは、プリアンプ単体では、信号帯域には当てはまらない低周波側、高周波側のノイズの影響により、積分ノイズが発散してしまうためである。整形回路の微分回路により低周波ノイズが除去され、積分回路により高周波ノイズを除去される。

シミュレーション結果 (図 5.21、図 5.22) のグラフの縦軸 (Noise Spectral density：NSD[V]) は、雑音スペクトルの周波数領域での積分値を示したものである。したがって、高周波端での値が出力における雑音値を示していることになる。なお、この値は実測における RMS(Root Mean Square) ノイズ [V] に相当する。ノイズは電子数で考えると理解しやすいため、ENC(Equivalent Noise Charge) に変換する。ENC は入力電子数 [electron] と整形回路出力の波高値 [V] との比から求めることができる。このシミュレーションによって得られた容量勾配を図 5.23、図 5.24 に示す。

タイプ A1 のプリアンプの容量勾配 (図 5.23) をみると、64chPMT のアノードの検出器容量 (約 2.5 pF) におけるノイズは 1000 electron (RMS) 程度になっている。これは、64chPMT(+GSO) に 100 keV のガンマ線が入射したときに生成される電子数 (10^6 electron) に比べて十分小さく問題ないことがわかる。

タイプ A2 のプリアンプの容量勾配 (図 5.24) をみると、ノイズレベルがタイプ A1 にくらべ、全体的に低くなっていることがわかる。これは、ブーステッドカスコード型プリアンプの方が低ノイズであることを意味している。

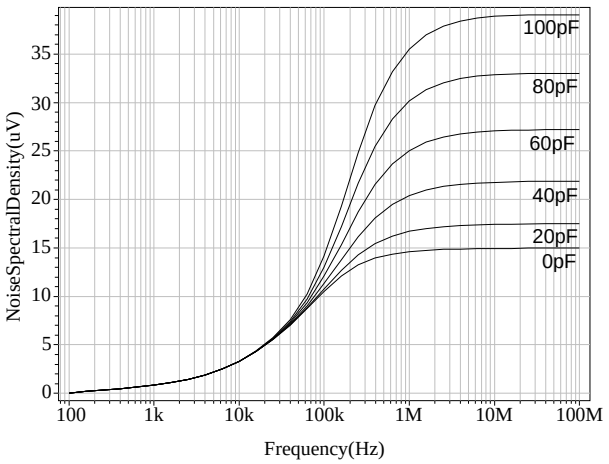


図 5.21: タイプ A1 のノイズ評価

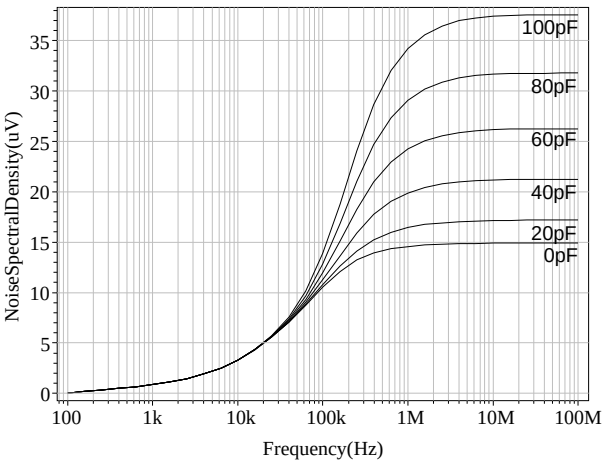


図 5.22: タイプ A2 のノイズ評価

5.6.6　正極電源 (VDD) に対するノイズ感度

プリアンプ出力の電源ノイズに対する依存性について、検出器容量 (0 pF ~100 pF) を変化させながら評価した (図 5.25、図 5.26)。なお、検出器容量が 0 pF に高周波域で発散したような形になるのは、検出器容量は高周波ノイズを下げるフィルターとしての効果をもっているためである。

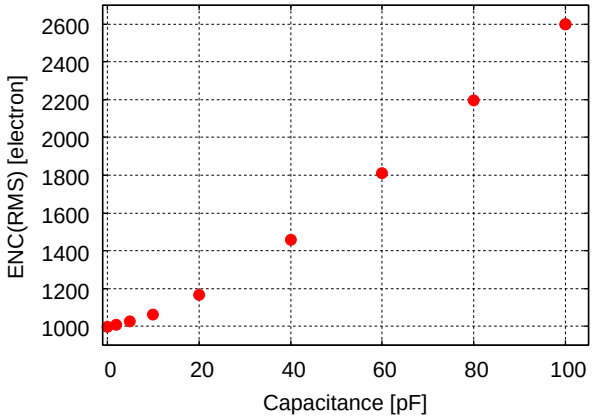


図 5.23: タイプ A1 の容量勾配

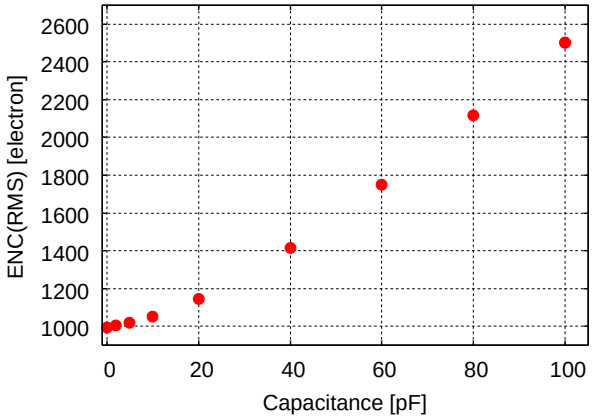


図 5.24: タイプ A2 の容量勾配

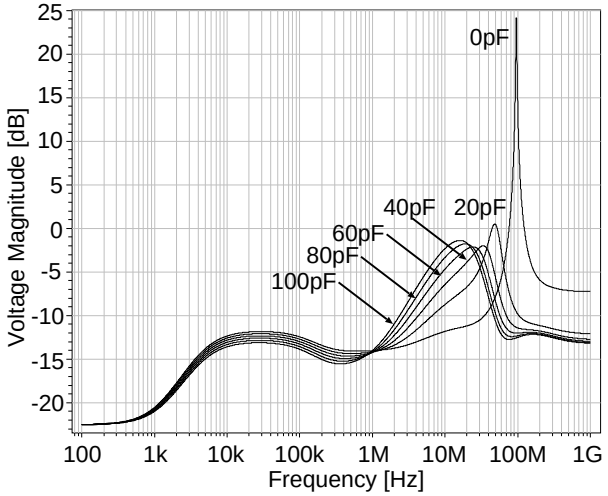


図 5.25: タイプ A1 の正極電源 (VDD) に対するノイズ感度

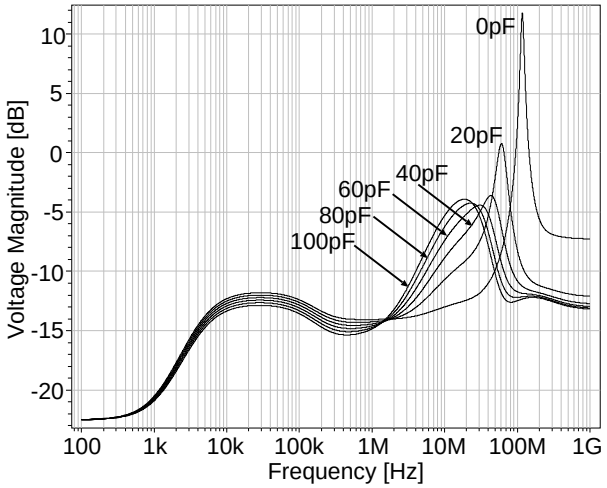


図 5.26: タイプ A2 の正極電源 (VDD) に対するノイズ感度

タイプ A1 のプリアンプにおいて、検出器容量が 0 pF である場合、100 MHz 付近で最大となり、25 dB (17 倍) 程度になっている。使用する電源 (PW18-1.8Q) のふれは 100 MHz で 100 μV 程度であるから、プリアンプ出力における電圧のふれは、1.7 mV 程度 (電子数換算で約 4.3×10^4 electron) になる。

タイプ A2 のプリアンプにおいて、検出器容量が 0 pF である場合、100 MHz 付近で最大となり、13 dB (4.5 倍) 程度になっている。タイプ A1 より正極電源 (VDD) に対するノイズ感度は低く抑えられており、ブーステッドカスコード型プリアンプは電源の変動を抑制する効果もあることがわかった。

これら高周波域のノイズの影響は、プリアンプ後段の整形回路 (積分回路) を通すことで除去できる。

5.6.7 負極電源 (VSS) に対するノイズ感度

負極電源に対するノイズ感度についても同様に評価した (図 5.27、図 5.28)。タイプ A1 のプリアンプにおいて、検出器容量が 0 pF である場合、100 MHz 付近で最大となり、25

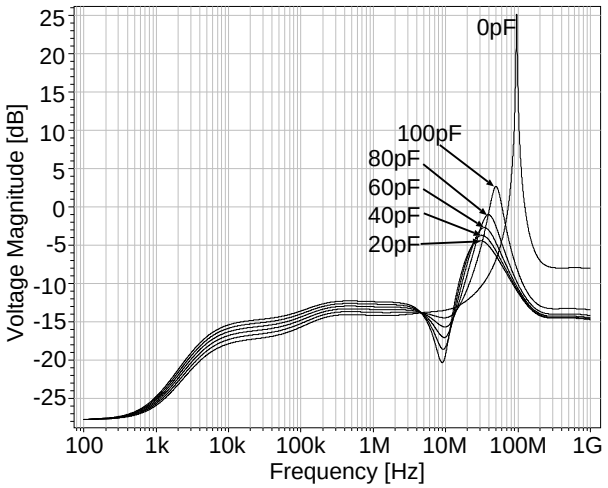


図 5.27: タイプ A1 の負極電源 (VSS) に対するノイズ感度

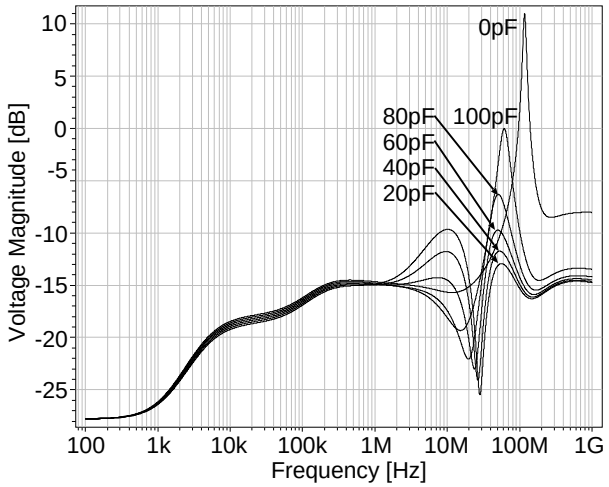


図 5.28: タイプ A2 の負極電源 (VSS) に対するノイズ感度

dB (17 倍) 程度になっている。使用する電源 (PW18-1.8Q) のふれは 100 MHz で 100 μV 程度であるから、プリアンプ出力における電圧のふれは、 1.7 mV 程度 (電子数換算で約 4.3×10^4 electron) になる。

タイプ A2 のプリアンプにおいて、検出器容量が 0 pF である場合、100 MHz 付近で最大となり、11 dB (3.5 倍) 程度になっている。タイプ A1 より負極電源 (VSS) に対するノイズ感度は低く抑えられていることがわかり、正極電源 (VDD) と同様、ブーステッドカスコード構造の効果がみられる。

正極電源と同様にこれら高周波ノイズの影響は、整形回路を通すことで除去できる。

5.6.8 スキュー解析

スキュー解析は、nMOS、pMOS の製造精度を SPICE パラメータとして反映させ、製造プロセスの誤差の影響を評価するシミュレーションである。回路が不安定である場合、MOS 精度のバラツキにより発振等の影響が出てくる可能性がある。実際、初期設計では、荷電増幅回路と 2 段構成のバッファ回路を用いてプリアンプを構成したため、全体で 3 段増幅となり、負帰還をかけると不安定になり発振することがあった。そこでバッファ回路を 1 段の演算回路としたところ、安定化することができた。

nMOS、pMOS の精度パラメータの組み合わせを変えたときのプリアンプ出力を図 5.29、図 5.30、各パラメータを表 5.2 に示す。NF,NT,NS の N は nMOS、PF,PT,PS の P は pMOS を示し、F,T,S はそれぞれ Fast(高精度), Typical(標準),Slow(低精度) を意味している。

出力波形 (図 5.29、図 5.30) をみると、時定数、DC 値にバラツキがあることがわかる。時定数については高抵抗回路の基準電流値を変えることで調整できるが、オフセットは調整できない。よって、後段回路 (K02-32SA) とは AC 結合する必要があると考えられる。

各パラメータ (表 5.2) をみると、ドレイン電流 I_d、トランスコンダクタンス g_m の変動は小さく、MOS 精度のプリアンプの性能に対する影響は少ないと考えられる。

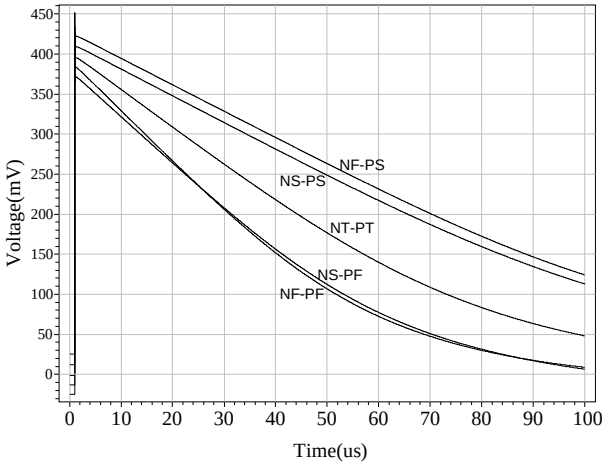


図 5.29: MOS 精度の出力波形への影響 (タイプ A1)

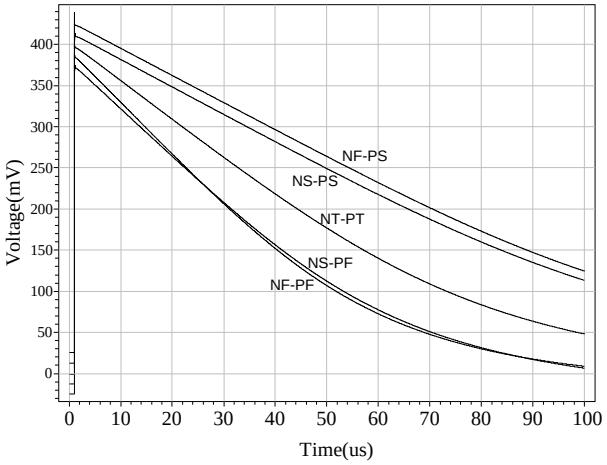


図 5.30: MOS 精度の出力波形への影響 (タイプ A2)

	$I_d[\mu\mathrm{A}]$(タイプ A1)	g_m[mS](タイプ A1)	$I_d[\mu\mathrm{A}]$(タイプ A2)	g_m[mS](タイプ A2)
NS-PS	-299.9	5.08	-295.7	5.04
NS-PF	-297.1	5.76	-296.2	5.75
NT-PT	-300.3	5.41	-299.1	5.41
NF-PS	-303.4	5.10	-300.2	5.10
NF-PF	-300.7	5.78	-299.9	5.79

表 5.2: MOS 精度の各パラメータへの影響

5.6.9 消費電力

以上のシミュレーションは、最適な動作をするように基準電流源 (IPR,IFB,IOP) の電流値を調整しながら行なった。最終的な設定値は、IPR = 300 μA, IFB = 5 μA,IOP = 200 μA となった。正極電源 (VDD)、負極電源 (VSS) の電流値は、シミュレーション結果から、VDD は 1.32 mA、VSS は-1.95 mA となった。以上の結果および消費電力を表 5.3 にまとめた。

一つのプリアンプ (増幅要素、高抵抗回路、バッファ回路) の消費電力は、0.83 mW 程度になり、プリアンプ LSI 全体の消費電力は、 6.2 mW 程度になることがわかった。

電源	電圧 [V]	電流 [mA]	消費電力 [mW]
正極電源 (VDD)	1.65 V	1.32	2.18
負極電源 (VSS)	-1.65 V	-1.95	3.22
増幅要素用電流源 (IPR)	1.65 V	0.3	0.495
高抵抗回路用電流源 (IFB)	1.65 V	0.005	0.0083
バッファ回路用電流源 (IOP)	1.65 V	0.2	0.33

表 5.3: シミュレーションにおける消費電力

5.7　レイアウト設計

回路シミュレーションにより、要求を満たす回路を構成することができたため、得られた SPICE 記述をもとにレイアウト設計を行なう。今回は、VDEC 経由でローム 0.35 μm プロセスによる設計を行なう。VDEC では、チップ試作のための以下のようなツール群を提供しており、チップ試作申請を行なうことにより使用することができる。

- レイアウトエディタ … virtuoso (cadence 社)
- DRC … Calibre DRC (Mentor 社)
- LVS … Calibre LVS (Mentor 社)

今回、新規に VDEC からライセンスを取得し、これらのソフトウェアを研究室のコンピュータ (Sun Blade 150) にインストールして使用した。なお、これらのソフトウェアの使用法は、広島大学先端物質科学研究科岩田研の升井さんにお世話になった。

5.7.1　レイヤの定義

現在の LSI はガラスマスク上に描かれたパターンをシリコンウエハ上に転写し加工することを繰り返すことにより作成される。レイアウトはこのマスク上パターンを作成するための図形データの集合である。そのためレイアウトはマスク毎に区別されており、それらをレイヤと呼んでいる。ただし、すべてのレイヤがマスクと 1 対 1 の関係になっているわけではなく、一部のマスクはレイヤ間の図形処理によって作成される。図 5.31 にレイアウト例と断面を、CMOS プロセスで主に使用するレイヤを表 5.4 に示す。

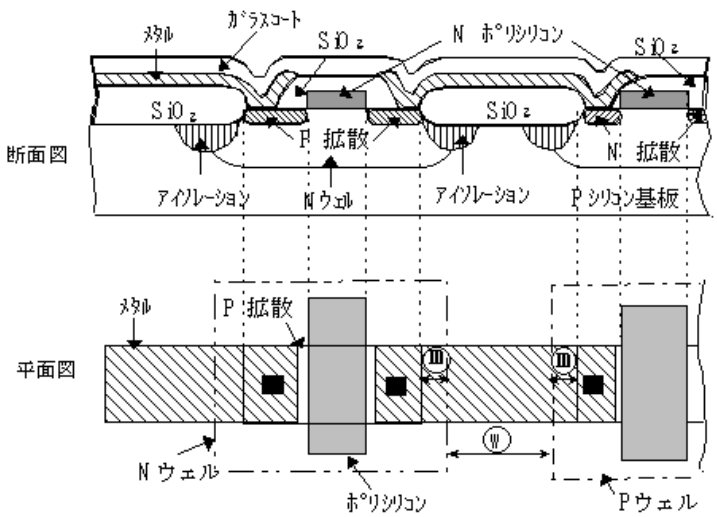


図 5.31: レイアウト例とその断面

5.7.2　デザインルール

LSI のレイアウト設計は、LSI 製造メーカーが提供するデザインルールを満たすことが最重要である。実際にシリコンウエハ上にできるパターンは CAD 上で描いたような多角

NWELL	N ウェル。P 型基板を使っていて P 型デバイス (P チャンネルの MOS など) を作る時に N 型基板が必要になるが、N ウェルを作ることで P 型基板の一部を N 型基板のように扱うことができる。
NDIFF	N 拡散。N+領域を形成する。
PDIFF	P 拡散。P+領域を形成する。
ACTIVE	NDIFF と PDIFF 領域を OR 演算したものを ACTIVE 領域という ACTIVE 領域には薄い酸化膜が形成され、AVTIVE 領域以外は厚いフィールド酸化膜 (LOCOS) が形成される
POLY	ポリシリコン。シリコンが多結晶状態になったもので、 イオン注入によってその電気抵抗が下がるので配線、 MOS のゲート電極に使われる。また Active が POLY をまたいでいるところは POLY の下に不純物イオンが打ち込まれないので、MOS のソースとドレインを分離 することができる。
CONT	コンタクト。絶縁膜 (酸化膜) に穴をあけ、 金属配線と拡散領域 (P++または N++)、金属配線と poly 配線を電気的に接続する。
1METAL	金属配線。MOS トランジスタができて、その上に絶縁膜を付けて コンタクトホールを開け終わって、最後に金属 (主に Al) で配線する。 電源 (VDD と VSS) は金属配線にするべきである。

表 5.4: 主なレイヤ

形の集合ではなく、角がとれて丸くなっていたり、位置が若干ずれていたりする。そのことを考慮して余裕をもってレイアウトする必要がある。デザインルールの一般的な例を図 5.32、表 5.5 に示す。

今回使用したデザインルールは、VDEC 提供のローム 0.35 μm プロセス用のものである。

5.7.3 レイアウト

実際のレイアウトは、ローム 0.35 μm プロセスで製作された K01 を参考に行った。今回、2 つのプリアンプ回路を組み込む仕様であるが、各々が影響し合わないように距離をおいてレイアウトを行った。レイアウト法の詳細は省くが、図 5.33 のように SPICE 記述にある素子を一つずつ描き、それらを配線していく作業である。

5.7.4 レイアウトの検証 (DRC,LVS)

VDEC 提供のローム 0.35 μm デザインルールを用いて、Calibre DRC によるデザインルールチェックを行なった結果、容量に関するエラーが大量に出力された。これは精度保証するため、容量のレイアウトサイズが厳しく制限されていたためであった。その条件を満たすレイアウトはサイズが大きく、K02-32SA のような多チャンネルの信号処理系をもつ LSI には適合しない。調査した結果、物理的制限を満たしておけば、問題がないことが判明したため、この容量関係のエラーは無視した。

次に VDEC から LVS 用ルールファイルを入手し、Calibre LVS を用いてレイアウトからネットリストを抽出し、回路設計で得た SPICE ネットリストと比較検証を行なった。しかし、VDEC 提供のルールファイルは、デジタル回路用に最適化されていたため、容量、抵抗が認識されず、今回試作するプリアンプ LSI には不適であることがわかった。そ

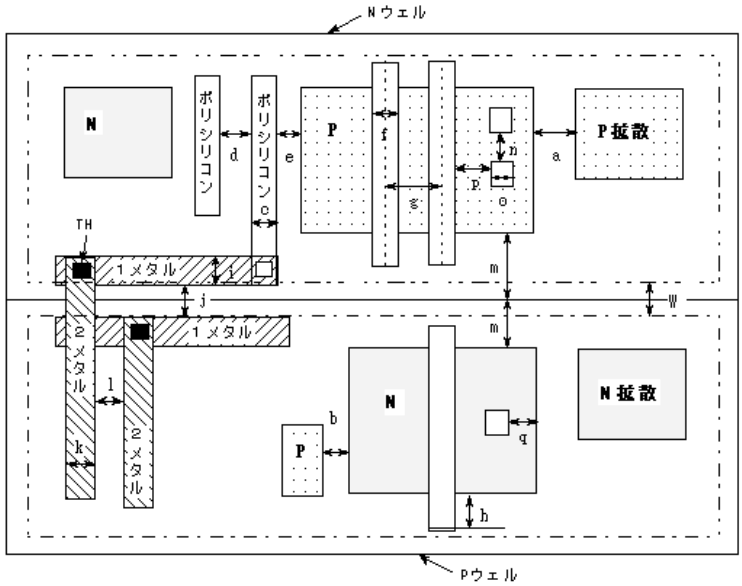


図 5.32: デザインルールの例

Group	Name	μm	
拡散	最小幅	0.5	
	同一ウエル内拡散間隔	0.5	a
	同一ウェル内 P 拡散-N 拡散間隔	0.5	b
ポリシリコン	最小幅	0.5	c
	最小間隔	0.5	d
	拡散-ポリシリコン間隔	0.25	e
	ゲート長	0.5	f
	ゲートピッチ	1	g
	ゲート突き出し	0.5	h
1 メタル	最小幅	0.5	i
	最小間隔	0.5	j
ウエル	最小幅	1.25	
	ウェル-拡散マージン	0.75	m
	N ウェル– P ウェル間隔	0	
コンタクト	スペース (エッジ)	0.5	n
	幅	0.5	o
	ポリシリコン– コンタクト含有	0.5	p
	拡散-コンタクト含有	0.25	q

表 5.5: デザインルールの例

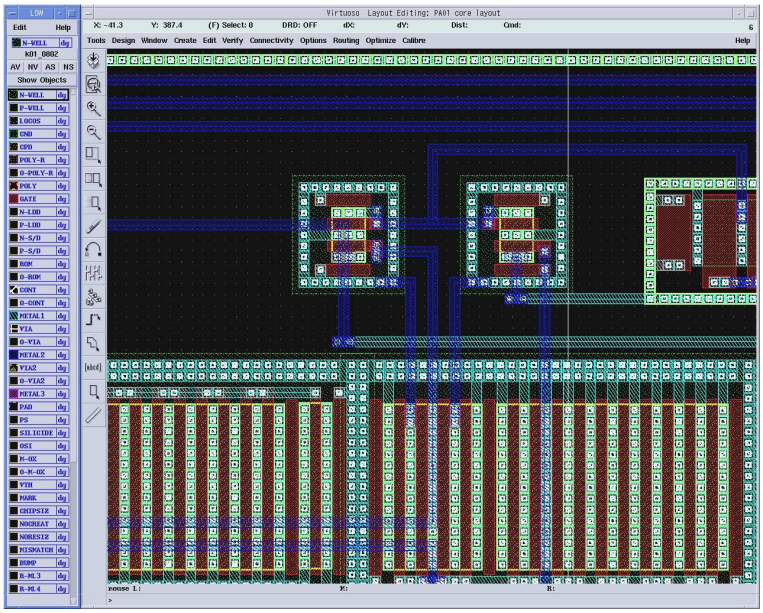


図 5.33: レイアウトエディタ画面

こで、K01 用に別途調製されたアナログ回路用ルールファイルにより検証を行なった。その結果、容量、抵抗が正常に認識され、LVS を通すことができた。

DRC、LVS を通した最終的なレイアウトを図 5.34 に示す。このレイアウトをマスクデータ (GDS-II) に変換し、VDEC 経由で LSI 製造メーカー (ローム) に提出した。

5.7.5 注意事項

本チップ試作は東京大学大規模集積システム設計教育研究センターを通し ローム (株) および凸版印刷 (株) の協力で行われたものである。

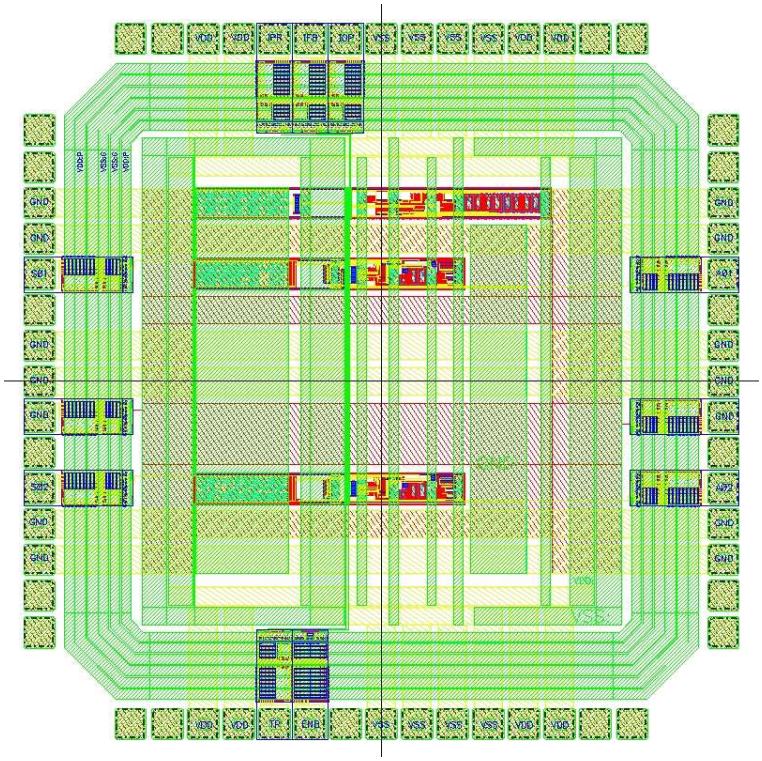


図 5.34: 完成したレイアウト

第6章　プリアンプLSIの評価

6.1　セットアップ

試作したチップの評価回路のセットアップを図 6.1、チップ端子の説明を表 6.1 に示す。チップのソケットおよびボードはリアライズ AT 社のローム QFP80 ピン (2.3 mm 角チップ) 用ソケットおよびローム QFP ピン (2.3 mm 角チップ) 用変換ボードを使用した。これらは、VDEC 経由で発注することができる。

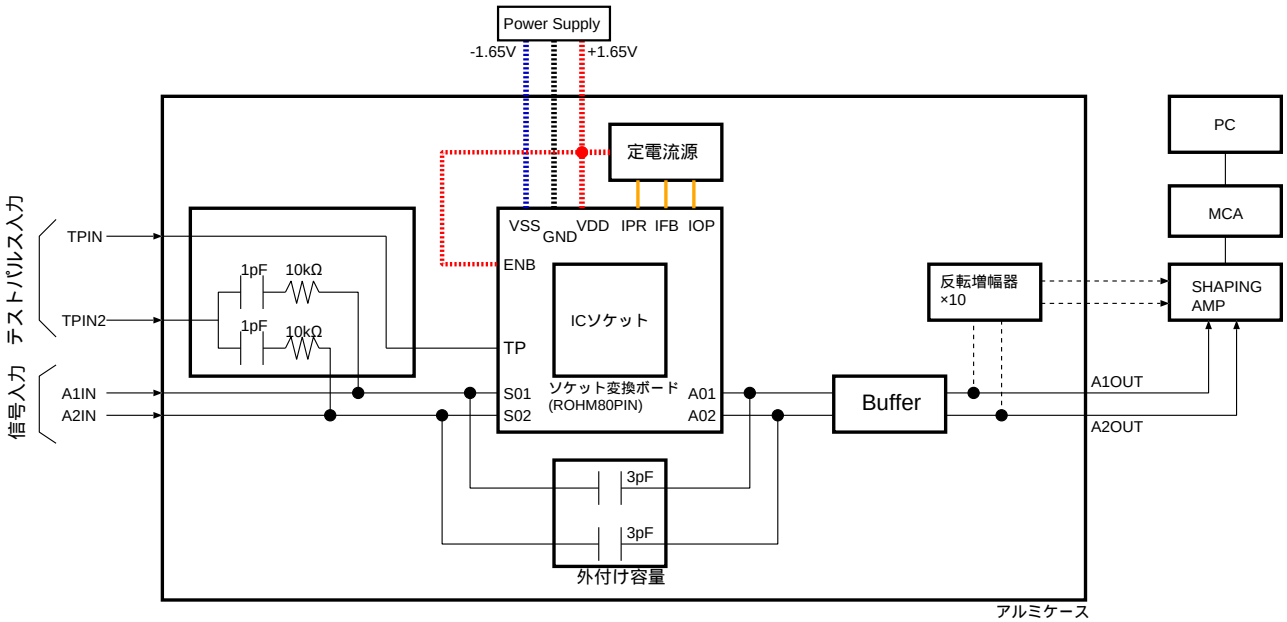


図 6.1: プリアンプ LSI の評価用セットアップ

増幅要素、高抵抗回路、バッファ回路用基準電流は、それぞれ IPR、IFB、IOP 端子より入力する。定電流は可変抵抗を用いた電流源を構成し、抵抗値を変えることで、電流値を調整できるようにした。基準電流値、外付け容量の大きさの初期値は、シミュレーションで設定した値 (IPR = 300 μA, IFB = 5 μA, IOP = 200 μA , 外付け容量 = 3 pF) である。

プリアンプ LSI の出力は、バッファ回路、整形増幅回路 (整形時定数 Tm=1μs、ORTEC Model 571)、MCA(AMPTEK MCA8000A) を通して PC でデータ集録した。プリアンプ出力の信号が小さい場合は、増幅回路 (反転増幅回路) を通して整形増幅回路に入力した。

テストパルスは、容量を介して電荷信号に変換されプリアンプに注入される。チップのテストパルス入力に関しては、チップ内の容量の精度は未知で正確な電荷注入が出来ない可能性があり、またスイッチとして使用している MOS によって入力の電圧値が制限されてしまうため、ディスクリートな素子で構成したテストパルス入力も別に製作し、信号入力端子から入力できるようにした。ただし、ノイズ評価を行なう場合は、できるだけケーブル容量等の影響を減らす必要があるため、チップのテストパルス入力を使用した。

端子名	説明
S01	増幅要素がフォールデッドカスコードであるプリアンプの入力端子
S02	増幅要素がブーステッドカスコードであるプリアンプの入力端子
A01	増幅要素がフォールデッドカスコードであるプリアンプの出力端子
A02	増幅要素がブーステッドカスコードであるプリアンプの出力端子
ENB	テストパルス入力のイネーブル信号を入力する端子。+1.65V の電圧をかけることでテストパルス入力が可能となる。
TP	テストパルス入力。1pF の容量を介して電荷信号としてチップ内の荷電増幅回路に注入される。
IPR	荷電増幅回路用リファレンス電流入力端子。荷電増幅回路用バイアス回路の出力電圧値を調整する
IFB	高抵抗回路用リファレンス電流入力端子。高抵抗回路用バイアス回路の出力電圧値を調整する
IOP	バッファ回路用リファレンス電流入力端子。バッファ回路用バイアス回路の出力電圧値を調整する
VDD	チップ用電源 (+1.65 V)
VSS	チップ用電源 (-1.65 V)
GND	チップグラウンド

表 6.1: ピンの役割

6.2 評価および結果

6.2.1 消費電力

消費電力を求めるため、正極電源 (VDD)、負極電源 (VSS) における電流値をテスターにより測定した。なお、基準電流値はシミュレーションで使用した値になるように設定している。以上の結果および消費電力を表 6.2 にまとめた。プリアンプ LSI 全体の消費電力は 6.3 mW となり、シミュレーション結果 (6.2 mW) とほぼ等しくなることがわかった。

電圧源 (電流源)	電圧 [V]	電流 [mA]	消費電力 [mW]
正極電源 (VDD)	1.65 V	1.25	2.06
負極電源 (VSS)	-1.65 V	-2.04	3.37
増幅要素用電流源 (IPR)	1.65 V	0.3	0.5
高抵抗回路用電流源 (IFB)	1.65 V	0.005	0.008
バッファ回路用電流源 (IOP)	1.65 V	0.2	0.33

表 6.2: 実回路における消費電力

6.2.2 出力波形

QFP パッケージ化されている 3 チップ (No1,No2,No3) の出力波形をオシロスコープで取得した (図 6.2 ~ 図 6.7)。テストパルスは 64chPMT(+GSO) に 1 MeV のガンマ線が入射したとき、アノードから出力される電子数 (約 10^7 electron) 想定し、-1.6 V の矩形波を

入力した。また、正入力 (1.6 V) の場合の出力波形も同様に取得した。増幅要素、高抵抗回路、バッファ回路の基準電流値は、シミュレーション値で固定して測定した。なお、正入力、負入力で時定数が異なっているのは、帰還抵抗として使用している高抵抗回路は、正入力と負入力に対する動作が同じ (抵抗値が同じ) になることが保証されていないことに起因する。

負入力の場合、波高値は 400 mV 程度、時定数は 30 μs 程度であるから、3 チップともほぼシミュレーション結果 (波高値 400 mV 、時定数 31 μs) と一致していることがわかった。

正入力の場合、波高値は -400 mV 程度になっておりシミュレーション値 (波高値-400 mV) 通りであるが、指数関数的減衰していないことに加え、3 チップで増幅要素の違いによらず時定数に 45 μs ~ 80 μs の間でバラツキが存在した。この原因として、サンプル数が少ないため断言はできないが、高抵抗回路の MOS 精度のバラツキによって、正入力に対する高抵抗回路の帰還電流に非線型性が生じている可能性が考えられる。

次にオフセットレベルを測定したが、-100mV から -200mV のオフセットが存在していることがわかった。オフセットは抵抗回路のトランジスタのランダムなバラツキによって発生していると考えられ、今回試作したチップでは調整することができない。

以後の評価は、もっともシミュレーションの波形に近い No3 のチップについて行なった。

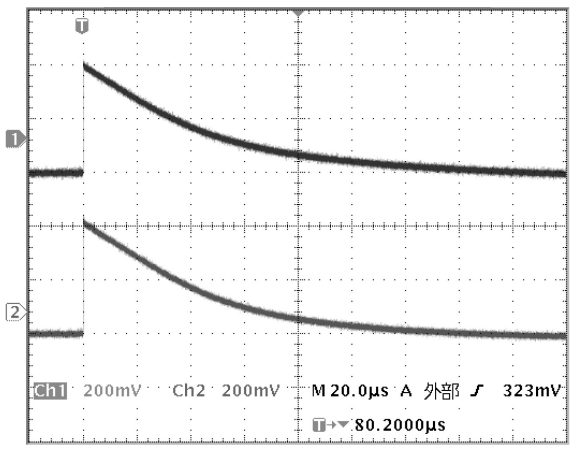


図 6.2: テストパルス (-1.6 V) を入力したときのチップ (No.1) の出力波形 (上：タイプ A1、下：タイプ A2)

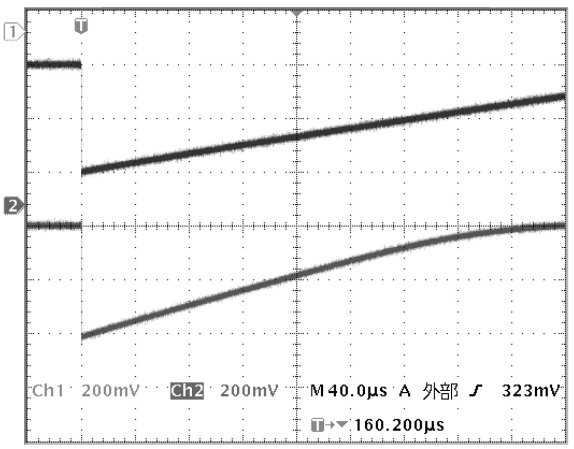


図 6.3: テストパルス (1.6 V) を入力したときのチップ (No.1) の出力波形 (上：タイプ A1、下：タイプ A2)

6.2.3 負電荷を入力したときのリニアリティ

プリアンプ出力のリニアリティを評価するため、電荷を段階的に注入したときの出力値の入力との線形関係からのずれについて調べた。フィッティング直線は 64chPMT(+GSO) に 100 keV ~ 1 MeV のガンマ線が入射したときに、アノードから出力される電荷 (-1.6 ~ -0.16 pC) の範囲でフィッティングを行なったときの近似直線である。結果のグラフは

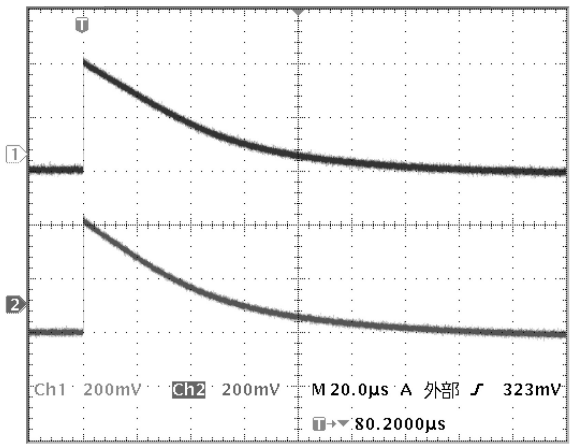


図 6.4: テストパルス (-1.6 V) を入力したときのチップ (No.2) の出力波形 (上：タイプ A1、下：タイプ A2)

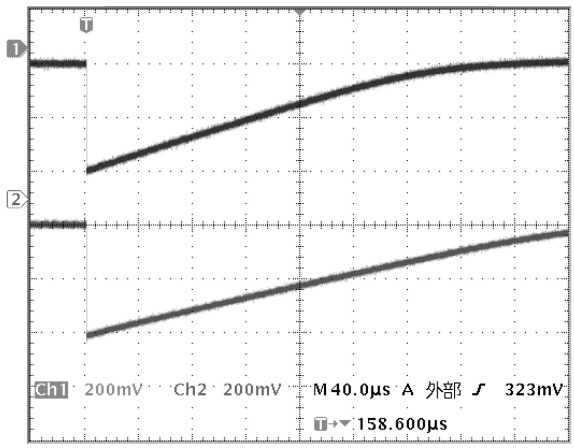


図 6.5: テストパルス (1.6 V) を入力したときのチップ (No.2) の出力波形 (上：タイプ A1、下：タイプ A2)

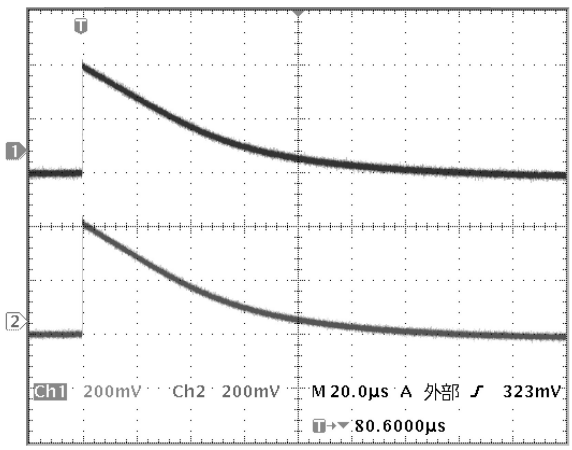


図 6.6: テストパルス (-1.6 V) を入力したときのチップ (No.3) の出力波形 (上：タイプ A1、下：タイプ A2)

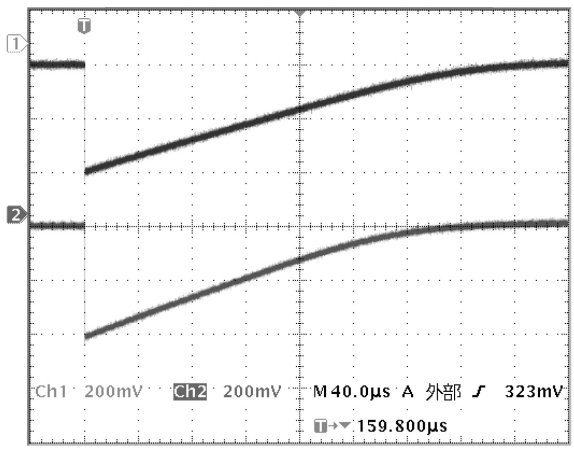


図 6.7: テストパルス (1.6 V) を入力したときのチップ (No.3) の出力波形 (上：タイプ A1、下：タイプ A2)

入力電荷 (Charge) とプリアンプ出力 (Output) の関係、および残差 (residual) を示している。なお、テストパルスは 100 mV 刻みで行ない、プリアンプの出力値は、オシロスコープのアベレージ機能を使用し読み取った。

タイプ A1 のプリアンプのリニアリティを図 6.8、タイプ A2 のリニアリティを図 6.9 に示す。シミュレーションにくらべ 残差 [%] は 10 倍程度なっている。これは、テストパルスの精度、測定誤差の影響であると考えられる。それでも 2 % 程度の範囲に収まっていることから、リニアリティ、ダイナミックレンジは十分確保できているといえる。

誤差が大きいため、全域にわたって線形性が良くみえるが、シミュレーションでは、プリアンプ出力が 0.8 V (入力電荷 -3 pC) に達したあたりで線形性が崩れ始めているため、実回路においてもこの範囲で運用する必要がある。

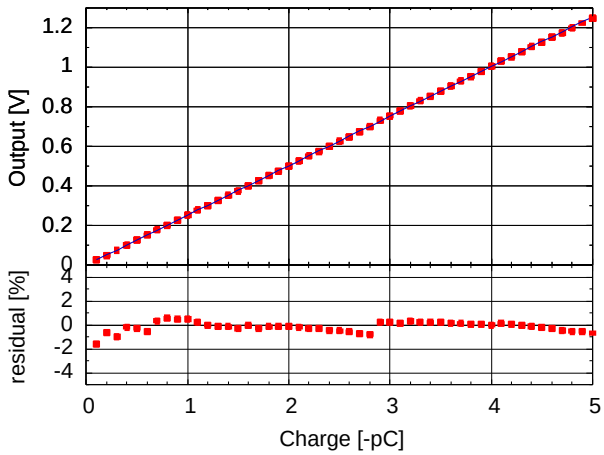


図 6.8: タイプ A1 の負電荷が入力されたときのリニアリティ

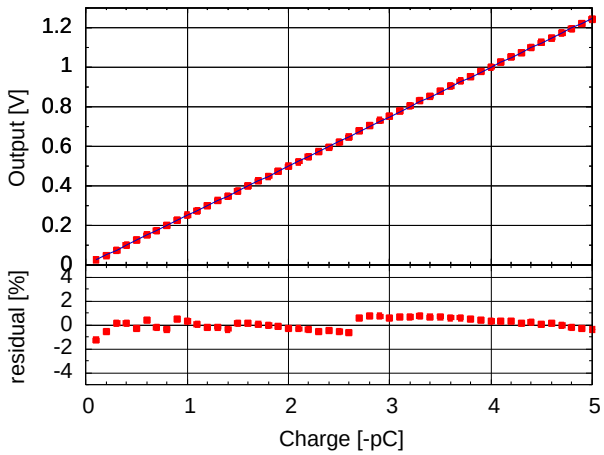


図 6.9: タイプ A2 の負電荷が入力されたときのリニアリティ

6.2.4 正電荷を入力したときのリニアリティ

正電荷入力のリニアリティについても同様に評価した (図 6.10、図 6.11)。フィッティング範囲は、0.16 pC ~ 1.6 pC とした。この範囲の電荷入力に対しては、リニアリティは確保できているといえる。ダイナミックレンジについては、シミュレーションと同様、負入力にくらべ狭くなることがわかった。

6.2.5 ノイズ評価

100 keV のガンマ線が 64chPMT(+GSO) に入射したときにアノードから出力される電子数 10^6 electron 相当のテストパルスを入力し、入力容量とノイズレベルの関係について調べた。

ノイズレベルは、シミュレーションと同様に ENC(Equivalent Noise Charge) に変換し評価する。ENC は、得られたヒストグラムのピークの幅から RMS ノイズ [V] を求め、この値を入力電子数 [electron] と整形回路出力 [V] との比から電子数に変換することで求めることができる。

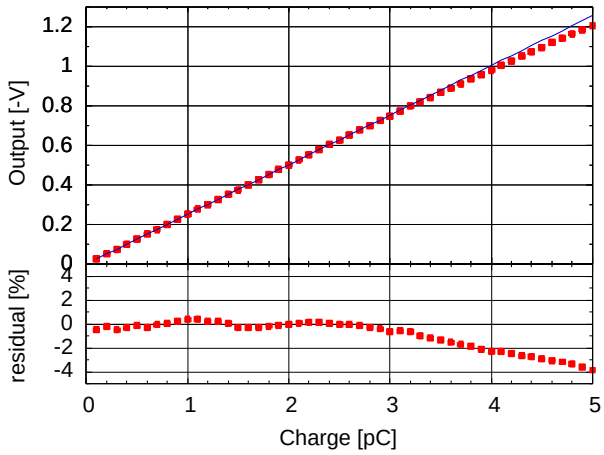


図 6.10: タイプ A1 の正電荷が入力されたときのリニアリティ

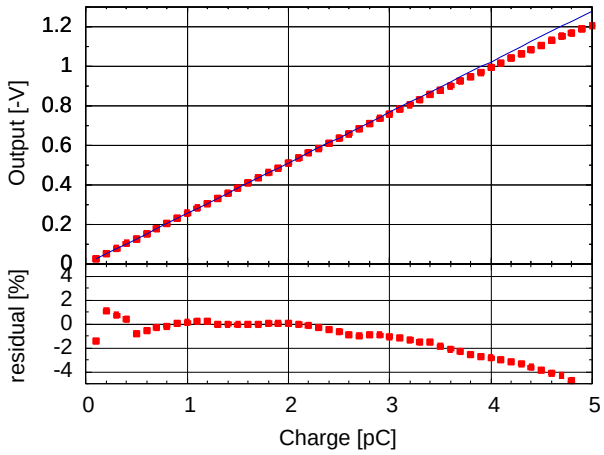


図 6.11: タイプ A2 の正電荷が入力されたときのリニアリティ

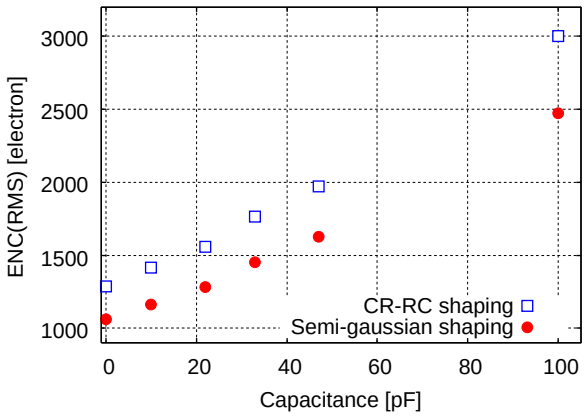


図 6.12: タイプ A1 のプリアンプの容量勾配

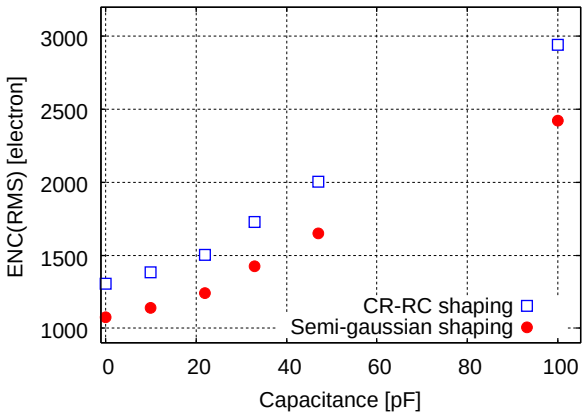


図 6.13: タイプ A2 のプリアンプの容量勾配

なお、本測定で使用した整形増幅回路 (ORTEC model 571) の出力パルス波形は、疑似ガウス関数 (semi-gaussian) であるため、シミュレーションの一段の積分回路で構成した整形回路よりノイズレベルは小さくなっている。疑似ガウス関数で整形 (Semi-gaussian shaping) した場合のノイズレベルは、一段の整形回路で整形 (CR-RC shaping) した場合の 0.82 倍 程度になる。

図 6.12(タイプ A1)、図 6.13(タイプ A2) に評価結果を示す。シミュレーションとの比較のため、CR-RC 整形の場合に換算したノイズレベルも示した。入力容量が、64chPMT(アノード) の検出器容量 (約 2.5 pF) の場合には、1300 electron (RMS) 程度 になることがわかった。外来ノイズ除去等、評価回路を最適化することにより、シミュレーション値 1000 electron (RMS) により近づけることは可能であると考えられるが、いずれにしても、64chPMT(+GSO) の入力信号 10^6 electron と比べて十分低く抑えられており問題ないレベルである。また、タイプ 2 の方が全体的にみて、ノイズレベルが低くなっていることがわかる。これはシミュレーションでも確認できており、ブーステッドカスコード型プリアンプの方が低ノイズであることが実証することができた。

シンチレーション検出器で得られたスペクトル中の FWHM は、検出器中における信号生成のポワソンゆらぎ、信号収集のポワソンゆらぎ、検出器から測定器に信号を伝える

間に加えられる電気ノイズに起因するゆらぎに依存する。入射ガンマ線のエネルギーが上がるにつれて、信号生成のポワソンゆらぎ、信号収集のポワソンゆらぎは増加するが、電気ノイズに起因するゆらぎはガンマ線のエネルギーに無関係である。テストパルス入力の場合、FWHM は電気ノイズにのみ影響する。そのことを確認するため、0.01 pC から 0.16 pC に相当するテストパルスを入力したときのノイズレベルを評価した (図 6.14、図 6.15)。これにより、ノイズレベルは入力電荷 (入射ガンマ線のエネルギー) と相関がないことが示された。

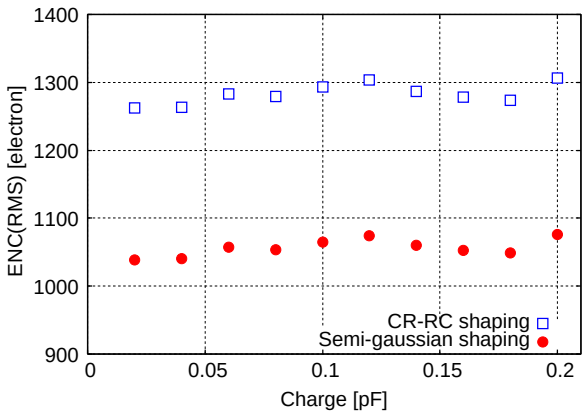


図 6.14: タイプ A1 の入力とノイズレベルの関係

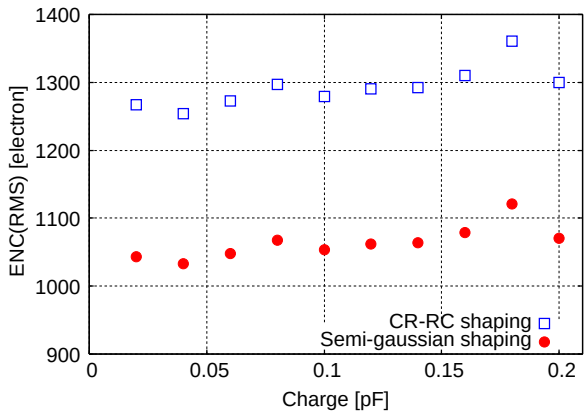


図 6.15: タイプ A2 の入力とノイズレベルの関係

6.2.6 64chPMT の信号入力 (アノード)

実際に 64chPMT(+GSO) のアノードとプリアンプ LSI を接続し、^{137}Cs の 662 keV のガンマ線を入射し、スペクトルを取得した (図 6.16、図 6.17)。

50 ADC channel 付近にあるピークが 662 keV に相当し、190 ADC channel 付近がプリアンプの限界出力値 (1.5 V 程度) がきている。よって 1 MeV は 0.5 V 程度となり、ほぼ設定どおりのゲインになっていることがわかった。

なお、ピークの幅が広くなってしまうのは、PMT の光電面と同じ大きさのシンチレータを使っているためである。この場合、単一エネルギーのガンマ線が入射しても、アノード 1 本が収集できる光子数は、ガンマ線がシンチレータ内で光電吸収等の相互作用を起こした場所によって変化するため、結果としてエネルギー分解能は悪くなる。アノード信号は、重み平均をとることにより、ガンマ線の入射位置を決定することに利用するため、エネルギー分解能は直接的には要求しない。

6.2.7 64chPMT の信号入力 (ダイノード)

試作したプリアンプ LSI と、現在の 64chPMT 用読み出し回路 (ディスクリート素子で構成したプリアンプ回路) とエネルギー分解能を比較のため、ダイノード出力のスペクトルを取得した。ただし、ダイノード出力の電子数は、個々のアノードに比べて大きくなる

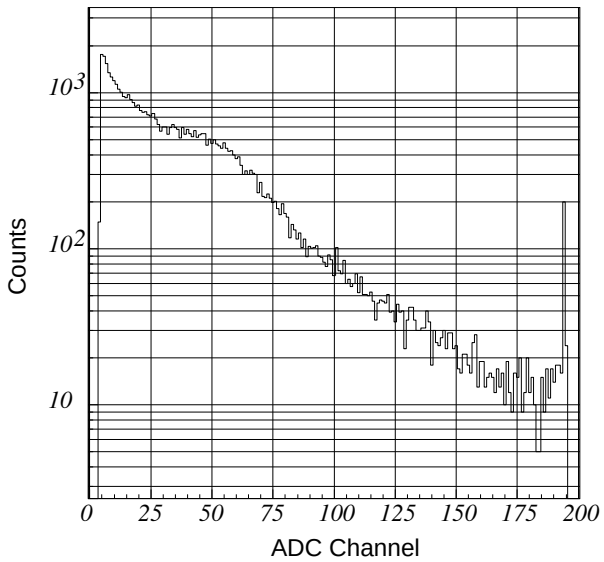


図 6.16: 662 keV (^{137}Cs) のガンマ線が入射したときのアノードのスペクトル (タイプ A1)

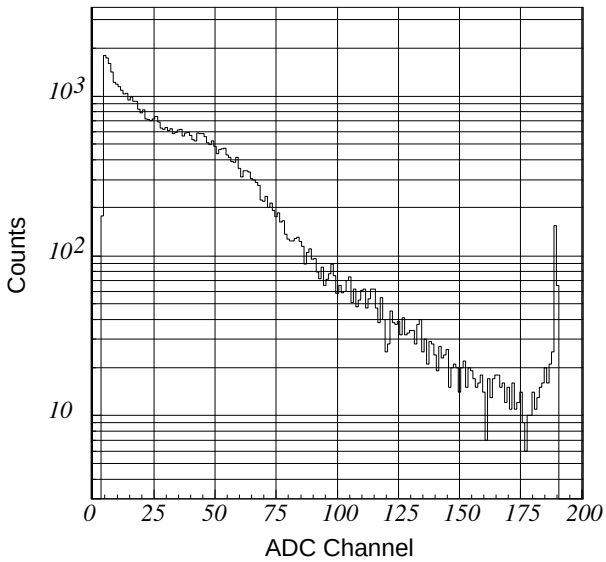


図 6.17: 662 keV (^{137}Cs) のガンマ線が入射したときのアノードのスペクトル (タイプ A2)

ため、帰還容量を 100 pF に変更した。

662 keV (^{137}Cs) のガンマ線が入射したときのダイノードのスペクトルを図 6.18(タイプ A1)、図 6.19(タイプ A2) に示す。662 keV におけるエネルギー分解能はタイプ A1 で 11.3% 、タイプ A2 で 11.4 % となった。現在の 64chPMT 用読み出し回路は 10.9 % 程度であるから、ほぼ同程度の性能を有することがわかった。

88 keV (^{109}cd) のスペクトルを図 6.20(タイプ A1)、図 6.21(タイプ A2) に示す。^{109}Cd の 88 keV のピークも十分識別できており、スペクトル中の 10 ADC channel 付近のピークは電気ノイズに相当するもので、約 13 keV 程度になっていることから、ノイズレベルは十分低く抑えられていることがわかった。

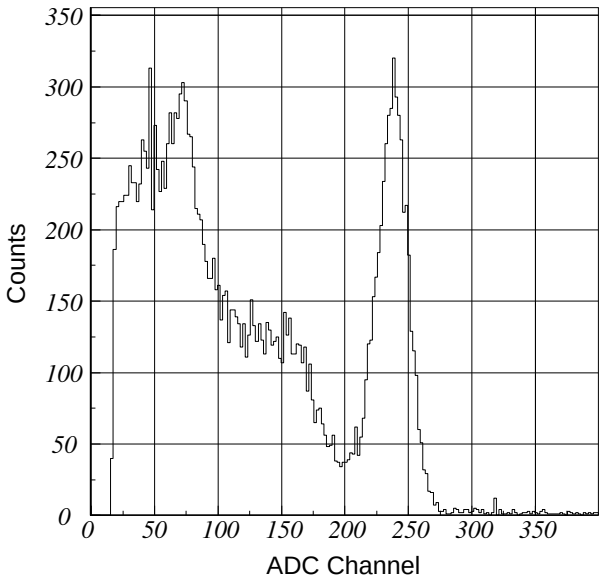


図 6.18: 662 keV (^{137}Cs) のガンマ線が入射したときのダイノードのスペクトル (タイプ A1)

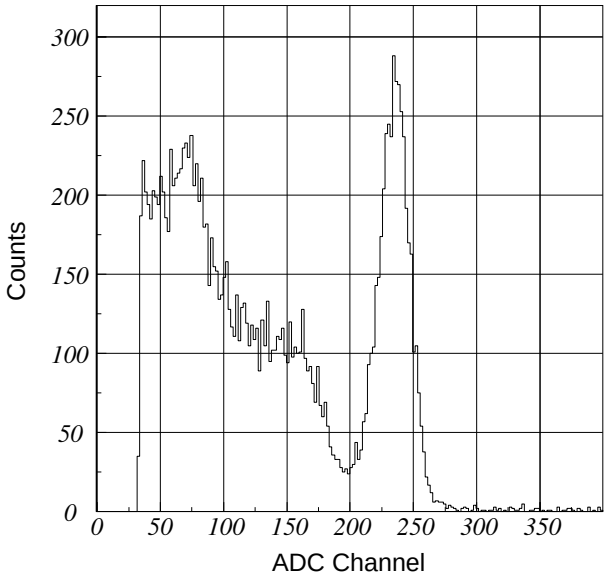


図 6.19: 662 keV (^{137}Cs) のガンマ線が入射したときのダイノードのスペクトル (タイプ A2)

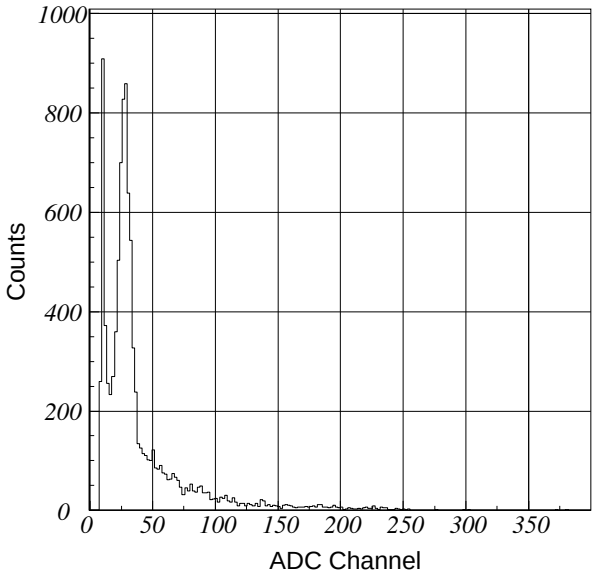


図 6.20: 88 keV (^{109}Cd) のガンマ線が入射したときのダイノードのスペクトル (タイプ A1)

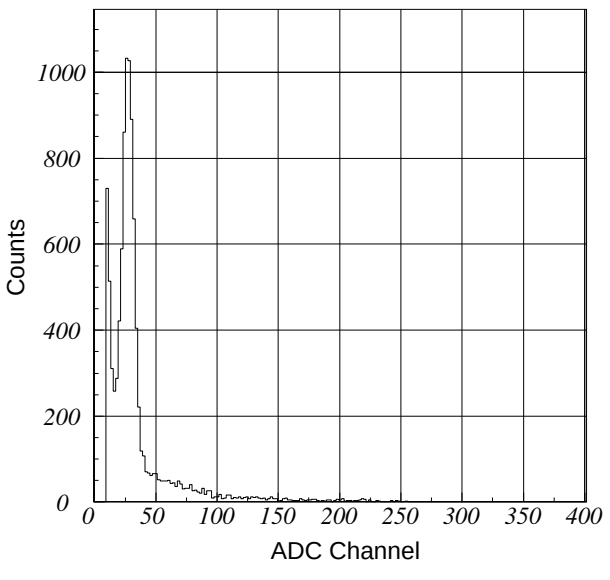


図 6.21: 88 keV (^{109}Cd) のガンマ線が入射したときのダイノードのスペクトル (タイプ A2)

6.3 まとめ

パルス波形の評価において、64chPMT のアノード信号に相当する電荷をテストパルスにより入力した結果、その出力波形はほぼシミュレーション通りの形になった。ノイズレベルの評価において、入力容量が 64chPMT(アノード) の検出器容量 (約 2.5 pF) の場合のノイズレベルは 1300 electron (RMS) 程度になり、目標値 1000 electron (RMS) には及ばなかったが、評価回路を最適化することにより十分近づけることが可能であると考えられる。いずれにしても、アノードの信号レベルに対して、十分低く抑えられており問題ないことがわかった。リニアリティに関しては、テストパルスの精度、測定誤差の影響で残差は大きくなったが、アノード信号に対する線形性は、十分確保できることがわかった。実際に 64chPMT に接続し、ダイノード信号における 662 keV (^{137}Cs) のエネルギー分解能を、現在の 64chPMT 用読み出し回路 (ディスクリート素子で構成したプリアンプ回路) と比べたところ、ほぼ同等であることがわかった。

以上の結果から、今回試作したプリアンプ LSI は、64chPMT 用のプリアンプとして十分実用レベルであることがわかった。また、今回 2 種類のプリアンプを組み込んだが、ブーステッドカスコード型の方が低ノイズを実現できることを実証することができた。

問題点としては、 -100 mV ~ -200 mV のオフセットの存在があった。これは、後段回路 (K02-32SA) との接続する際、AC 結合することによって解消できると考えられる。その他の問題点として、正入力の場合のパルス波形において、指数関数的減衰にならないこと、およびチップによって時定数が一定にならないことがあげられる。時定数のバラツキは、高抵抗回路の基準電流値で調整することで、補正できるため大きな問題ではない。指数関数的減衰にならないことの原因としては、MOS 精度のバラツキによって高抵抗回路が非線形的動作している可能性が考えられる。今回は、64chPMT のアノード信号 (負入力) を想定しているため、正入力の場合の問題を考慮する必要はないが、今後、応用として正信号を扱う場合に備えて、改善すべき点である。

第7章　まとめ

100 keV ~ 1 MeV に感度をもつコンプトンカメラの開発を目指して、64chPMT(+GSO) と PD を組み合わせた検出器を開発した。その性能評価を行なったところ、位置決定精度の指標である角分解能が実用レベルに達していないことが明らかになった。その原因を調査した結果、64chPMT が期待されるエネルギー分解能を実現できていないことが主要因であることがわかった。そのエネルギー分解能低下の原因を調査するため、シンチレータサイズに対する依存性、ピークホールド回路の有無、温度依存性について検証した。その結果、シンチレータサイズを小さくしていく検証のみエネルギー分解能が向上させることができた。しかし、10 mm × 10 mm × 10 mm の GSO シンチレータを用いても ^{137}Cs の 662 keV のエネルギー分解能が 9.6 % 程度になり、一般的な PMT と GSO で実現できる 7 % を実現することができなかった。その結果を受け、光電面の位置によるゲイン・分解能の存在が考えられため、LED 光を用いて入射位置によるゲイン・分解能を検証したところ、ゆらぎがあることが確認された。これについては、64chPMT の内部電極構造を製造元である浜松ホトニクス社と相談し改良していく必要がある。

昨年度開発した VLSI(K02-32SA) を評価した結果、さらなる改良は必要であるが、要求どおりの性能を実現できていることがわかった。しかし、K02-32SA には設計の難しいプリアンプ回路が組み込まれておらず、外付けで準備する必要がある。そこで本論文では、K02-32SA と組み合わせるためのプリアンプ回路の仕様を検討することを目的として、プリアンプ LSI の設計・開発をおこなった。回路設計を行なうにあたって、ISAS の池田先生の指導を受けることができ、ノイズレベルが 1000 electron、リニアリティを 0.2 % 精度で確保した場合の入力のダイナミックレンジが 50 倍 程度になる、64chPMT のアノード信号用プリアンプとして十分な性能をもつ回路を設計することができた。レイアウト設計は、K02-32SA のときは外注していたが、今回 LSI の知識を深めることを目的として、広大工学部岩田研の協力を得ながら、我々でおこなった。納入されたチップの出力パルス、ノイズレベル、リニアリティを評価した結果、ほぼシミュレーション通りの性能を有していることがわかった。そこで実際に 64chPMT に接続し、 662 keV (^{137}Cs) のガンマ線のスペクトルを取得したところ、ダイノード信号における 662 keV のエネルギー分解能は 11 % 程度になり、現在の 64chPMT の信号読み出し回路 (ディスクリート素子で構成されたプリアンプ回路) とほぼ同程度なった。また、88 keV (^{109}Cd) も十分識別でき、ノイズレベルも十分低いことがわかった。よって、今回試作したプリアンプ LSI は 64chPMT のプリアンプ回路として十分な性能をもっているといえる。今後は正信号入力の場合に生じた問題点の改善等の改良を行ない、実際に K02-32SA の回路と組み合わせた VLSI の開発を目指す。

付 録A　プリアンプLSIのピン対応図および回路図

A.1　ピン配置一覧表

ピン配置一覧表、ピン配置対応図 (図 A.1)、パッケージピン接続対応図 (図 A.2)、チップパッド配置図 (図 A.3) を示す。

ピン番号	名称	説明		パッド	パッド番号
1			B1		1
2	NC				
3			B2		2
4	NC				
5	VDD	コア用 (1.65V)	B3	PAD	3
6	VDD	コア用 (1.65V)	B4	PAD	4
7	TP	テストパルス入力	B5	ANAIO	5
8	ENB	イネーブル信号入力	B6	IOR	6
9			B7		7
10	VSS	コア用 (-1.65V)	B8	PAD	8
11	VSS	コア用 (-1.65V)	B9	PAD	9
12	VSS	コア用 (-1.65V)	B10	PAD	10
13	VSS	コア用 (-1.65V)	B11	PAD	11
14	VDD	コア用 (1.65V)	B12	PAD	12
15	VDD	コア用 (1.65V)	B13	PAD	13
16					
17			B14		14
18	NC				
19			B15		15
20	NC				
21			R15		16
22	NC				
23			R14		17
24	NC				
25	GND	アナログ・グラウンド	R13	PAD	18
26	GND	アナログ・グラウンド	R12	PAD	19
27	A02	信号出力	R11	ANAIO	20
28			R10		21
29	GND	グラウンド (保護回路付き)	R9	ANAIO	22
30	GND	アナログ・グラウンド	R8	PAD	23

31	GND	アナログ・グラウンド	R7	PAD	24
32			R6		25
33	A01	信号出力	R5	ANAIO	26
34	GND	アナログ・グラウンド	R4	PAD	27
35	GND	アナログ・グラウンド	R3	PAD	28
36	NC				
37			R2		29
38	NC				
39			R1		30
40	NC				
41			T15		31
42	NC				
43			T14		32
44	NC				
45	VDD	コア用 (1.65V)	T13	PAD	33
46	VDD	コア用 (1.65V)	T12	PAD	34
47	VSS	コア用 (-1.65V)	T11	PAD	35
48	VSS	コア用 (-1.65V)	T10	PAD	36
49	VSS	コア用 (-1.65V)	T9	PAD	37
50	VSS	コア用 (-1.65V)	T8	PAD	38
51	IOP	電流設定 バッファ用	T7	ANAIO	39
52	IFB	電流設定 高抵抗回路用	T6	ANAIO	40
53	IPR	電流設定 プリアンプ用	T5	ANAIO	41
54	VDD	コア用 (1.65V)	T4	PAD	42
55	VDD	コア用 (1.65V)	T3	PAD	43
56	NC				
57			T2		44
58	NC				
59			T1		45
60	NC				
61			L1		46
62	NC				
63			L2		47
64	NC				
65	GND	アナログ・グラウンド	L3	PAD	48
66	GND	アナログ・グラウンド	L4	PAD	49
67	S01	信号入力	L5	ANAIO	50
68			L6		51
69	GND	アナログ・グラウンド	L7	PAD	52
70	GND	アナログ・グラウンド	L8	PAD	53
71	GND	グラウンド (保護回路付き)	L9	ANAIO	54
72			L10		55
73	S02	信号入力	L11	ANAIO	56

74	GND	アナログ・グラウンド	L12	PAD	57
75	GND	アナログ・グラウンド	L13	PAD	58
76	NC				
77			L14		59
78	NC				
79			L15		60
80	NC				

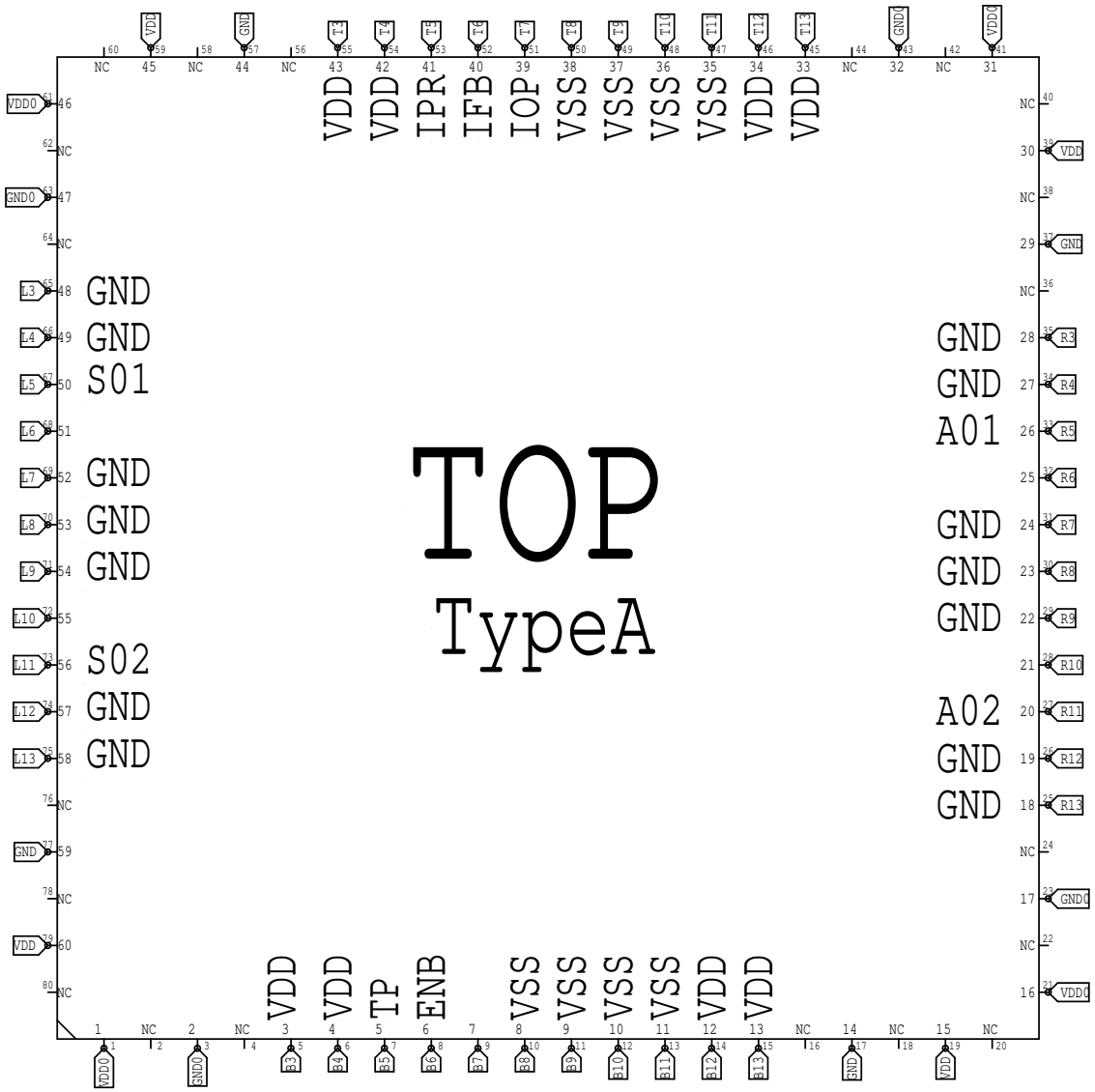
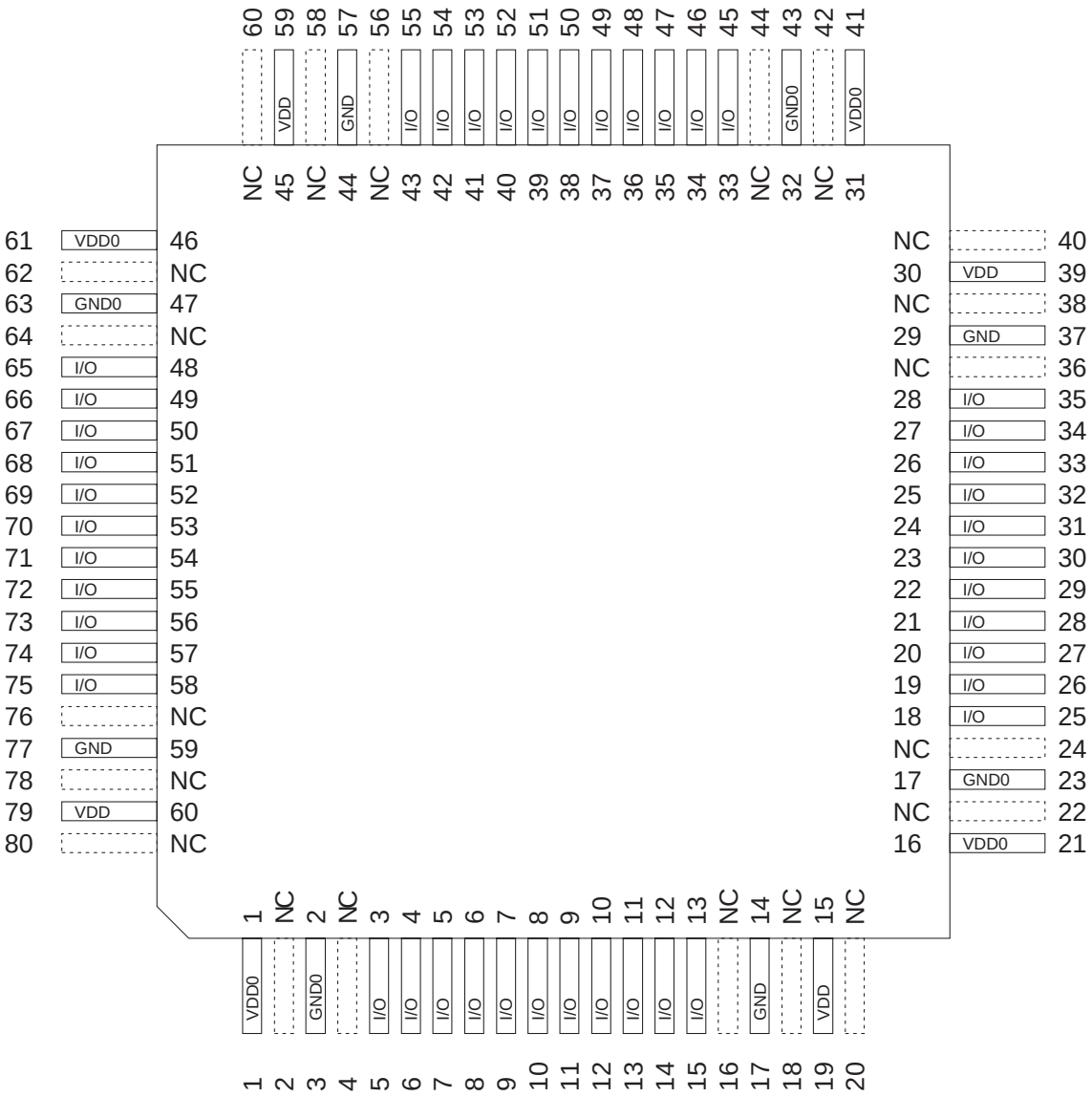

TOP
TypeA
VDD
VDD
IPR
IFB
IOP
VSS
VSS
VSS
VSS
VDD
VDD
GND
GND
S01
GND
GND
GND
S02
GND
GND
GND
GND
A01
GND
GND
GND
A02
GND
GND
VDD
VDD
TP
ENB
VSS
VSS
VSS
VSS
VDD
VDD

図 A.1: ピン配置対応図

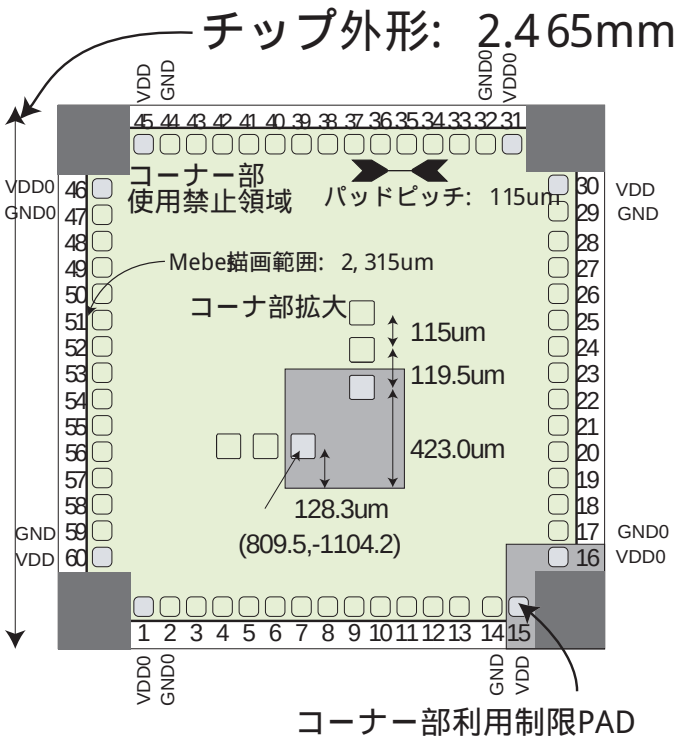
ローム0.35um 2.4m角チップパッド—QFP80パッケージピン接続対応図



チップ端子部分のGND,VDD,I/Oの意味はチップパッド配置図を参照のこと

図 A.2: パッケージピン接続対応図

ローム0.35um 2.45mm角チップパッド配置図



VDE設置ロジックテスターを使用する場合の電源グランドパッド配置

V: 内部用電源パッド　　V0: IOパッド　用電源パッド

G: 内部用グランドパッド　　G0: IOパッド用グランドパッド

○電源グランドのパッドの配置は図面通りは必須では無いがパッド数の目安としていただきたい

○コーナ部利用制限PADはコーナーセルの制約から来るものである

○Mebe描画範囲（チップ外形から７５um内側）より外側にはいかなる図形の描画も禁止する

○４方のコーナ部への一切の図形配置禁止

図 A.3: チップパッド配置図

A.2 SPICEネットリストと回路ブロック図

```
.SUBCKT PAD PAD
.ENDS
```

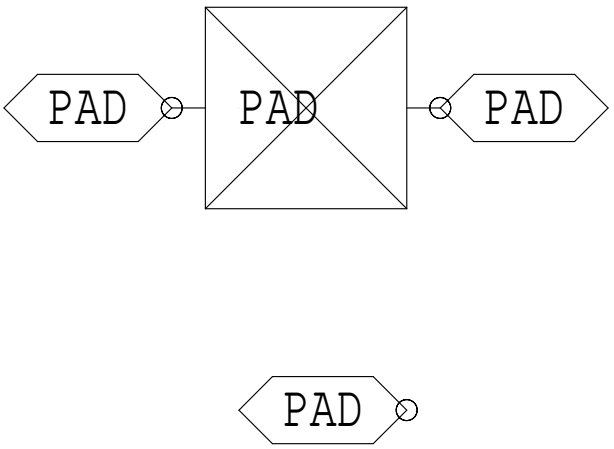


図 A.4: PAD

```
.SUBCKT ANAIO A
M1 A VDD VDD VDD P L=0.5u W=800u M=1
M2 A VSS VSS VSS N L=0.5u W=350u M=1
.ENDS
```

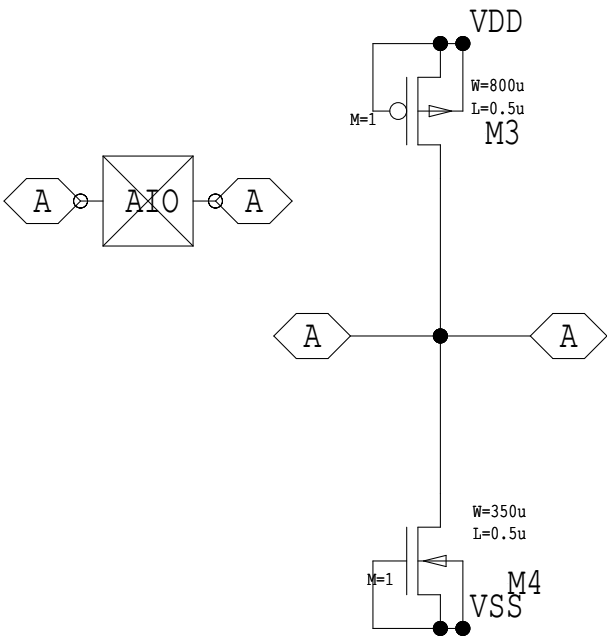


図 A.5: ANAIO

```
.SUBCKT IOR A B
M1 A VDD VDD VDD P L=0.5u W=800u M=1
```

```
M2 B VSS VSS VSS N L=0.5u W=350u M=1
M3 A VSS VSS VSS N L=0.5u W=350u M=1
M4 B VDD VDD VDD P L=0.5u W=800u M=1
R5 A B 10K TC=0.0, 0.0
.ENDS
```

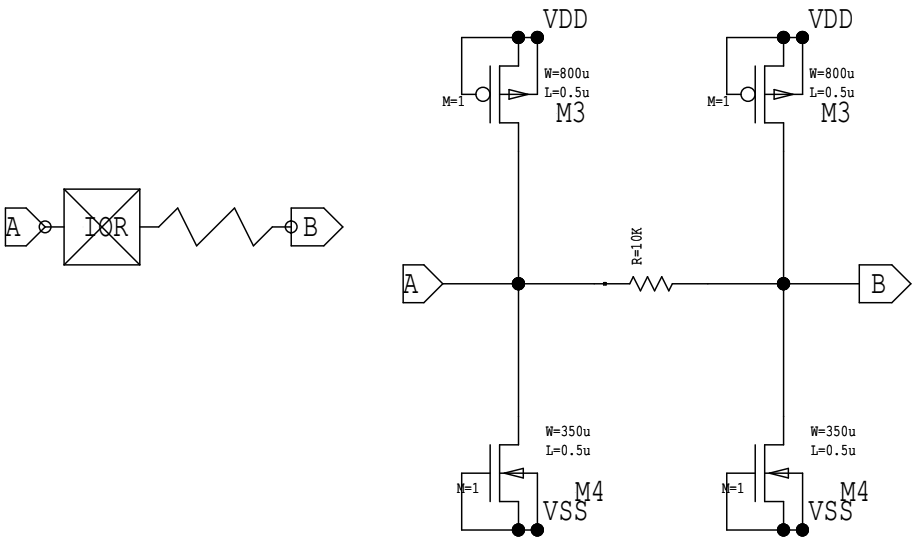


図 A.6: IOR

```
.SUBCKT BIASa IIN VH
C1 IIN VH 1pF
C2 N3 N1 1pF
M1 N3 N1 Vss Vss N L=3u W=6u  M=10
M2 N1 N1 Vss Vss N L=3u W=6u  M=10
M3 VH IIN N1 Vss N L=1u W=6u  M=10
M4 IIN IIN N3 Vss N L=1u W=6u  M=10
M5 VH VH Vdd Vdd P L=1u W=15u  M=10
.ENDS


.SUBCKT BIASb IIN VH VL
C1 IIN VH 1pF
C2 N3 VL 1pF
M1 N3 VL Vss Vss N L=3u W=6u  M=10
M2 VL VL Vss Vss N L=3u W=6u  M=10
M3 VH IIN VL Vss N L=1u W=6u  M=10
M4 IIN IIN N3 Vss N L=1u W=6u  M=10
M5 VH VH Vdd Vdd P L=1u W=15u  M=10
.ENDS


.SUBCKT BIASc IIN VL
C1 IIN N1 1pF
C2 N3 VL 1pF
M1 N3 VL Vss Vss N L=3u W=6u  M=10
M2 VL VL Vss Vss N L=3u W=6u  M=10
M3 N1 IIN VL Vss N L=1u W=6u  M=10
```

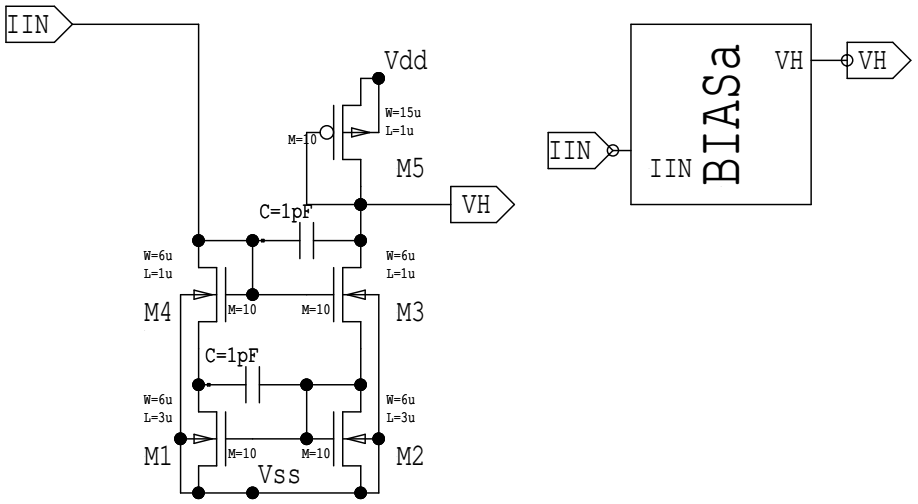


図 A.7: BIASa

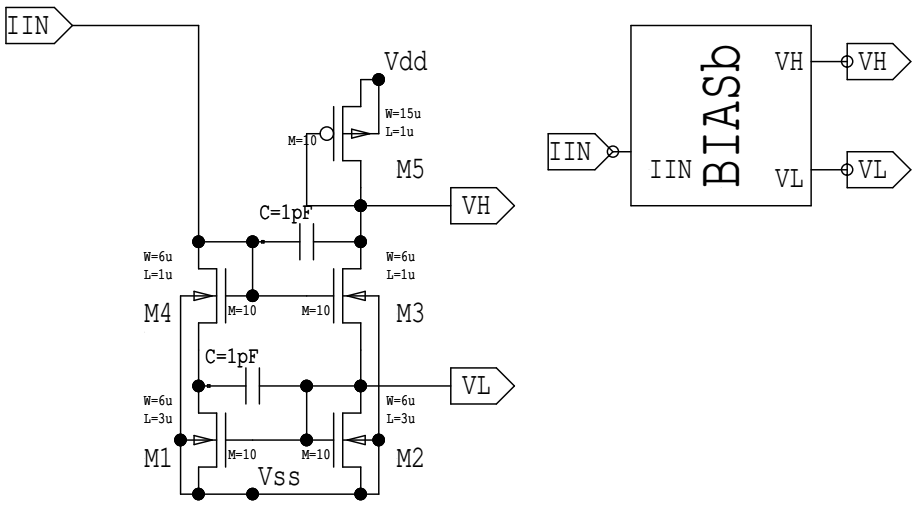


図 A.8: BIASb

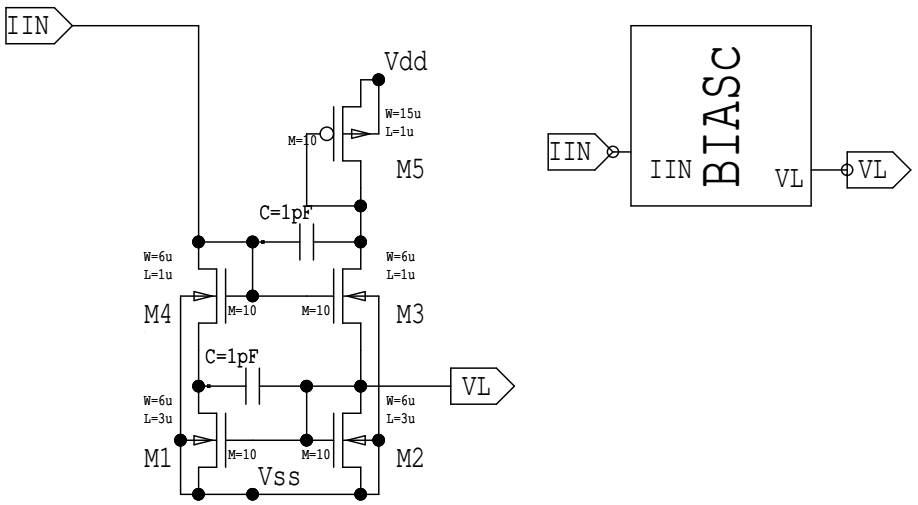


図 A.9: BIASc

```
M4 IIN IIN N3 Vss N L=1u W=6u  M=10
M5 N1 N1 Vdd Vdd P L=1u W=15u  M=10
.ENDS


.SUBCKT BIASd IIN VH VL VM
C1 IIN VH 1pF
C2 N3 VL 1pF
M1 N3 VL Vss Vss N L=3u W=6u  M=10
M2 VL VL Vss Vss N L=3u W=6u  M=10
M3 VH IIN VL Vss N L=1u W=6u  M=10
M4 IIN IIN N3 Vss N L=1u W=6u  M=10
M5 VH VH Vdd Vdd P L=1u W=15u  M=10
R3 GND VM 10K TC=0.0, 0.0
.ENDS
```

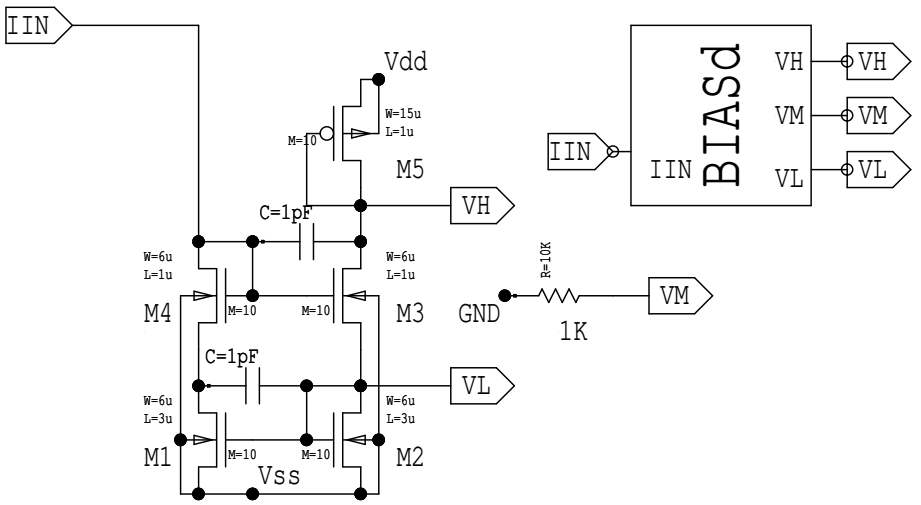


図 A.10: BIASd

```
.SUBCKT CHAIN0 HRi IFB IOP IPR RLo VH VL VL2 VM
XBIAS1_1 IFB N1 BIASa
XBIAS2_1 N3 HRi RLo BIASb
XBIAS3_1 IOP VL2 BIASc
XBIAS4_1 IPR VH VL VM BIASd
M1 N3 N1 VDD VDD P L=1u W=3u M=1
.ENDS


.SUBCKT OP1B INN INP OUT VL
M1 N2 INP N4 VSS N L=1u W=6u M=10
M2 OUT INN N4 VSS N L=1u W=6u M=10
M3 N4 N3 VSS VSS N L=3u W=6u M=20
M4 VSS N3 VSS VSS N L=3u W=6u M=20
M5 N2 N2 VDD VDD P L=1u W=15u M=10
M6 OUT N2 VDD VDD P L=1u W=15u M=10
R1 VL N3 10K TC=0.0, 0.0
.ENDS
```

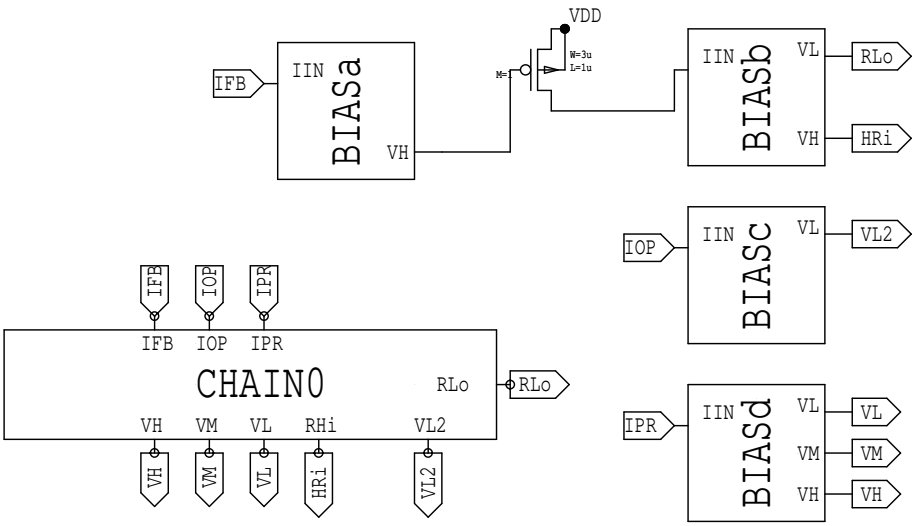


図 A.11: CHAIN0

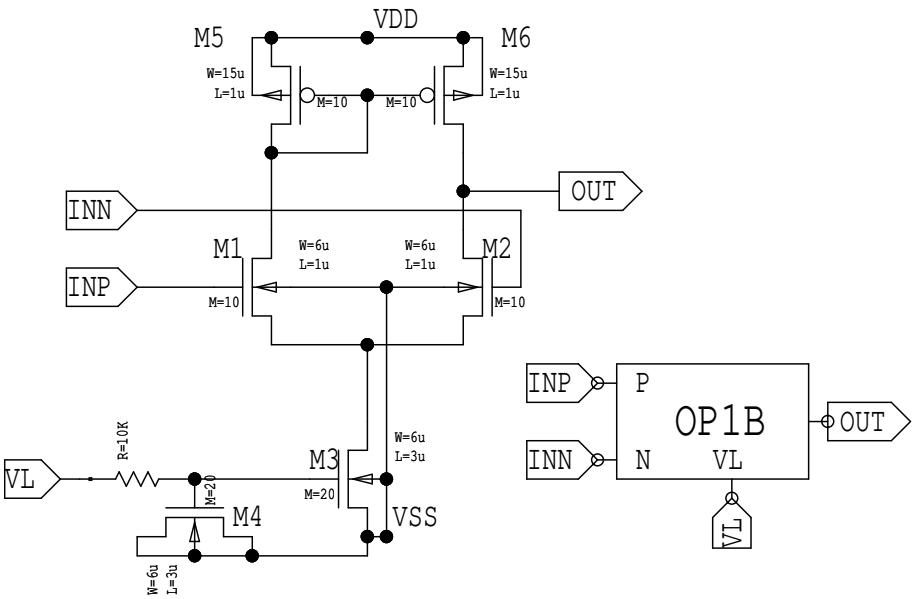


図 A.12: OP1B

```
.SUBCKT HiR IOUT RHi RLo VIN1 VIN2 VM
M1 N34 N39 Vss Vss N L=3u W=6u M=1
M2 N36 N37 VDD VDD P L=1u W=15u  M=2
M3 IOUT N38 N36 N36 P L=1u W=3u M=1
M4 Vss VIN1 N35 N35 P L=1u W=3u M=1
M5 IOUT N33 N34 Vss N L=1u W=6u M=1
M6 N41 N39 Vss Vss N L=3u W=6u M=2
M7 Vss N39 Vss Vss N L=3u W=6u M=10
M8 Vss N33 Vss Vss N L=1u W=6u M=10
M9 N41 N41 N36 N36 P L=1u W=3u M=1
M10 N41 N41 N35 N35 P L=1u W=3u M=1
M11 N35 N37 VDD VDD P L=1u W=15u  M=2
M12 VDD N37 VDD VDD P L=1u W=15u  M=10
R1 RHi N37 10k TC=0.0, 0.0
R2 VIN2 N38 10k TC=0.0, 0.0
R3 VM N33 10k TC=0.0, 0.0
R4 RLo N39 10k TC=0.0, 0.0
.ENDS
```

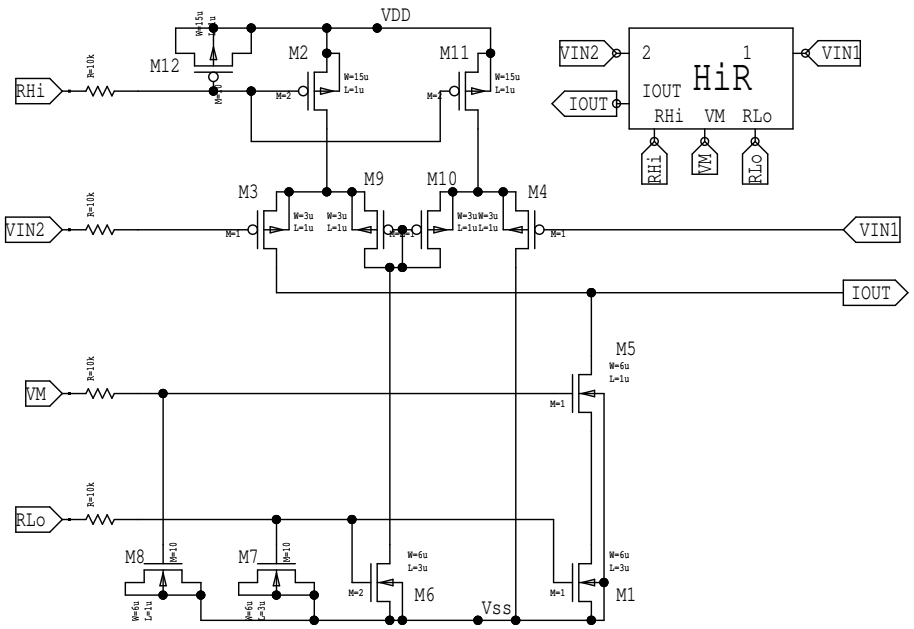


図 A.13: HiR

```
.SUBCKT inv1 A Y
M1 Y A Vss Vss N L=1.2u W=3u M=1
M2 Y A Vdd Vdd P L=0.4u W=3u M=1
.ENDS


.SUBCKT inv2 ENB out TP
Xinv1_1 ENB N4 inv1
M1 out ENB TP VSS N L=0.4u W=3u M=1
M2 out N4 TP VDD P L=0.4u W=3u M=1
.ENDS
```

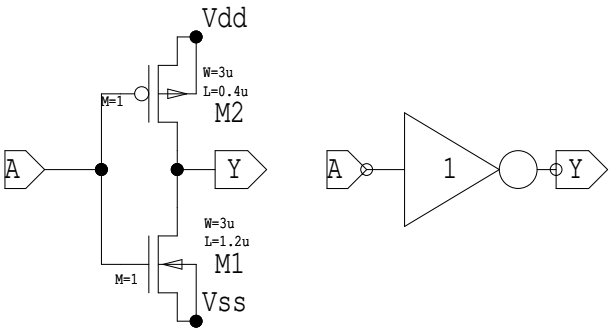


図 A.14: INV1

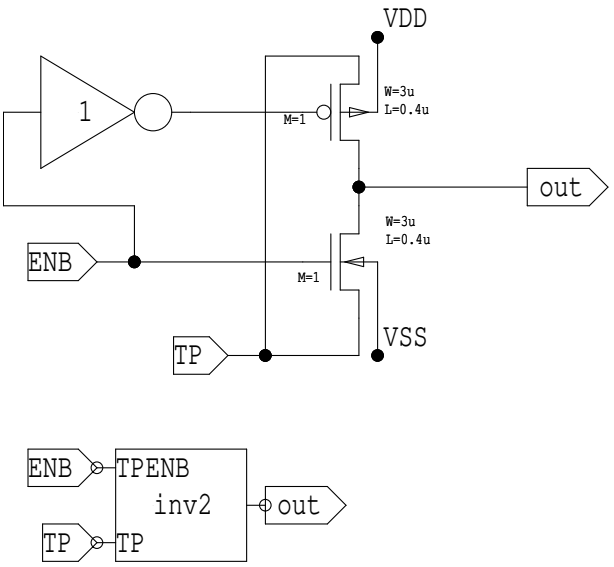


図 A.15: INV2

```
.SUBCKT prC_A1 AIN AOUT VH VL VM
M1 N38 AIN GND GND P L=0.5u W=8u M=100
M2 N38 N37 Vss Vss N L=3u W=6u  M=11
M3 AOUT N34 N38 Vss N L=1u W=6.u M=1
M4 AOUT N36 N35 Vdd P L=1u W=15u M=1
M5 N35 N33 Vdd Vdd P L=1u W=15u M=1
M6 Vss N37 Vss Vss N L=3u W=6u  M=10
M7 Vss N34 Vss Vss N L=3u W=6u  M=10
M8 Vdd N33 Vdd Vdd P L=1u W=15u M=10
M9 Vdd N36 Vdd Vdd P L=1u W=15u M=10
R1 VH N33 10K TC=0.0, 0.0
R2 VL N37 10K TC=0.0, 0.0
R3 VM N36 10K TC=0.0, 0.0
R4 VM N34 10K TC=0.0, 0.0
.ENDS
```

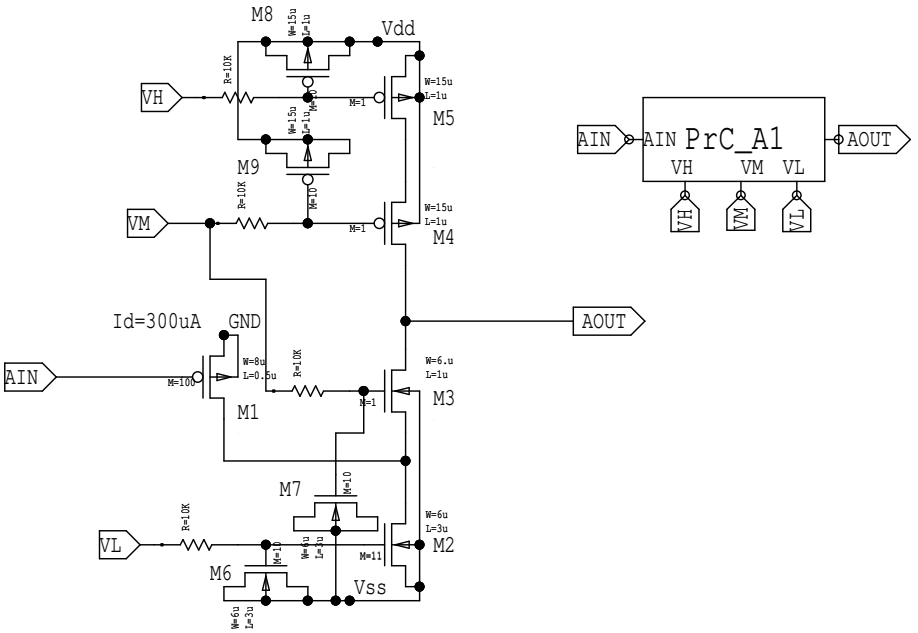


図 A.16: PrC-A1

```
.SUBCKT stage1_A1 AIN AOUT ENB HRi RLo TP VH VL VM
C1 N1 TPJ 1pF
C2 VSS AOUT 0.2pF
C3 AOUT AIN 1pF
XHiR_1 AIN HRi RLo AOUT VM VM HiR
Xinv2_1 ENB TPJ TP inv2
XprC-A1_1 AIN AOUT VH VL VM prC_A1
R4 N1 AIN 10K TC=0.0, 0.0
.ENDS
```

```
.SUBCKT CHAIN1_A1 AIN AOUT ENB HRi RLo TP VH VL VL2 VM
XOP1B_1 AOUT N1 AOUT VL2 OP1B
Xstage1-A1_1 AIN N1 ENB HRi RLo TP VH VL VM stage1_A1
.ENDS
```

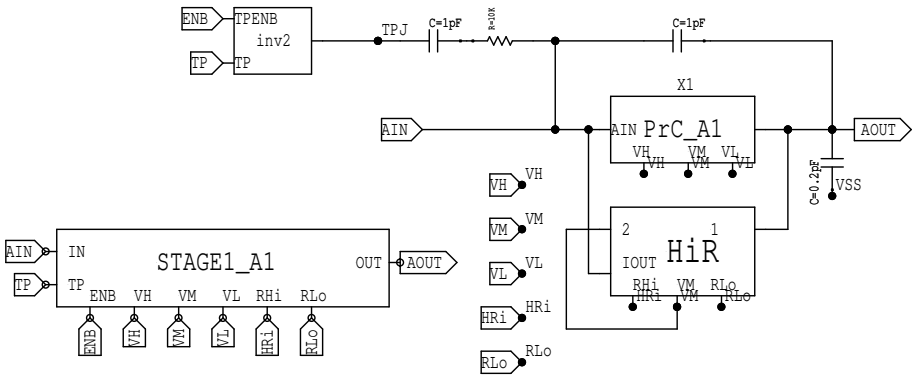


図 A.17: STAGE1-A1

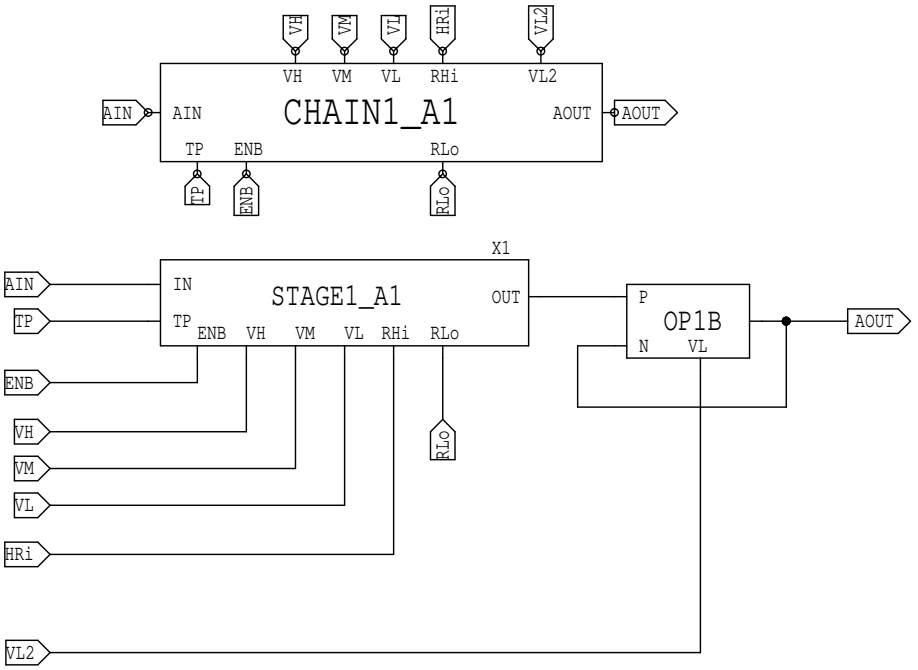


図 A.18: CHAIN1-A1

```
.SUBCKT prC_A2 AIN AOUT VH VL VM
M1 N38 AIN GND GND P L=0.5u W=8u M=100
M2 N38 N37 Vss Vss N L=3u W=6u  M=11
M3 AOUT N36 N38 Vss N L=1u W=6u M=1
M4 AOUT N34 N35 Vdd P L=1u W=15u M=1
M5 N35 N33 Vdd Vdd P L=1u W=15u M=1
M6 Vss N37 Vss Vss N L=3u W=6u  M=10
M7 N36 N37 Vss Vss N L=3u W=6u  M=1
M8 Vdd N33 Vdd Vdd P L=1u W=15u M=10
M9 Vdd N34 Vdd Vdd P L=1u W=15u M=10
M10 N36 N38 GND GND P L=0.5u W=8.u M=1
R1 VH N33 10K TC=0.0, 0.0
R2 VM N34 10K TC=0.0, 0.0
R3 VL N37 10K TC=0.0, 0.0
.ENDS
```

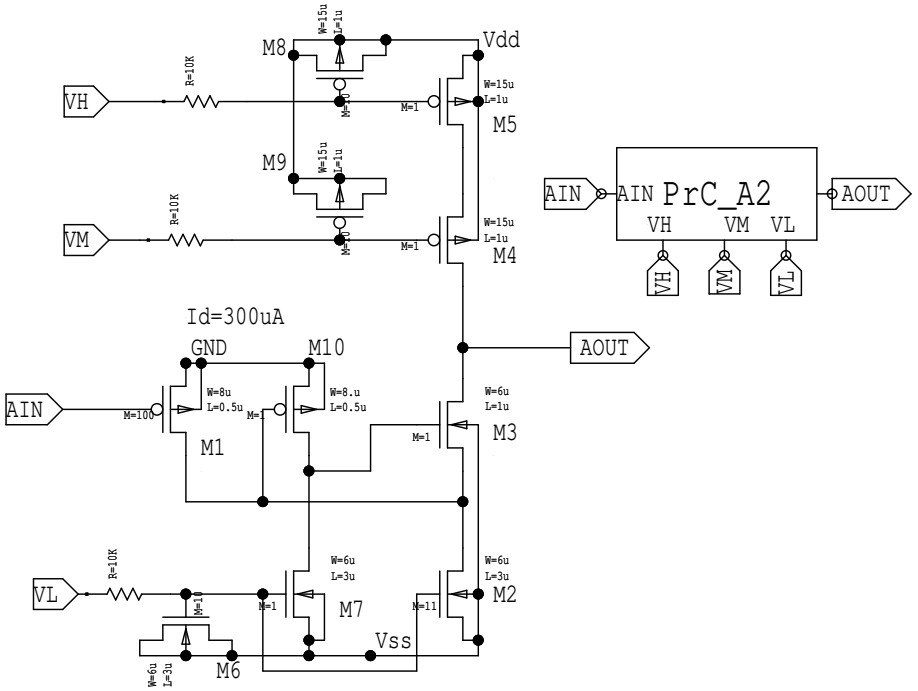


図 A.19: PrC-A2

```
.SUBCKT stage1_A2 AIN AOUT ENB HRi RLo TP VH VL VM
C1 N1 TPJ 1pF
C2 VSS AOUT 0.2pF
C3 AOUT AIN 1pF
XHiR_1 AIN HRi RLo AOUT VM VM HiR
Xinv2_1 ENB TPJ TP inv2
XprC-A2_1 AIN AOUT VH VL VM prC_A2
R4 N1 AIN 10K TC=0.0, 0.0
.ENDS

.SUBCKT CHAIN1_A2 AIN AOUT ENB HRi RLo TP VH VL VL2 VM
XOP1B_1 AOUT N2 AOUT VL2 OP1B
Xstage1-A2_1 AIN N2 ENB HRi RLo TP VH VL VM stage1_A2
.ENDS
```

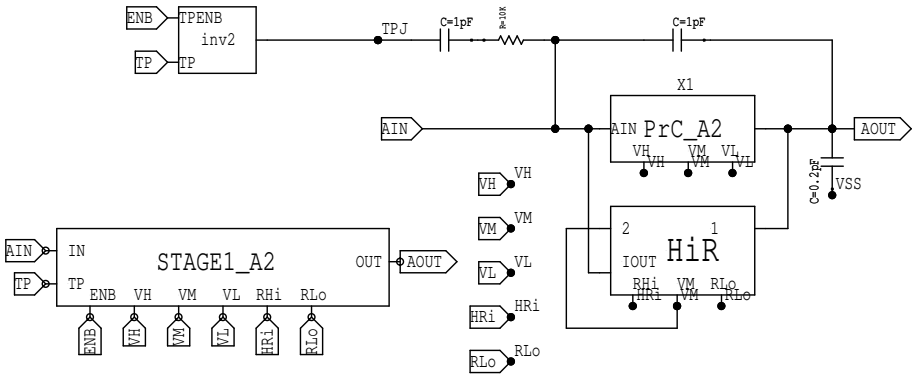


図 A.20: STAGE-A2

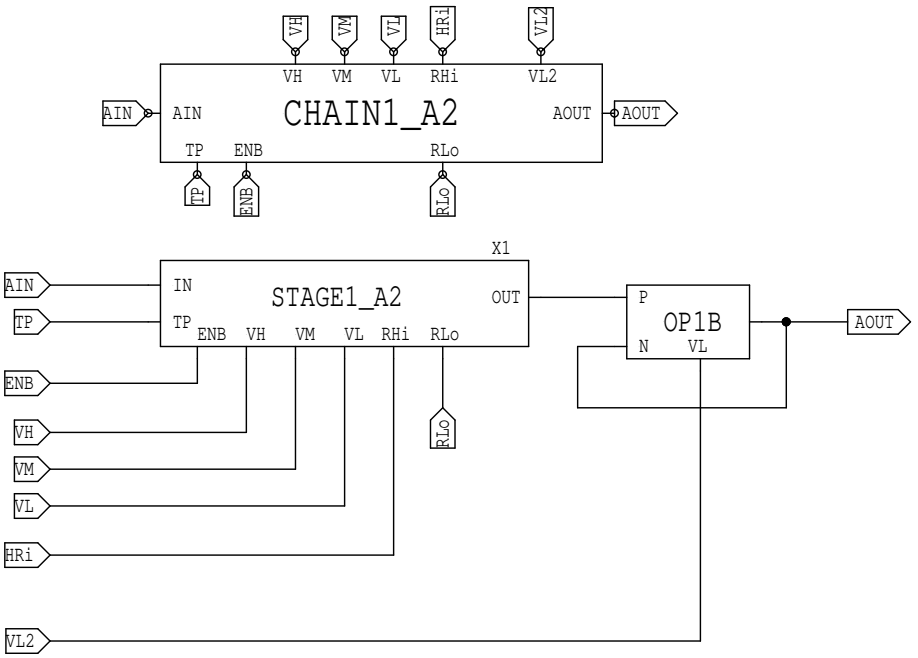


図 A.21: CHAIN1-A2

```
.SUBCKT CORE A01 A02 ENB IFB IOP IPR S01 S02 TP
XCHAIN0_1 N6 IFB IOP IPR RLo N1 N2 N4 N5 CHAIN0
XCHAIN1_A1_1 S01 A01 ENB N6 RLo TP N1 N2 N4 N5 CHAIN1_A1
XCHAIN1_A2_1 S02 A02 ENB N6 RLo TP N1 N2 N4 N5 CHAIN1_A2
.ENDS
```

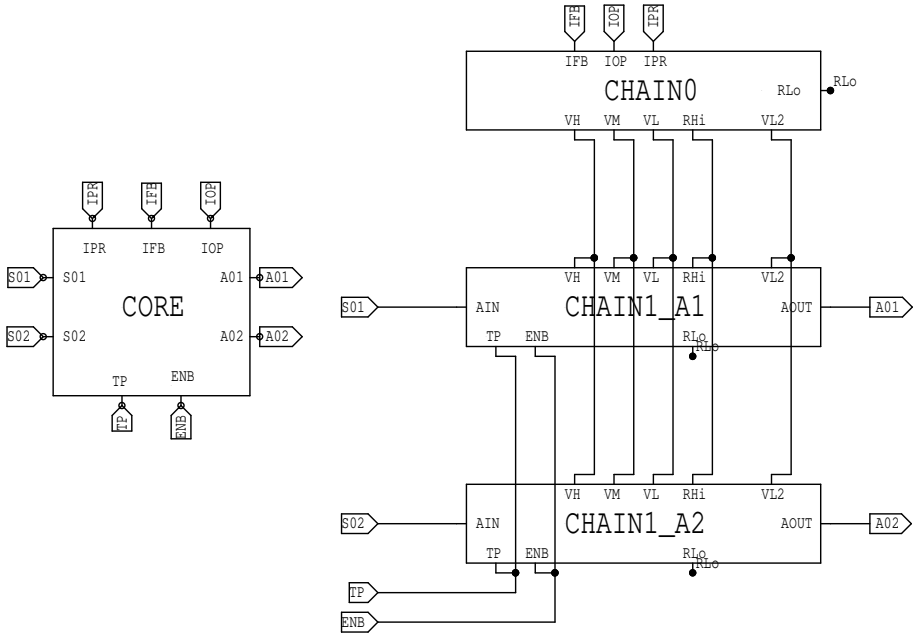


図 A.22: CORE

```
.SUBCKT TOP A01 A02 ENB GND IFB IOP IPR S01 S02 TP VDD VSS
XANAIO_1 A01 ANAIO
XANAIO_2 A02 ANAIO
XANAIO_3 IPR ANAIO
XANAIO_4 IFB ANAIO
XANAIO_5 IOP ANAIO
XANAIO_6 S01 ANAIO
XANAIO_7 S02 ANAIO
XANAIO_8 TP ANAIO
XANAIO_9 GND ANAIO
XANAIO_10 GND ANAIO
XCORE-A_1 A01 A02 N20 IFB IOP IPR S01 S02 TP CORE
XIOR_1 ENB N20 IOR
XPAD_1 VDD PAD
XPAD_2 VSS PAD
XPAD_3 GND PAD
.ENDS
```

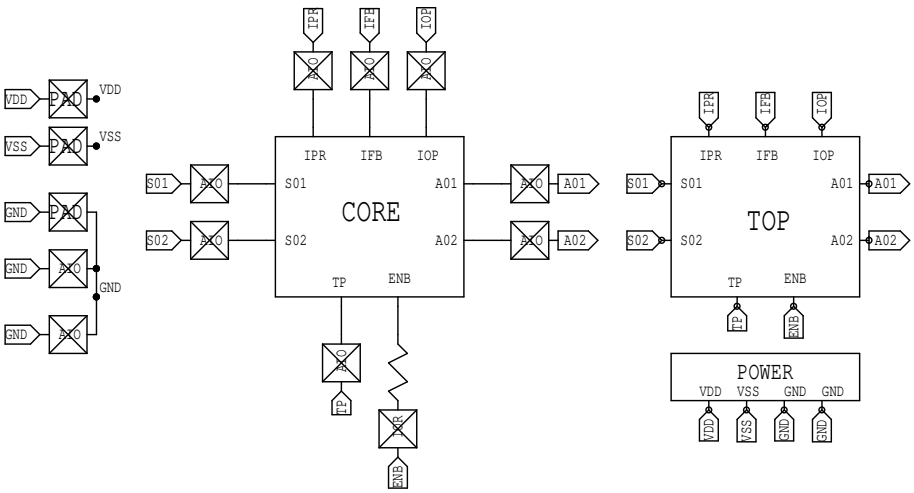

VDD
VSS
GND
GND
GND
PAD
PAD
PAD
AIO
AIO
AIO
VDD
VSS
GND
IPR
IFB
IOP
S01
S02
A01
A02
TP
ENB
CORE
TOP
POWER
VDD
VSS
GND
GND

図 A.23: TOP

謝辞

本論文は、多くの人々の協力により作成することができました。大杉先生、深沢先生には、3 年間もの長い間、御指導して頂けたことに対し深く感謝致します。

コンプトンカメラの開発において、研究室の先輩である富永さんの懇切丁寧な説明により、理解を深めることができました。データ処理等の作業のときには、大野さんにはソフトウェアなどの使い方など多くの知識を頂きました。

LSI 開発においては、ISAS の池田先生には丁寧な御指導を頂きました。回路設計・シミュレーションにおいては、一対一で基本から教えて頂きました。また、レイアウト設計や LSI の評価を行なう際に生じた初歩的な質問に対しても、丁寧な説明を頂きました。レイアウト設計において、広大岩田研の升井さんにはレイアウト作業についての基礎を教えて頂きました。研究室の先輩である木原さん、宇宙研の田村さんには、LSI についていろいろ教えて頂きました。

最後になりましたが、この研究室の一員となれたことは本当良かった思います。おかげで笑いあり涙ありの濃い 3 年間を送ることができました。研究室のみなさん、本当にありがとうございました。これから社会に出ていくわけですが、この研究室で培ったことを生かして、力強く生きていきたいと思います。

参考文献

[1] 富永慎弥 2004 年度 広島大学 修士論文
“高阻止能シンチレータと位置検出型光電子増倍管を用いた宇宙ガンマ線イメージャーの開発”

[2] 木原邦夫 2005 年度 広島大学 修士論文
“位置検出型シンチレーション検出器・多チャンネル読み出し VLSI の開発”

[3] 小林謙仁 2003 年度 東京大学 修士論文
“放射線計測用 VLSI の開発と衛星搭載用 CdTe ピクセル検出器への応用”

[4] 井上北斗 2004 年度 東京大学 修士論文
“2 次元アナログ VLSI を用いた硬 X 線撮像検出器の開発”

[5] H.Ikeda, “Electronics for Particle Measurement” ,KEK Report 2002-8, KEK, 2002

[6] H.Ikeda, “電子回路講義案” ,KEK Report 2001-8, KEK, 2001

[7] Gordon Gilmore,John D.Hemingway
“実用 ガンマ線測定ハンドブック” (日刊工業)

[8] Behzad Razari/黒田忠広
“アナログ CMOS 集積回路の設計 基礎編/応用編” (丸善)

[9] Atsushi Iwata
“CMOS 集積回路の基礎” (科学技術出版)

[10] “LabVIEW データ収集ベーシックマニュアル” NATIONAL INSTRUMENTS,1998.

[11] “DAQ 6023E/6024E/6025E User Manual” NATIONAL INSTRUMENTS,2000.